
高校生のリリカル爆走

建宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生のリリカル爆走

【Zコード】

Z0284X

【作者名】

建富

【あらすじ】

死因は何だったか・・・そう確か女の子が車に轢かれそうだったから助けた時・・・ではなくそのあとに助けた女の子から全力で拒絶されてフラつと道路に出たらバーンとかだった気がする

プロローグ

一言で言つなら俺は転生者。そして此処は大自然

「なんでもせー……」

「」との発端は数十年前

「お主は死んだ」

「はいはいはいはい・・・はい?」

田の前の爺さんはそんな言葉から会話を開始した

普通はもつとなんて言つか。せめて初対面なんだし挨拶くらいはしようよみたいになさー

「混乱するのも無理はない。が起きてしまつたものは仕方ない

「仕方ない。ああ、確かに起きたもんはしゃーない」

「じゅるり~例えそれがワシのワスでも仕方ない」

「わうわう、例えお前のワスでも仕方ない」

「じゃあつじ、んん？！待て！待つんじゃー言ひたむ事とやつてる
事が！」

俺の脳内ではキチンとやつ処理したのだが体はそつも処理してくれ
なかつたようだ

俺は無意識の中に爺さんをボロボロにしよつと動いていたらしい

「つたく最近の若いもんは」

「ねやい、で？あれ？よくある転生系か？」

「つむ、説明が早くて助かるのつ」

確かに若干オタク氣味の俺としてはこのシチュエーションは嬉しい

が！！

シャナ三期を見れない内にポツクリ行くのは思いのほかイライラする

「あと一、二発くらいは

「駄目だ決まつておるじゃあ！」

「駄目か」

「駄田じゅ」

「ひまでも囁つなら仕方ない

「おえひる事とやつてこる事が違つへーーー！」

「ひつやうら俺は余り諦めの良い方では無いいらしこ

「だとあるとアレか。今度は転生特典か

「ナウじゅ、お買に得じゅぞ」

殴つた所が多少腫れている爺さんが何かトランプ的なカードを数枚取り出す

「お買に得ねー」

「ナウじゅやダヘーの中から好きなカードを選ぶが良い」

「好きなカードねー」

悩むなー・・・ん?これってハズレとかんのかな?それだったら

「マジやだなー

まー転生つてこのシチュコだけど十分アタリなんだろ?」
「

一枚か

「これだー!」

「ちよーお甘ー!」

惱みに惱んでブリッジ体制までして惱んだ結果

俺は全てのカードを駆け込みしていった

「・・・。」

「・・・お主い」

爺さんは俺を残念な物を見るよいつな顔で見る

「うわあ見んなキモイ」

俺は結構強欲らしい

「全部取る奴があるか？」

「す、好きなのって言つただろー誰も一枚とは聞いてないー。」

まるで子供の言ご讠詠をいつ俺は高校生

「まーあーやうじやのー」

「み、見るなやー」

「まーいいわい。一いつて言つ忘れたワシのせこせこでもあるようじや
し」

心が広い爺さんに心の狭い俺は精神的ダメージをくらひ

「では特典も決まつた事じやし、やつれと送りつかの」

「うといやつ言えば俺は一体何処に飛ばされるんだ?」

「ん? 惑星」

「大雑把過ぎるー。」

よくある様に足元に穴が開く

がしかし！予想していた俺に避けられない物は無い！

横に軽く跳ぶ

「がそれもまたお決まりの行動じゃよ」

穴があつた

あげくに落ちる瞬間に見えたが最初に開いていた穴の周囲全てが穴だらけだった

用意周到な爺さんに驚き

（で現在）

「惑星・・・か」

ある意味悟りを開きそう俺

惑星つて括りは広すぎるだろ？が。・・・まあ森があるんだから生物がいるのは確かなんだろうけど

「お腹すいた

「いは野生的にサバイバルでもしようか

ああ、でも俺。雑草や木の実の知識とか知らんから何が食えるか分かつたもんじゃねえな

「いはそ次に出会った動物を特典能力でブツチして食べるか

またもやお決まりでガサゴソと音がして草むらから何か飛び出す

「よつしゃーー！食べ物ゲットオオオーー！」

「た、たべ？！わたしをたべちゃうのぉ？！いやああああーーー！」

草むらから出てきたのは幼女だった

しかもスッゲエ美幼女だった

やつべ、食べる話・・・じしよ~

プロローグ（後書き）

始まりました転生モノ！転生系は初めてですか妙な所もあるでしょ
うが気長に見てくださいねっ！

一つ一つの文字数は少ないと思います！
では次回！

前回のあらすじ

俺、お腹減った 草むらから何かが出てきた！ 草むらから美幼女が現れた！ 勢いで食べる発言 美幼女、恐怖 そして現在

「お、おこしくないですかよお」

「へ、うん。ん？いやむしろ美味しそう？」

ジユルリ

「ひこー。」

ロツオオーケー・ペダロー！

「まーーー！」ぬぐぬぐ、ちゅうと道に迷ひかけつてー

「まこーじせこー。」

「セウセウ、行くあひ無しの迷子せんなどだよね。アハハ

「かえるねうひちなこのーのー。」

美幼女は恐る恐る俺に近付き会話のし易い位置で立ち止まる

食ひ発言はチャラにしてもらえたようだす

「無い···かな?」

此処は日本じゃなさそだし仮に日本でも前の家が存在してるとは限らない。ってかそもそも家があったとしてそこに俺の居場所は無いかも

···ん?待てよ

いまの俺ってホームレス?

「わたしとおんなじ」

まさかの衝撃発言

こんな美幼女が俺と同じくホームレスとは···危険だ!

「なら一緒に行こう」

男は狼！男は獸！男は・・・んーと。そだ、男はスケベ！よし三拍子揃つた

「いいの?」

もちろん！

二二二

1

何故か泣き出しちゃった。女の子って難しい。。。じゃなくて

「ちよーえ？！なに！俺悪い事でもしかやつた？！」

「あう、ふええちがうの。わたし、うれしくて」

何だか純粋な子供の心を見ていると・・・真っ黒な大人は酷く傷つく

「くつー! これは強敵だ、深く抉つてくるぜ」

「だ、だいじよ つぶですかー。いやー、しんじや やあー。」

いや、心の傷ですから肉体的には問題無いです

そんなこんなで美幼女と一緒に旅をする事になりました

「あ、これはたべれますよ」

「ほんと? サンキュー」

「いえ」

美幼女の前に住んでいた家はこの辺らしへこの辺の動植物にはじて
も詳しかつた

ついでながら驚く事に美幼女はファンタジー生物まで持つていた

「キュクルウ」

「ドラゴン（幼態）である

「毎度美味しそうだよな」

「な！ フリー ド はともだち です！」

美幼女は俺からフリードを離はける

別に本当に食指が立たないの……まあ……

最初はマジで羨慕されと若えていた

「それにして俺達は一体何処を目指して歩いてるんだろ?」「

「ああ?わたしもむらからば、でた」とありますんでしたから」

とは言え一定の方向に向かつて歩いていればその内、森脱出は出来るだろう

「ギャオオオオーー！」

「見てない見てない」

「つか、うしょ？！なんで…！」

「知らない知らない。俺はあんな表現し難いのを竜とは認めない。リオレウスくらい持つてこいバー力」

田の前の形容し難い竜種さんは明らかに涎を垂らして俺等を見ている

「ね、ねらわれてせんか？」

「キヤロ、良いか？良い事を教えてやる」

「はい！なんですか！雨水さん！」

初名前登場。美幼女ことキヤロ・ル・ルシエちゃん、俺こと雨水秋春・・・あれ？俺だけ名前でキヤロは俺のこと苗字で呼ぶんだ

「耳を塞げ。目を閉じろ。さすれば新たな道がひら

「ひらきません！しぬきですか？！」

セリフの途中に割り込まれた

「ガウガー！」

「そだ！フリードがいた！」

「むりですって！フリードはまだ」「どもですー！」

「どうか・・・なら仕方ない

「逃げよう」

「なんせいです」

— 1 —

「走れ！！」

大丈夫。俺等はまだ死なないはず・・・たぶん・・・きっと・・・だよね?

一話／side 雨水（後書き）

じゃじゃーん！連続投稿！大した意味は無いし書ける内に書こちや
つとけー！的な勢いです！

次回もお楽しみあれ！

私の村は古くから召喚魔法を継承していた小さな村だった
その村で私は小さい頃から大きな力を持つて、その力を恐怖され追い出された

私は村から出てすぐにどうじよつかと森を彷徨つていると雨水さん
に出会った

初めは変な人と思っていたけどとっても良い人で面白い人

「ほんとうにであえてよかつた」

「ちょー・キャロ？…そんなにまにも死にそうなセリフ吐かないで…」

「？」

私は雨水さんに手を引かれ竜から逃げる

もつと私が召喚魔法を上手く使ってたらこんなのがヘッチャラなのに

「あーそだ！」

「どうしたんですか？！」

「特典があつた！」

「とくでん?」

雨水さんは私を草むらに隠すと竜と向き合つた

「…あたしゃへいぢやーあひ」

•
•
•
•
○

あれ？

雨水さんは構えた状態でダラダラと冷や汗を流し始める

「使えねえ」

「え？」

「がーしかしー！そこで諦める俺では無いー！」

痺れを切らして竜が雨水さんを襲いそうになつた瞬間、バッ！と手を前に突き出して竜を止める

「なにを」

「良いかー！竜よー。」

「グルウ？」

「！」のお方を誰と心得るー。」

「わたし？ー。」

雨水さんは私を竜の前に突き出すと私を堂々と竜に紹介する竜は当然此方の言葉は分からないので首を傾げている

「！」のお方は村一番のお偉いさんの娘ー。」

「ちがいます」

「お前も竜の端くれならその意味が分かるだろー。」

「たぶん」とばつりませんよー。」

と思ったのだけど「クッーと竜は振るえ後ずさる

「キヤロの村はお前から竜の長と代々交流してきた村ー。・。たぶん」

「あ、それあつてます」

「だからお前…もし…この娘を襲おうかのなら…お前ら長が黙つてな

いぞ！」

「あれ？ それだと爾水さんが…・・・」

「え？」

ほり、竜が爾水さんを標準付ナリやつたよ

「あれえ？ なんでえ？」

「わあ？」

「竜…キャロに免じてこの場合は譲り受け…」

「なんでえ？ そりなの…？」

「グルウグルウ・・・ウ？」

竜は少し考ふれる仕草を見せるときを向けて歩を止めた

「よつしゃーー！」

「すうじー？のかな？」

「ひじて私達の危機は去つた

「わー！今日は此処で寝よー」

竜に追われたせいで折角真っ直ぐ行っていた道も分からぬ状態になり夜も遅くなってしまったので洞窟で一晩過ごすことになった

「ふつふーん」

男の人と一緒に

いやいや、そんなの村でもよくあつた。うん、あつたはず。．．．
あつたつけ？

「あーそつだー。キャロー」

「ひやー！」

「なに慌ててんだ？・・・まあ良いけど、奥になんか湯が沸いてたからそこで体でも流してたら？」

「あ、ありがと」「やあ、さあ」

行く？うん、お礼言つた以上は行かない

私は奥に進んでお湯の沸いてる小さな湖の淵に来る

後ろを振り返るとギリギリで雨水さんの背中が見える・・・つまり雨水さんからすれば後ろを振り向けば私が見える

「わたしは」「じども」

そつ自分に言い聞かせて服を脱ぐと湯に浸かる

「湯加減どうだー？」

「キュクルウ？」

「あひやへいひゅー！？」

「なに言つているんだ？」

雨水さんがフリードを頭に乗つけた状態で洋服を畳んでおいた辺りに立つて私を見下ろしていた

「溺れてないか不安だったがどうやら足のせん程度の深さだったみたいだな」

私を心配してくれたらしい

「こじても」

雨水さんは田を凝らして私の体をジックリと見る

「んー」

「なんですか?」

「怪我は無いみたいだ。森の中を走ったから擦り傷くらいは覚悟してたんだが」

「ええ?...そつちですか?...」

女の子とじては少しは気を使って欲しかつたです

「?
」

雨水さんが完全に私を子供扱いしている事を肌身に感じました

— 話／side キャロ／（後書き）

さつそくチートかもな特典披露？！と思われましたがこの主人公！チートだけど早々楽してチートにでもなる気はありません！

以上！

あ、誤字等ありましたら指摘下せこ

前回の失敗により俺の爺さんから貰つた転生特典が判明した

それは全部で六つ

説明は面倒なので簡略化させてもらひつ

一つ、万物は全て数字で語れり。

これは世界のありとあらゆるモノをステータス化して視覚情報として取り入れれるつぽい

二つ、天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造つた。カリスマ性の向上、良く分からんが生物を纏めるのが上手くなつたらしい

三つ、我が後ろに道が有りけり。

他人に教える事がとても上手くなつたらしい

四つ、全ての事象を観測する者。

よつは単純に物覚えが良くなつたらしい

五つ、若き日の思い出、老い日の勇姿。

何でも年齢操作系の能力らしい、自他ともに可能と

六つ、白紙不明

唯一真っ白のカードで何がしたかつたのかサッパリ。もしかしたらこれはハズレくじの可能性あり

総合的に判断して・・・戦闘に使えそうなのが無かった、と言つた
爺さんのネーミングセンスにビックリだ

厨一病も真つ青な痛々しさ

まあジックリ考えれば使えそんなんだろうけど咄嗟に使えるのは皆
無だった

「うすひたあん」

さて現実逃避もこれが限界か

幾ら美が付く女の子でも幼女に手を出しちゃ駄目

幾ら隣に寝ているキャロの寝顔がとても可愛くても人間我慢が大切

「クルウ？」

「おひ、フリードか」

先程からフリードが俺の服を噛んで何かから引き剥がそつとしている

「あふ、あん、ふあ~うすいさん?」

「おはよ、キャロ」

「・・・ちかい」

恐ろしい事に何時の間にかにキャロに抱き着いていた

あれ？？マジでいつから？？

「ハハハ、『めん』『めん』

「・・・」

色の無い瞳でキャロはジトーっと俺を見つめる

やめーそんな目で美幼女から見られてると何かに目覚めそうー

「まあいいです」

「はは」

許して貰えたところで朝食

何か食えそうな薬草と木の実。正直肉や魚も欲しいがホームレス生活なのだから文句は言えまい

「マズジ

体は正直

「がまんしてくだセー」

「キヤロは平氣なのか?」の味

「えいよ!あるんでや」

「こや味の話を・・・」

「えいよ!があるんです!」

不味いと思つてゐるんだな

我慢強い子だな~、お兄さん尊敬しあやう

「早く人の住んでゐ所に出て仕事探さないとなー」

「ですね」

「止まれ！此処は保護観察区域で関係者外は立ち入り禁止領域だぞ！」

何処からか声がした

俺とキャロは周囲を見渡すけど誰もいないので空耳として処理

「疲れてるんだろうか」

「そろそろ起きる附近になります？」

「キュクル」

その場で休めそな場所を探し飲み水を取り出す

「つて！貴様等！話を聞け！」

「キャロ、『めん。俺ちょっと寝た方が良いかも』

「わたしもです」

「キュクツー！キュクツー！」

ん？どうしたフリード？

上?

・・・上

人が空を飛んでいる、飛びつて言つか浮くだなアレは

「キャロ、あれなに? 知り合いで?」

「かんりきょくのかたでは?」

「管理、局?」

何の管理だろ? へ

「ようやくか、でだ、貴様等そこで何をしている

「休憩」

「きゅうけいです」

「キュクルワー」

力チツとスイツチを切り替えるような機械的な音がして視覚情報が
変わる

必要な情報を必要なだけ確認する、でないと表示情報が多過ぎて面倒。全力で見よつと思えば人としての構成情報まで見えてくる

お？意外と使える能力の予感！

「あれだな。動物愛護団体の人だ」

「どうぶつ、あい・・・だんたい？」

キヤロには少し難しい単語だったようで途中を省いて発音した

「此処が立ち入り禁止区域と知つてているのか」

「知らん」

「へえ～はつみみです」

「キュー？」

「・・・そつか。此処は立ち入り禁止区域なんだ、なので外に出て
欲しい」

「案内を頼む！」

なんだかなーと言つた感じで局員の方は此方まで落りてきて道案内

をしてくれた

え？此処って就職出来そうな場所が無いの？

II階～side 雨水（後書き）

およそ1500～2000を田処に書いてます！

にしても特典能力名。我ながら痛々しいネーミングー・アハハ

前回のあらすじ

起床 キヤロ枕の抱き心地が良すぎる キヤロに冷めた目で見られる 何かに目覚めそう 朝食 マズツ 職を探して放浪 人が空から声を掛けってきた 道案内をしてもらつ 此処一帯に就職出来そうな所は無いそうで どしょ？

「でー！」

動物愛護団体モグキの人達の所にお世話になる事になった

「う・す・いさん？」

「おつと升を動かさないとな

「やうですよつ

キヤロに促されて食材を切つていく

俺等の仕事は料理担当

「ん？キヤロは結構手付きが良いねえ、将来は良いお嫁さんになり

やつ

「えつ?...あ、あう、わ、わたしは「すこせんの」

「キャロ?...鍋が!」

「え?...あ...すみません!」

危うごとに逃ったが如何にか間に合ひ難を逃れる
やしだやつぱつとなキャンプみたいな所での定番。カレーを完成
させむ

「たんと皿し上がれ!」

「おおつ!...スゲ!...な!...お前等!」

「ほんとお美味しそう!」

かよひび団体が帰つてきたので配膳を行なう

「やこや、お前等//シドには付いてくる?」

「...」

「首都だ、首都」

首都かー、それなら就職先は多そうだ

「行く！ 行こう！ 今すぐ！」

「今は行かねえよ。こっちの仕事が終わつてからな」

「チツ役立たず」

「んだとつ？！」

「けんかはダメですよっ！」

卷之三

何故か俺だけおたまで殴られた

キヤロが団体の女性に囲まれてドンドンと強くなつてこく・・・

「ふう一腹一杯」

「ですね」

「キュックー」

食事も終わり、今度は食器洗い

「おつ? 何だお前等、仕事熱心だなー」

俺等を道案内してくれた団体のおつかやん

「どうした、おつかやん。」
「何が用か?」

「様子見だ。様子見……にしてもお前等、なんか夫婦みたいだな
? 兄妹だっけ?」

「ふつー! ふつふ! ですか? ...」

「違うぞバカヤロー、俺とキャラコ? なん? 旅仲間かな?」

「なんだそりや」

「わ、わたしはふつふが・・・

「え? なんだつて?」

「そうそう、云々といつと想つたんだが//シリが四日後に行く予
定だからな」

「さうか、サンキュおつかやん

「ねつー。」

良い奴だな、おつちやん

一日後

事件が起こった

まあ俺にとつては大した事件でも無かつたはずだし関わらないいつも
りだったのだが

「おらあー！お前ら動くなよー！動くとコイツがどうなつても知らねえ
ぞー！」

「雨水さんー助けてー！」

「黙れー！」

相手はこの辺一帯を荒らす密猟者らしい

愛護団体の皆が追つっていたのだがこのキャンプに入れ偶々居合わ
せたキヤ口を人質に取らてしまつた

「クソツ！」

「チツせめて戦闘に向いた特典があれば」

向こうは武器持ち人質持ち

密猟犯罪組織末端 魔力ランクD 敵意有り 所有魔法はプロテクトとシユーター

・・・組織？

「おっちゃん。もしかしてコイツって仲間とかいる？」

「ああ？！いないはずだが・・・」

「キャロを無事に取り戻す方法か」

戦力的には余裕で勝つているがキャロを櫛にそれでいて以上はそもそも言えない

しかも、もしかしたら近くにアイツの仲間が潜んでるかも

最悪だ

「密猟者ー！聞け！取引があるー！」

「な、なんだー！」

かなりの焦っている。味方が居るならもっと余裕に構えて居そ�だけど居ないのか？捕まりそうだったから切り捨てられたとか

「その子を放せー！うすればお前の条件を何でも一つ叶えてやろう！」

「信じられるかー！」

「ん？だがいまのお前の状況はかなり悪いぞ？逃げるのも此処はお前にとつて敵の本拠地、既に囲まれたようなもんだ。逃げるのはまづもつて不可能

「…へへ、そんなのコイツがいれば

「ひい

持っていたナイフをキャロの首に突きつける

マジで「アイツ追い詰められてる…・・・思考も鈍ってるみたいだし交渉がし難い

表情に圧迫感に歎くでいるとおっしゃさんが何やり俺で合図

「つらのくせむりこひをませている

成る程、こまま俺に犯人の注意を惹きつけて置いて欲しいって事か

「そいつが居れば何だつてんだ？」

「あん？」

「もしお前がそいつに危害を加えたら本当に歯止めが切れてお前は終わりだぞ」

「くつ・・・い、いいのか！お前は…コイツに消えない傷が付いても」

「ハッ！別に良いに決まつてんだる、勘違いしてないかお前は俺とそいつは他人で更に言えばそいつは別に此処の自然保護隊の関係者でも無い。この意味分かるよな？」

犯人は苦い顔をするがキャ口は放さない

・・・まだか

「良いんだぜ？ほり、やれよ」

「・・・雨水さん」

「ほ、ほらー良いのか！コイツもお前に助けを求めてるみたいだぜ

「！」

「誰しも求めた結果が手に入る訳じゃねえよ。いまのお前みたいにな」

「な・・・マジかよ。コイツ」

警戒が緩んだ

そう感じた瞬間に犯人のナイフに光の縄みたいなのが幾重にも絡まり取り囮んでいた保護隊の皆で犯人を取り押さえた

これで犯人も捕らえキャロも無傷で取り返す事が出来た・・・だけどキャロはそれから簡易テントに引き籠もつた

四話～side 雨水～（後書き）

主人公は高校生くらいの思考力で考えられる説得で敵に挑みます

なので正直、いやいや相手も色々覚悟してんだしその説得で如何に
かなる訳ねえだろと言つ話が持ち上がりますが・・・まあ追々と説
明するつもりです

私を助ける為だつたつて事は分かつてゐる

「キヤローーー！」めんつてー！ほんとあんときはアレが最善だつたんだつてーー！」

簡易テントの外で雨水さんが私に謝つてゐる

私を助ける為だつたとは言えあそじまで言われるとは思つてなかつた

雨水さんと私がなんの関わりの無い他人だなんて言つて欲しくなかつた

私達と仲良くしてくれた保護隊の皆と関わり無い同士だなんて言つて欲しくなかつた

「キヤローーーお腹すいてるでしょーー！」飯あるから出でておこでーー！」

更に言つなら食べ物で女の子を釣るのとする雨水さんの根性が納得できない

私はそんな食いしん坊ぢやないです

「こつあせんー。」

「え? いらなー? キヤロに食べて欲しくて愛情込めたの?」

「食べますー。」

・・・あ

したり顔の雨水さんがオムレツを持って私の皿に屈んでいた

「ひさひさ、やつぱつキヤロには食べ物だなー。」

馬鹿な私を憎みます

田標のままで行きの日

あれから仲直りをしたとは言え雨水さんも負い田を感じてこのよう
で一つだけ何でも出来る限つのことをしてくれると約束してくれた

「ありしたーー。」

「ありがと! やることましたー!」

「キュクルー！」

「おう！何時でも遊びに来いよ！」

私達は保護隊の皆に別れを告げ、シードで雨水さんの就職先探しの旅を始めた

「これより一局員認定試験を始める！」

「はーーー！」

料理屋。ホテル。一般企業。様々な所を巡ったが私と言つ荷物持つた雨水さんを雇ってくれる所は見付からなかつた

そして私達は保護隊の皆を思い出して局員になつてみようかと考えた

「まずはデバイスの起動！」

「セットアップ！」

「え？デバイス？ああ、さつきのかセットアップ」

私と雨水さんは局員の服装に変わる。たぶんセットアップ時の初期設定なんだと思う

雨水さんは驚いている。そう言えば雨水さんは魔法を見る度に驚いていた・・・あれ?もしかして魔法を知らないんじゃ

「次! 射撃魔法!」

「はいー・シユートー・

「んん? 成る程、やっぱMPが足りませんとか出そうだ。シユートー!」

ポスンと音がして雨水さんの魔力弾は消えた。魔力弾の形成に失敗したんだと思う

「・・・次、儀式魔法」

「え? 儀式魔法ですか?!」

「はい、小規模でも構いません。これはランクを決めるテストなので」

「はい」

私は詠唱を始める

横田でチラつとだけ雨水さんを見ると何だか壮大な呪文を唱えていた

・・・ただし魔力が全然通つてなかつたけど

その後の色々な事が続く

「以上！終了です！」

結果

雨水さん 魔導師ランクF 非戦闘員 一般局員

私 魔導師ランクC レアスキル持ち 三等陸士

あれ？役職上では雨水さんを超えたやつ

「戦闘外要員つて訳か、まあ別に戦闘したい訳じゃないから良いか。
な、キヤロ三等陸士殿」

「雨水さんのいじわるうー」

敬礼した雨水さんは何だか遠く思えた

私達が管理局入りして早一週間

本当早いな。私の召喚魔法はまだ未完なので戦闘では役立たずだけ
デスクワークなら慣れたから結構イケてると思う

「よー・キヤロちゃん！あれ？雨水は？」

同じ部署で仕事をする人達はもつ気軽に私達と話してくれる

「雨水さんですか？や、あさつきお偉いさんと会つて出
掛けましたけど」

「お偉いさん？ああ、アイツ情報整理や講師だけは得意だからな

「そなんですよ。雨水さん本人は他人任せ嫌だなーとか言つてま
したけど」

「ハハツ、確かにアイツは教えるのは得意だけど自分はよええから
な」

「む・・・。」

「お？っとそりゃ睨まんでくれって悪かったってキヤロちゃんの彼氏

は強い強い」

か、
彼氏？！

いや私と雨水さんはまだそんなんじゃ。まだ、そう、まだだよ！

「アツハハハ、ほんとうに愛いなキヤロウちゃんね。キヤロウちゃんね
ウチの部署の花だよ。」

雨水さん遅いなあ・・・今日は一緒に帰れるかな?

五話) side キヤロ (後書き)

行き成り訳の分からぬ技術の魔法を使用しろと言われても当然不可能な主人公でした

前回のあらすじ

仕事探索 特に秀でた物の無いので中々受からず 仕方ないので局員になつてみよう 魔力はあつたが魔法は度下手 まあそれでも戦闘だけが仕事では無いので非戦闘要員として採用 デスクワークは初体験（高校生ですから） 中々不慣れだが万物は全て数字で語れり（痛々しいので自分では觀察眼と呼称）を使いロストロギア専門の情報整理担当就任 我が後ろに道が有りけり。（一々痛々しいので講師の才と呼称）が何処かで発揮されていたのか何と無くアドバイスを聞いた偉い人がスカウトしにきた でいまの生活に至る

「たつだいまー！」

現在俺は局の独身寮に住んでいる

まあ節約だわな

「おかえりなさいー！」

「キュックー！」

エプロン姿で出迎えてくれるキャロを見ると何時もながら感激してしまってなる

最近少し背が伸びたらしく幼女扱いは悪いかと思うので今度から
美少女と称そうと思う

とにかくこんな美少女がエプロン姿で出迎えてくれるなんて隣の同
じ独身寮に住む同僚から睡を掛けられそうだ

「料理中だったか？って言うか今日は早いな」

「ん、ちょっと」

キヤロが一瞬だけ暗い顔をしたのを俺は見逃してはいなかつたが今
は放つておこう

美少女の料理が先だ

「あの、すこしだけ話をきいてくれますか？」

「料理が先だ」

「ええ？！」

あ、口に出す言葉じゃなかつた

人間は誘惑に弱い生き物だと信じて疑わない！

「 もう一皿水をさりてばー。」

「 あははー、」めぐめぐ。キャロの作った「飯の匂い」が凄い誘惑で

「 はあーなり食べながらでこーですから」

「 うそ」

俺が箸を進めるとキャロは俯いた状態でポツリポツリと話しう出す
キャロよ・・・魚の皿玉の部分をそつグリグリとしないでくれ・・・
ちょつとグロー

「 じつは、今田もフコートの竜宮城をしつぱこしかやいまして」

「 ふえーひつはー、ほれはひゅー（ぐーぐー失敗、それは凄い）」

「 ふれはてまかー。」

「 ふえんふえん（全然）」

「 食べるかしゃべるかどつちかに」

「 ・・・。」

「 番ぬほつにせんねんして下せこ」

え？ せっかく食べの方を選んだの？ ・・

「 ついでに何かせひ食はせて貰つて貰つたよね？

「 そうだー！ 雨水さんー！ わたしに魔法制御をおしえて貰いたいー！

「 ふえ？ ふあんて？ （え？ 何で？） 」

「 まだ・・・いい加減にしないと、フリードが火をふきますよー。」

「 ん？ ！ んぐつ・・・『ホッ、『めん』めん、キャラの』飯が美味しいから」

「 なら許します。つまらないですけど」

やつぱり褒められるのは嬉しいのかな？

それからキャラがこれまで悩んでいた事を打ち明けられる

キャラのあんな泣き顔を見たのはたぶん始めて。俺はそんな急激なシリアルに耐え切れず

「 フリードおお」

無言を貫いていたフリードに助けを求めた・・・アツサリ裏切られたけど

なんとフリードは俺とキャロと一緒に見て食事を再開した

「すみ、すみませんー」こんな、めこわくかけるつもつじやなかつた
んじすナビ

「氣にすんなつて」

「きこいってくれてありがとうございます」

「おひ・・・飯、冷めたか。まあ美味にから良じナビ」

「あ、あた、あたためましゅー。」

ん?今更な氣もするし冷えてても美味しいんだけどなー

「噉んだキャロ萌えー」

「フリードせひやつて」

「キユクーーー。」

フリードの口からギャグを通り越した火力の炎が飛び出した

「んがり上手に焼けました？」

最近キヤロの俺に対する扱いが若干乱暴な件を一体何処に相談すべきか考えながら先生と呼ばれるのも慣れた今日この頃

「良いか？キヤロ、そもそもお前のフリード制御ミスは技術面ではなく精神面が弱いせいだ」

「はあ

「でその強化を図りつゝ俺は考えているんだが当然策はある」

「たよりになります！」

「おひー！」

俺は昨夜の内に纏めておいた資料と訓練メニューを渡す

この時の俺は講師の才を完全に舐めていた

六話～side 雨水～（後書き）

原作よりキャラが少し強くなっています

前回のあらすじ

寮帰宅 キヤロ可愛い 美幼女から美少女にランクアップ キヤロ可愛い 魚の目が放送禁止な感じに キヤロ可愛い 相談を受ける キヤロ可愛い フリードに焼かれる キヤロかわ・・・ キヤロに講師開始 で・・・

「後悔先に立たず」

「あははっ秋春！おもしろーー！」

田の前にはキヤロ似のナイスバディのお姉さんが立っている
この状況を作った原因は俺にある

ほんの些細な事だった

特典能力の一つ。若き日の思い出、老い日の風姿。（年齢操作と呼称）を試そうと思つただけだ

そして身近な実験台がキヤロだつただけだ

「えと、キヤロ・・・さん？」

「ん？ どうしたの？ 秋春、変な物でも食べた？」

近ッ！ 近い近い

こんな美女に迫られるなんて想像もしなかつた

つてかキャロつて成長したらこんなんだ

「なるほど、年齢操作は肉体だけでなく精神も成長させれるのか」

「ん？ つと言つか秋春ちょっと若くなつた？」

「お前が年老いたんッ！」

殴られた

しかもグーで

「あ・き・は・るう〜？ 女の子に老けたなんて禁句だよ？」

「ちょーまーなにその魔力パンチ！」

「え？ 秋春が考えたんじゃん・・・ほんとに如何したの？ 今日の秋春変だよ？」

そもそもせつときから呼び方が秋春つて親しくなつてゐるし

「えつと俺達つてどんな関係だつけ？」

「え？」

笑つていたキャロの顔がどんどんと曇つて涙を流し始める

「じめん…ほんと…話を聞いて…」

泣き止まないキャロに如何にか今までの経緯を説明する

暫らくしてようやく理解出来たのかキャロは納得顔になつた

「あー、それで若いのね・・・ん? だとしたら私にとつて此處は過
去つて事?」

「え? あ、そつか」

「へー秋春にそんなレアスキルがあつたんだ」

「で?俺とキャロの関係は?」

「それは秘密! だつてそうしないと詰まらないでしょ?」

密着した時に当たった柔らかい感触が何とも言えず顔を赤らめてしまった

「ん？あーー秋春ったら、ふふつそつ言ひとひはー緒だね」

「・・・あ、そう言えればフリードの制御は上手くこいつてるか？」

「え？あーあの時の・・・あははつー安心して！秋春は教えるのは天才的だから！」

「のは？」

と言つ事はやはり俺本人は余り強くはなつてないのか

失言と気付いたキャロはバツと顔を背けてアハハと苦笑い

「さて、そろそろ戻してよ。このままだと色々ウツカリ喋っちゃいそうだから」

「分かつた」

「じゃあね、秋春」

この後のキャロにさつきまでの記憶は無く本当に成長を遂げていた
ようだ

前回の実験で自分の能力がある程度把握し、改めて俺ＴＵＥＥＥが実現できない可能性アップを実感した

「はあー」

「うーす、どした？ 雨水」

「ああ、ヒューズか」

「ハイシはヒューズ。俺と同じく非戦闘要員で同じ部署の同僚

「いやほらキヤロみたいな小さい子までもが戦いの場に出てるのに大の大人の俺らがなーっと」

「ハハツ、そればかりは仕方ないさ。でもお前さんはまだマシだろ
雨水先生！」

「あんまり好きじゃないんだけどな、その役柄

バンバンと強く背中を叩かれ渋々モニターに視線を移す

隣ではヒューズも俺と同じくらいこの速さで仕事をしている

「そいやお前管理局のHースって知ってるか？」

「あ？ 知らん」

「だよなー、お前さん辺境の地の出ででーこー」

「るわー」

「わりいわりい、何でもリンクティ提督が持つてきた若いHースで入りたてで局員をバタバタ薙ぎ倒してるらしいぜ」

そりや・・・なんて言つか・・・

「恐ええな

「ハハツだな。俺達には縁の無い話だ」

「ん？ つと時間だ、行ってくる

「外回りか？」

「士官学校に講師だよ」

「ガンバ雨水先生！」

つたくこんな年の人間に講師だなんて管理局はよほど人材不足らし
いな・・・つて勤めてみてそれは身に染みる程分かってるんだけど
な

七話／side 雨水（後書き）

年齢操作は下手に自分に使い若返らせちゃつたりすると転生前に戻つて戻れなくなるので基本他人掛けのスキルになりそうな予感

感想お待ちしています！

八話／side キヤロ／

どうも、局勤め一年のキヤロ・ル・ルシエです
何故か私が訓練所を破壊しているといまエースと名高い人の目に付いたそうです

本当に世の中不思議です

「始めまして」

「は、はじめ！まして！」

「リラックスして。ね？」

「は、はい！」

金色の長い髪の柔らかい笑みをしているこの人。確かフェイド・テ
スター・ラッサ・ハラオウン執務官つて名乗つたはず

なんで執務官なんて偉い人がいまだ三等陸士の私に声を

「えっと確かキミは週に一回くらいのペースであそこで練習している
よね？」

「え、あ、はい。何時もすみません」

本当に毎日でも行きたいけどあの迷惑看見る田がちよつと悪い
まあ何時も訓練所を滅茶苦茶にしてるんだから迷惑そいつは
は当たり前だけど

「あ、頑張ってる姿みてたよ」

「ありがとウイザードます」

「凄いね、その年で努力家だ」

「いえ、ぜんぜん成長しませんから・・・」

「そんな事ないよ、少しずつだけど確かに成長してる」

この人の言葉は嘘でもないし[冗談でもないと自然と分かる。そんな
感じの声色をしていた

何だかタイプは違うけど雨水さん見てこる気分になつてきた

雨水さんもこんな風に包み込んでくれるタイプの人だ

「あ、あの、わたしの用があつたんじや」

「そうだった」

ポンとうつかりしていたとした仕草は少し天然っぽくて可愛かった

雨水さんに会わせないようにじょりつと

「もし、キミがよかつたらで良いんだだけ……」

「？」

「家族に、なりたいんだ」

「はい？」

「」のひとはなんと？

かぞくになりたい、かぞく、かぞく？フタミニーの事だよね、うん

「えと、その、あ……はい？」

「い、めんね、混乱させちゃった」

「い、いえ」

「実は少しキミの事を調べさせてもらったんだけど保護責任者が登録されてなかつたから力になれないかなって」

「ごめんなさい。その理由だとマイマイ分かりません、私に保護責任者が居なかつたとして何故貴方がその保護責任者を名乗り出よつと思つたのか

私を手に入れた時のメリットとか無いですよ、家事は得意ですけど

「な、なんで私なんですか？」

「？」

「私いがいにも孤児なんてたくさん」

執務官は少し寂しそうにして笑つた

「ただ、うん、そう。ただ此処で練習をしているキーナが寂しそうだつたから・・・それを放つておけるほど私が良く出来てないって感じかな?ただの自己満足だよ」

此処での私が寂しそう?

それはそうだ・・・だって此処には雨水さんが居ないんだもん

「そ、そだんしてからでも良いですか?」

「やつだん?」

「旅仲間に」

「え?」

今更だけど私と雨水さんの関係を人に教える時、旅仲間くらうしか無いのに気が付いた

私は雨水さんと一緒に住んでいる男性独身寮に帰るとすぐ今日の事を話す

「へーそんな物好きが居たんだな

「ものぞきですか? ? !」

「うん、ほら子供一人を育てるのって結構大変らしいし

あれ? もしかして今日の雨水さんはちょっと真面目モード? .

「んーそうか、訓練所の破壊を参考に所が引っ掛かるな。アレか? 誘つて来たのはテロリストか?」

「・・・フリード」

「ちょー止めるフリードー俺は治癒魔法とかは無理なんだ・・・うわああーー！」

あんな優しい人をテロリスト扱いなんて信じられません

そんな人はフリードの炎で丸焼きにするべきなんです

「さて、もういいですか？」

「あ、ああ、悪かった。テロリストでも人だもんな、きっと不良が猫を拾う感覺なんだろ？！」

「フリード」

「冗談！冗談だつて！悪かつたつて、ふーん。テスタロッサ執務官つて言えれば近頃噂のエースかヒューズから聞いた」

ヒューズさんから？最近私は雨水さんとは部署が違う場所になつたからヒューズさんとも会つてないな

お菓子とかくれる良い人だつたと思つ

「別に良いんじやないか？キャロが良いつて思つなら

「でも」「せめて行くかもですよ?」

「団員同士だし会える時には会えるだろ・・・それに、今は平氣でも後々保護者が居ないってのは不便だからな」

本当は雨水さんに家族になつて貰いたいけど雨水さんは父親つて感じじゃないですよね

お兄さんは近いかもですけど運で私が年上なんじゃと思つ時とかあるし

それに私の目標は雨水さんのお嫁さんですしテスタロッサ執務官の申し出は渡りに船では無いか?

戸籍登録上他人なら結婚年齢になれば可能です

「よし!決めました!」

「おおー、で?如何するんだ?」

「わたし!テスタロッサ執務官の子になります!」

「なら今度会つた時に名前で呼ぶ許可を貰うんだな。名前で呼ぶつてのは親しい証だからなキヤロ」

「分かりました!雨水さん!」

・・・あれ？私って雨水さんの事は苗字で呼んでません？

八話／side キヤロ／（後書き）

今更ながら苗字で呼んでいる事に気付くキヤロでした

九話／side フェイト／

キヤロ・ル・ルシエ。私があの子を見掛けたのは一ヶ月くらい前の事だった

あの子は週の終わりに訓練所に顔を出し迷惑そうな大人に何度も頭を下げて場所を借りていた

何でそこまでするのかとても気になつて訓練の様子を少し見せて貰う事にした

あの子の田はとても真剣で何か一つの目標に向かつて走つているような、昔の自分と被るよつた気がしてならなかつた

そして訓練後に見せる寂しい氣な顔がとても印象に残つた

だから私は悪いとは思つてながらあの子の経歴を調べさせて貰つた

小さな村の出身で村を追放された所を自然保護隊に保護されミッドで局員試験を受けて見事合格 現在保護責任者無しの孤児扱い 住んでいる場所は×××部署の男性用独身寮

「？」

何で男性用の独身寮に？

まあ流石に小さい子一人で生活はつて事で多分保護隊の方の多い寮に居るんだろう

私は何度も見掛ける内に声を掛けたくなつた

力になりたいつて思つた

だから保護責任者を名乗り出た

あの日から一度一週間。多分今日もあの子は訓練のためにやつてくる

「テスター・サ執務官…おはよーい! ジョーコーですー。」

「おはよー! …えとキャラコって呼んでも良いかな?」

「あ、はい! もちろんです! ……そのわたしもフロイト執務官つて呼んでも良いですか?」

「もちろんだよー。」

キャラコは嬉しそうに笑うと訓練所の中に入る

そして真剣な顔をして独自の訓練メニューを見ながら訓練を開始するん、どんなメニューでしてるんだる?」

「え、えとキヤロ?」

「ふえ?—フロイドか・・・じゃなくてフロイド執務官?—」

「それで良いよ」

キヤロのすぐ隣に展開されているモニターのメニューを読んでみる

・・・凄い

かなり考えて作ってある。模範的なメニューじゃなくてキヤロの為だけのメニューって感じ

「これ、キヤロが?」

「い、いえいえ!」これは雨水さんが

「雨水さん?」

何処かで聞いたような

とつでも最近だったような

「前にはなした旅仲間です」

「あー前も思つたけど旅仲間つて?」

「わたしが村をでてすぐに出合ったひと？」

「自然保護隊の人？」

「ううん、わたしとおなじで帰るところがないって言つてた」

それからも少し話を聞いていたが段々キャラ口も「あれ？」と首を傾げる事が多かった

今度会つて見よっかな

「あー…そうだ！ フロイトさん！」

「あ、はい、なに？」

「う、この間のはなし…」

ドキリと緊張する

もし断られたら如何しよう

「わたしを…フロイトさんの家族にしてください…」

「…・良かつたあー」

キヤロは少し安心して気が抜けた私を心配そうな顔で見ている

「だ、だいじょうぶですか？」

「うん、大丈夫、嬉しいくて。ちょっとね」

「よかったです」

今日にでも手続きしないと

あ、それに雨水さんにもやつぱり会わないとな

キヤロの正式な保護責任者になつたのは申請を通した次の日で実際の所は何か変わつた訳ではないので少し現実的な実感には欠けます
だけどいまの私の緊張の度合いは稀に見る度合いです

恐る恐るインターホンを押す指が震えます

「ふあ～ヒューズか？こんな朝つぱらか～」

キャロの庄さんでこる住所から出てきたのは私と、この年の男性

多分、雨水さんだ！

「あ、あのー、始めてー、フロイド・テスター・ラロッサ・ハラオウンですーー」の度はキャロ・ル・ルシードさんの保護責任者にならせて頂きました！

「・・・あん？」

雨水さんは田を締めて田を擦る

そして私の顔をジックリ見ると、田扉を閉めた

「あ
」

もしかして嫌われた？！

そう想っていたが中から何か楽しそうな声が

『キャロー！なんかお前の母親？いんぞー』

『フロイドさんはお姉さんですーー』

『つてか来るなら言えよーー何も準備してねえつてー、アイツ執務官な

んだから俺つて失礼したらすぐ首飛ぶつて！』

『あははっ！ フェイトさんはそんな事しませんよ！』

『嘘だー！』

『・・・フリード』

静かになつた・・・歓迎はされてるよね？

「おはよ〜！ やあこまます！ フェイトさん〜！ いま雨水さん起きたばかりでシャワー浴びてますから入つてゅうべつしてくださ〜！」

キヤロが笑顔で扉を開けて出でた

それは良いんだけど何時もキヤロと一緒に居る、子童のフリードが何か咥えてお風呂場らしき所に連れて行つていたのは見なかつた方が良いのかな？

九話／s i d e フェイト／（後書き）

主人公の組織的地位は最下層付近なのでエースで執務官なフェイトには頭が上がらなかつたりします

前回のあらすじ

早朝インターネットで目を覚ます ヒューズと思い込み扉を開けると執務官殿 寝起きの状態なんてかなり失礼な状況で焦る 取り合はずキャロのせいにしてみたらフリードが火を吐いた 次に起きたのは顔面にお湯を掛けられてから 即効身支度整え再度玄関に居ない・・・ ほつとしてリビングに戻ると座っていた

「キャロ・ル・ルシエさんを私に任せて下さー!」

目の前にガチガチに緊張したテスター・サ執務官が座っています。
どっちが上司なんだか分かつてゐるのか?この人は

「ようはキャロを奪いに来たと・・・ふふつやれるものならやつてみる

「ええ?!

「雨水さん。いつたい何時からねてたんですか?」

最近キャロが恐いです

「「ホン、冗談はさておいて。キャロの事は有難う御座います、そして宜しくお願ひします」

「え？あ、」シリシリヤ

「さい、といひで今口など様な用件で？」

敬語も出来る高校生なんだぜ！……これであつてるかは知らんが

「あ、いえ、ただ挨拶をと」

「そうですか、それは光榮です。お噂はかねがねですよHースさん

「恥ずかしい限りです」

「ところで些細な事ですけど何故キャロを引き取つたとへ。いついつては変ですが変わり者ですね」

いや、マジで訓練所を破壊してゐる所を見掛けでスカウトとかクーデターでも考へてゐるのではと思つても仕方ないよね？

「その、なんて言いますか。放つておけない感じだったので

「なるほど……百合な方？」

「なつ！違います！」

「ではキャロは嫌いっと」

「ちがつ！違うよ！違うからね！キャロ！私は大好きだよ？！」

「え？ あ、はい知っています」

「ほほう、やはり執務官殿は幼女好きっと」

何だかこの人、面白い人だな

あわあわと俺とキャロを交互に見るテスタロッサ執務官は割と普通の女の子って感じだった

あ、そう言えばキャロ幼女は撤回してるんだった

あれからテスタロッサ執務官殿とは割と仲良くなつた。あ、フェイ
トって呼べって命令だつたな

キャロはと言つとフロイトさんの所と俺の所をウロチヨロとしている

「唐突だな」

「死ね！」

「お前なんか死んじまええ！」

何時もは冷静情報収集担当のヒューズ三等陸士

なんだか今日は情緒不安定みたいだ

「武装隊の花のテスター・サ執務官とお話なんて死んじまえー。」

「お前も先日話しただろが」

「アレは仕事だ！そしてお前のはプライベート！全然違つー。」

「分かつた。お前がフェイトさんのファンと言つ事は何だか凄く分かつた」

メンドクセヒ

報告ですが、晴れて何かの功績で俺も二等陸士にランクアップ・・・つてこれが一番下位の階級名なんだけれどね

キヤロは一等陸士に昇格してたから結局俺の上位？に当たる位置だし

「こじても気を付けろよ」

「なんだよ、急に真面目に

「ああ、Hリートの周りは危険が付き物だ、キャロちゃんはまだ幼いし正直現場には早い」

「・・・」

昔はキャロも同じ部署だったからか心配なようだ

アップダウンの激しい奴だな？

「幾らテスタロッサ執務官が保護責任者になったからってキャロちゃんにとって頼れるのはやっぱ前さんなんだからな」

「るせー。分かってるやー」

だから俺だって少しばかり訓練してんだろうが・・・全然成果でねえけど

マジで何で他人の指導はこんな上手いのにそれを自分に応用出来ないかなー

あの特典他人限定とかって縛りでもあるのか？

「羨ましいなー！なー！俺と変わねえか？」

「・・・そうだな、俺がフリードの餌食になっている瞬間だけ変わつてやるよ」

「やつは遠慮」

ヒューズと暫らく喋っていたら上司に後ろから書類で殴られた・・・
あのハゲエ

十話～side 雨水～（後書き）

今後の参考までに聞いておきたいのですが、オリキャラは増やすべきでしょうか？

お気軽にして意見投票、宜しくお願ひします！

十一話～side 雨水～

あらすじ

キャロの保護責任者が正式にフェイトさんに決定 フェイトさんが挨拶に来る なんか素直でからかうと面白い からかい過ぎて次の日首飛んでないか少し不安になる 心が広いのかそんな事はなかつた ヒューズに恨まれる ちょっとシリアルス で親睦を深める為に遊びに行く事になった

「うーつす、待ちました?」

「全然待つてないよ」

「おなじくです」

「雨水さんーじょせいを待たせるとは何ー」とですかー」

「キュックルー！」

フェイトさん、謎の少年、キャロ、フリードの順でお送り致しました

「二人対一人でそんなに待つてないで決定だな

「キュクーー！」

「お前は竜だらうが

竜の数え方は匹だ！・・・たぶん

「ハハ、それじゃ行こうか」

「ですね、それにしても親睦深める為に遊園地つて子供みたいな発想だな！流石キャラ」

「え？これってたしかフェイトさんが・・・」

ん？

「うひうじも・・・かな？」

「フリード」

「キュク」

え？俺なんか悪い事言つた？

流石のキャラもこんな所でフリードに炎を吹かせる事はなかつたが代わりに噛みつかれた

「雨水さんっておもしろいですねー。」

「やうか、まあそれは良かった・・・といひでお前誰よ?」

「え?」

いやいや、そんな悲しそうな顔をむれても俺つてお前から血口紹介もされてねえんだぞ?」

「・・・雨水さん」

女性陣から冷やかな目が

「いやいやー待ってー!俺そいつの名前さえも聞いてない!」

「・・・あ」

ようやく知れたがコイツはエリオ・モンティアル。フュイトさんが保護責任者を引き受けた子供らしい

まあキャロ(男v女)ってところか

「なるほどなー、一応知っていたみたいだか。俺は雨水 秋春な。
わざわざみたいに雨水でも、いつそ秋春でも好きに呼ぶが良い」

「秋春、兄さん？」

「「え？」」

「え？」

何故か見詰め合ひつ女性陣とエリオ

え？え？なに？・・・あ、そつ言えば俺を名前で呼ぶのってエリオ
が始めて？

「ジヒシト」「ースターかー久々だなー」

「の、乗るの？雨水さん」

「早そうですね」

「楽しみです！秋兄さん！」

フヒイトさんとキャラ口は恐る恐るか。ま、そんなもんのかな？

つて言うか秋兄さんつてちょっと微妙くないか？秋兄か兄さんかどちらかに別けるべきじやないか？

ジエットコースター

卷之三

「アーチー！」

お化け屋敷

「やつは作りもんだな」

「張りほてですか？」

コーヒー カップ

「そんなに早くないと思つが」

「一回目は、二回目は、三回目は、」

ウォータースライダー

「「 キヤ あああ あああああーーー」」

「水ウゼン」

「濡れますね」

巨大ボールプール

「「 キヤ あああ あああああーーー」」

「これは叫ぶ所か? ってかボール痛つ。エリオ! テメエか!」

「アハハ! 楽しいですね!」

カフェテリア

「「 はあはあ、ゴホゴホッ」」

「お前ら叫びすぎだ」

「だ、大丈夫ですか?」

カフェの屋外テーブルでくたあーと女性陣一人は倒れている

ん? 叫ぶ様なアトラクションは俺的には最初の一いつくらいだったが

「あ〜く〜、雨水さんってタフですね」

「キャロはともかくフェイトさんまで?」

「エリオは元気だね」

「フェイトさん? 僕もつかれましたけど。楽しかったですから」

昼食が運ばれると俺とエリオは食べるが一人はまだ復活していない
つてかエリオの食べている量が異常だ・・・フェイトさんが払つて
る食事代とか凄そうだな

「あれだな、フェイトさんは良い人だな」

「え? 行き成り如何しました?」

「いや、なんでも」

「いつの時は男が払うべきだと意地を張つてみたがやっぱ凄かった

一ヶ月分の生活費と同じくらいかかったりませんでした?

十一話～side 雨水～（後書き）

エリオ登場！

十一話～side ハリオ～

雨水 秋春さん。通称、秋兄さん

今日はフェイトさんもルシエさんも一緒に無く一人同士、男同士で会つ事になった

「うああーだるうー・・・早いな」

ネクタイを緩め眠そうにしながら片手をパタパタして歩いてきた

反対の片手には仕事荷物を持っている

「（）めんなさい、急に・・・」

「ん？ああ、いいぞ。待たせて悪いな、その辺の喫茶店で良いだろ

？」

「はいー。」

人は居るけどそれ程混んで居ない喫茶店を選びに入る

「あー、で。何の用だっけ？」

「その・・・雨水さんが様々な場所で講師をしていらっしゃるって本当ですか？」

噂に聞いた話では訓練校や難関の士官学校を始め陸士部隊や武装隊の実戦部隊、教導隊のエリート部隊の所まで幅広く活躍していると聞いた

「講師は本当だがエリオが思つてこないような感じじやないぞ？」

「？」

「んーっと、たまゝに呼ばれては優秀な生徒いますか？とかこの子が最近伸び悩んでいるんですけどとか持ち掛けられる程度だ。本職はロストロロギア関係だしな」

つまり生徒を見定める選別眼と的確なアドバイスが出来るって事ですかね？

十分凄いような・・・それで本職は危険物のロストロロギアって・・・

「あ、あの秋兄さんから見て僕ってみこみありますか？」

「見込み？なんの

「まじめのです」

秋兄さんは何だか面倒そうな顔をして右肘を付けて、気分悪くさせてしまったのかな？

「それは、フュイトさんの為とか？」

「それもあります」

「も？」

「はい、僕もルシエさんがんばってる姿をみせてもらいました。そして僕ももっとがんばりたいと思つたし秋兄さんに追い付きたいつて」

「あーあーあー」

楽しそうに首を何度も縦に振つて携帯端末からモニターを表示させた

そこにはこう書いてあつた

ロストロギア鑑定士 魔導師ランクD 雨水 秋春

「くははっ、追い付くつてエリオの魔導師ランクは平均的に見てこ以上は行くし魔力変換資質の電気も持つてゐる。既に追い抜いてるつて

て

「え？え？」

あれ？魔力変換資質の事言いましたっけ？

「いやーまー、追い付くつて言つても分野が違うからなー。エリオは戦線部隊になると思うよ？向いてるし、近代ベルカつて事は騎士になるんでしょ？」

「な、なんで、しつてるの？！」

「アハハツ！俺はエリオより複雑なロストロゴニア相手に鑑定士をしてるんだぜ？大体分かるつて」

やつぱり秋兄さんは凄い

僕の将来の目標には十分な人だ

「ん、意外と美味かつたな。此処のケーキ、キャラに持つて帰るか」

あれから話し込んでしまって夕方になってしまった

「フロイトさんにも買つて行つた方が良いでしょうか？」

「あーそりゃーもちろん。代金は持つてやるからフロイトさんのお

「おつがとうござまゆー」
「あわらのを選びな

フロイトさんは忙しく僕の住む保護施設に来れる時間を作るのを精一杯、それは分かっていたけど僕は遅くまで起きて持っていた

「フリオー」

「フロイトさんー」

面会時間はとうとう過ぎ去り、ださびフロイトさんはやつてくへんへん語へ四年の話を元氣良く語つた

僕はそれが嬉しくて今田の話を元氣良く語つた

「雨水さんには今度お礼を言わなきゃね

「はーーー」

「あ、ケーキ。ありがとね、フリオの選んでくれたの美味しかった
よ

「あ、い、いえ」

いま思つたけどフェイトさんと秋兄さんは何処か似ている
フェイトさんは包み込むように優しく凍つた心を暖かく溶かしてくれる

秋兄さんは荒々しくてちょっと乱暴だけど優しく飲み込むように全てを受け入れてくれる

どちらも優しい、信じられない程に優しい、勿体無いほどに優しい

「フェイトさん

「なに?」

「僕、魔道師テストをうけてみます」

だから僕もそんな二人みたいな人になる為に魔導師になりたい

十一話～side Hリオ～（後書き）

現段階の役職 本職 ロストロギア鑑定士
講師

副職 アルバイト

十二話～side 雨水～

前回のあらすじ

エリオに相談を受けた　あれ？俺ってこんな子供により弱いのか
何故か目標にされる ケーキ食つ 意外にも美味しかったからお土
産に持つて帰る キヤロ、ケーキ気に入つた・・・でもカロリーを
気にしてたっぽい 終わり

ああ、何気に既に入局二年くらいか？

今日の仕事は第四陸士訓練校で特別講師を頼まれた

「えー・・・第四陸士訓練校の生徒の皆さん。今日は少しの時間で
すがお願ひします」

あ一面倒だ

広さは一般学校の体育館くらいだろう

生徒達は直立不動、疲れないのだろうか

「魔力と言つるのは確かに多ければ多い方が良いです。がしかし術式
の改良等で同量の魔力である程度魔法の強弱を付ける事が出来ます。
・・なので魔力量が少なくとも強大な魔力持ちに完全に太刀打ち出来
ない訳では無いです」

表示されるのはミッドチルダ式の魔法陣。最近は近代ベルカと言つた新しい形態が出来始めカートリッジシステムも確立された頃で魔法技術の進歩は目覚しい

ちなみに俺の魔法形態はミッド式・・・なんだけど使えるのはせいぜい初步的なを数個

これでも訓練は人並みにしてるんだけどなー

「飛行魔法に必要なのはイメージです。魔力を通すのは部位ではなく体全体です、放出系の魔法に分類されるので飛行中は常に魔力を消費します。しかし覚えればそれは確実に戦闘の際には有利になります」

浮遊だけなら大したモノではないが飛行となると違つてくる

飛行の代わりに別の魔法を代用していく魔導師も居るらしい。でもそれは大概はレアスキルや先天技術

「と言つたように基本的な魔法とはインテリジェントデバイスが頑張れば自動詠唱出来るレベルです、魔力消費も少なく威力も当然低いです・・・ですがこう言つた基本こそ応用の幅が広く使えます・・・ん?あ、そろそろ時間でした。では今から質問の時間に移りますね」

にしてもこんな弱そうな人間が偉そうに語つてると思つと笑えるなーとか考えていると物凄くイライラしますと表情で分かる生徒が突つ掛かってきた

「先生の魔力ランクをお尋ねしても？」

「ん？ ほくらいだつたか、たぶんそんくらい」

予想外の低さだつたらじくじくわつきが入る

んー先にある程度の情報を渡してくれれば良かつたのになー

「ひつて・・・つて何でそんな低ランクが、と言つかひつて魔導師として成立するの？ よくテスト受かつたわね」

仕事仕事我慢我慢

「あん？ なんだ？ おい、魔力ランクが魔導師局員としてのレベルを決めるものじゃないつて知つてるか？」

・・・あれ？ 我慢するつもりだつたんだけど

よしー流れに任せて進もう！

「それは教わりましたが限度があります」

「ほほお？限度ねえ、ならお前は俺より強いのか？」

「ええ」

「表に出るー」

「ええーー！」

・・・周りの視線が少しだけ痛かつた

目の前に立つたのはオレンジ髪の少女だった、訓練生にしては珍しく自作デバイス

俺達は勢いのままにリアルに表の訓練場に出た

周りの教師が何も言わないとこ見ると周りも俺の力を見たかつたらしい

「名前を聞こうか？」

「ティアナ・ランスターです」

「先手は譲らうかな」

「そうですかー。」

開始の合図がなると銃型のデバイスの先が向けられシьюーターが発射される

三発 誘導弾 一発は前から挟み込むように来る圏で一発を背後から
らの本命

観察眼の情報を整理し動きを読む

来る場所さえ分かつていれば速からうが遅からうが一緒だ

それに誘導弾は速さを追及した弾では無い為、感覚的にはドッヂボ
ールハード版

「うヒギリギリッ！」

身体能力の高く無い俺としてはかわすのさえ難しい現実的に考えて
かわせる限界は四発くらい・・・あれ？挑発しといてなんだけど、
ヤベー

十二話～side 雨水～（後書き）

少しティアナにしては冷静な判断に欠ける行動と思われたかも知れませんがこれには事情がありまして・・・

当初スバルが元気良く勝負を申し込む設定だったのですが戦闘機人に勝てる要素が無い！と気付き急遽身体能力平均並みのティアナに白羽の矢が立つた訳です、はい

なので少し違和感があるかもですがご了承を

十四話～side ティアナ～

最近の私は少し人間関係が面倒で疲れていたのか何時もなら冷静に流せるはずの事を受け止め無駄に起こしてしまっていた

なんでこんな事に

私は割と手加減せずに特別にやつてきた噂の講師にシьюーターを放つていい

「アブナツ！」

講師の方は私の攻撃の位置を何かで先読みしているような動きを見せる

そのせいで段々と私も熱が入る

先読みされているなら全方位射撃で・・・

「うしー！まだ！」

私が同時射撃の為にタメに入つた瞬間私に向かって走つてくる

行動の先読みじゃなくて思考の先読み？

考えない・・・ああ、もう、観客が鬱陶しい

「マルチタスク。あーなるほど思考の先読みと思つたから思考を分割したのか」

歎心したような声を出した。次の瞬間、単発の威力の低いシューターが連續で地面撃ち土煙を発生させられた

田暗まし？

私は標的をズラす為に幻影シルエットを使つ

「シルエットかー、つぐづぐ訓練生にしては実践に慣れてるなー。いや、実戦を常に想定していたのか？」

なんだかこの講師の言い方は私を見透かしているようでイライラする

「発見」

気付かなつた。講師の人が行き成り田の前に現れデバイスを持つている方の手を捻り上げられる

「痛つ、痛たたつ！痛いです！」

「あははっー！」めんねえー、俺つてバインドまだ未完成でさー

バインドが未完成つてどんだけ魔法下手なのよー

魔法無しの力では流石に男の講師には勝てない・・・まさか魔法外の手を使つてくるなんて

「うん！魔法戦つて言つてないし良つか！」

「痛い！痛い！いい加減放しなさいって！」

「優等生っぽい顔して酷い言葉使いだな」

段々と手の疲れ力が抜けてデバイスを落としてしまつ

講師の方は私のデバイスを拾つて少し観察するよつて見詰める

「高そうなバーツだなあ」

「返して！かえ、痛たたッ！..」

取り替えそつと振り返らうとしたら余計に腕が捻り痛かつた

「射撃と幻影かー、なんて言つたセンターガードに最適な人材だな

「褒めます?」

「あれだな、キミみたいに可愛い子をこんな風に捕まえないと俺が変態みたいだー」

「放さないと叫びます」

パツと放した

瞬間的に魔力弾の形成も考へたが集中力が散漫になつていて、せいど上手く出来ない

「さて、俺の実力はこの程度だ。そもそも俺は卓上で教えるのであつてこいつは実戦訓練は苦手なんだよ」

勝つておいてそれはムカつく

私より断然に魔法が不得意なのにこれだから才能持ちは・・・
レアスキル

「いーなー才能持ちはつ。俺も魔法使いてーー」

「え?」

「ん? どした?」

この後、すぐに訓練校の教師が割り込んできたので話す事が出来なかつた

訓練校から寮まで帰り、最近やたら付き纏つてくるスバル・ナカジマと一緒に帰つている

「どうしたの？今日はティアラしくなかつたけど」

このスバルとは名前で呼ぶくらいには仲良くなつてゐる。一人とも訓練校では珍しい自作デバイスだつたので自然と仲良くなつたんだと思う

「さうでもないわよつ、だつてロランクとか可笑しくない？」

「ま、まあそれは私も思つたけど」

「それにあの講師の人の動き。ちょっと変だつたのよ」

行動の先読みでも思考の先読みでもなかつた

でも最初から攻撃の来る場所が分かっていてかわせる最善の歩数や体制でかわす

いつたいどんなレアスキルなんだらうか

「変つて失礼だな」

「つて！講師の人！」

「なんでこんな所に」

此処つて一応女子寮行きの道なんだけど・・・警備員を呼んだ方が良いのかな？

十四話～side ティアナ（後書き）

今回のティアナの敗因は

威力とコントロール重視でシьюーターの数を減らした事

訓練所が屋外で土煙が発生しやすかつた事

拘束された時にシьюーターから意識を外した事

の計三つくらいかな～？とか思っています

どれも次の機会には克服されてそこで雨水の勝ちがギリギリだった
と言つのを分かつてもらえたかなと思います

前回のあらすじ

第四陸士訓練校 それっぽい話を 少女に絡まられる 騙し騙し勝つ その後社交辞令的に訓練校教師と話して帰る 道に迷う 見知つた少女発見 自分の話と気付く 話し掛ける 警備員を呼ばれた

「つてな訳で道を教えてくれない？」

「……」

何故か微妙な表情で見られた

「何であの道を迷つんですか」

今日絡んできた方の少女が呆れたよつに息を吐きながら「

隣の子は一応フォローッぽい事を言つてゐるがイマイチフォローとは思えない

「仕方ないだろ?そいや、俺が変つて何処が?」

「私の射撃魔法をかわしていた時ですよ。行動や思考の先読みにしては動きは遅く、かと言つて魔法が放たれている場所は分かっているようにかわす・・・変ですよ、咄嗟に判断したとでも？」

「んー、本当に凄いね、将来は執務官とか希望してるの？」

あの役職は無駄に高いスキルを要求されるからなー

フェイトさんも抜けた性格だけど仕事ではかなり優秀でエリートだつたし

「希望しますが何か？」

「合つてるなつて。えーっとティアナ生徒だったな、そつちは？」

何だか聞いてはいけない感じだったので、すかさず隣の子に話題を振る

「え？え？スバル・ナカジマです！」

「スバル生徒な」

元気そうな子だなー・・・と言つたこの子も自作デバイスか。流行つてんのか？

やだなー

自作デバイスって自分で色々魔法組んでる子が多いからメンドクサ
いんだよなマニアカル道理に出来なくて

「雨水先生でしたよね？」

「やせ、でじうでも良いけど帰り道どうひう？」

「あつちですよ」

今来た道を指された

全くの逆を歩いていたのか、途中に地図等が無いから全然分からなかつた

「ん、ありがと」

「いえ」

「じゃ、今度局であつたら声掛けてなティアナ生徒にスバル生徒」

「だうあー」

「あれえ～？ 雨水さん帰つてたんですね」

「まあーなあー」

自宅でゆつたりと疲れを取つているとキャラロが帰宅する
キャラロはピシッとした局服を着込んでいて肩からショルダーバック
を下げていた

どつかの〇しみたいだ

「老けたな」

「・・・フリーダ

プロテクションを張つてみたがアッサリと破られ丸焼けにされた
そしてフリー^ドは慣れた仕草でグタつとなつた俺を俺の部屋に放つ
て着替えると言つたげに鳴いた

「あいあい、お前が焼くから服がどんどんと無くなるつての」

「キュック」

「まあな、確かに命令してるのはキャラロだし文句ならキャラロかー」

「キュウウ」

「ああ、少し恐いな」

早々と着替えてリビングに戻ると既にキャロは私服に着替えてソファーに座っていた

「雨水さん、そعدだんがあります」

「相談？」

俺はキャロの畳の前に正座する・・・あれ？普通逆じやね？

真面目な話だと自然と正座で聞いていたりは教育の賜物と言つ奴なのだろうか

「うん、私、自然保護隊にこいつかと思つんです」

「ふーん、いってらっしゃい

「・・・フード

何故に？！

「待て待て！キヤロー話合ぬつー」

「・・・ですね。そうだんと書つのは、その、あの、雨水さんも「つじょ」「つい」

「え？ なんて？」

「その、一緒につづけてきて・・・くれないかな？ つづ

「は？ やだよメンディイ」

いまの部署気に入つてゐし移動願い出すの面倒だし、何より俺はそこまで自然大好き人間ではないので保護と言われても他人事にしか思えない

「い、いいじゃないですか。恩もありますし返しましょうよ」

「まあ確かに恩返しは大切だよな・・・ん？ フェイトさんには書つたか？」

「まだです」

そう言うのは保護責任者のフェイトさんに真つ前に書つべがだと思うんだが何で俺を最初に選んだのか

まだフェイトさんは少し距離があるのかな？

「なり話は今度だな」

「・・・はー」

とは言つてもあのフォイトさんの事だ、キャラの意見を尊重して〇
△を出すんだうつな

・・・事前準備をしておへべあか

十五話～side 雨水～（後書き）

今更気づいたが原作よりキャラが確りしてきている気が・・・雨水（反面教師）が居るせいかな？

十六話～side キヤロ～

自然保護隊。名の通り自然を保護し動植物を密猟者等から守る部隊、極地への派遣もあり人気の少ない部隊だけど私は大好き

数日前に雨水さんに一緒に行つてもうえないか相談を持ち掛けたけどアッサリ断られた

・・・むう

「キヤロの好きなよつにすれば良いんじやないかな？」

「フロイトさん」

「雨水さんも口では文句は言つかもだけひきつとキヤロの事を考えてくれるよ」

フロイトさんに相談してみると、とても心強い言葉を頂いた

「でも雨水さんをむりやり連れていくのは・・・」

「雨水さんを自発的に行かせる方法・・・んー私も雨水さんの事は鑑定師と講師をしている事くらいしか知らないもんなあ、なのはなら如何するかな？」

「なのは、たん？」

「あ、私の友達なんだけれどね？説得するのがとても上手なんだ」

それは凄い特技ですね

あのダラけた雨水さんにも効果あるんでしょうか

「あの！その人に雨水さんの説得を頼めませんか？！」

「ん、んー大丈夫かな？確かに来週くらいにには休みがあるって言つてたし」

「よろしくお願いしますー！」

私が頭を下げるトロロイトさんは困つたように微笑んで分かつたと一言返してくれた

一週間後、私は雨水さんの休みを高町なのはさんの休みと合わせてもらつてこの間の雨水さんが買っててくれた美味しいケーキのあらリードの喫茶店で合流するよつに取り付けてもらつた

「始めてまして」

「始めてまして高町一尉、武勇伝は私の部署にまで轟いていますよ」

「恥ずかしいです」

「どうやら名前くらいは雨水さんも知っていたようですが

いつも増して表現が硬いのは一応上官だしなーとか考えているに違いない

「フエイトさんは久しぶりですね」

「あ、うん」

「今日は何か話だそうですが、キヤロが何時も迷惑をすみませんね。お一人とも忙しいでしょうに」

「全然！全然そんな事ないよー。キヤロの役に立てて私嬉しいもん！」

「いやはは、私も今日は暇だつたから問題ないよ」

雨水さんはフエイトさんを見て高町さんを見たあとに礼儀正しく上官に対する態度を取つたあとに少し失礼と言つて私を一人の見えない所に連れ出した

「あれは何だ」

「フロイト・テスター・ハラオウン執務官。私の保護責任者でやさしいお姉さんじゃないですか」

「問題はそっちじゃねえ！あの砲撃魔の事を言つてるんだ！もしかして今日会わせたい入つてあの人か？！」

砲撃魔つて女性に失礼ですよ、雨水さん

「そうです」

「ぐっ！キヤ口おー、別に俺は高町一尉が嫌いと言つては無いんだが余りあの人とは関わりたくないんだよ」

「え？なんですか？」

「噂は尾ひれがつき易いもんだけどそれでも、あの高町一尉の噂は他の二人を群抜く」

それから雨水さんは前に生徒から聞いた話を教えてくれた

何でも、高町さんと本局部隊のデモンストレーションの様な模擬戦があつたらしいのだが、そこで高町さんは一人で本局屈指のエリート部隊を圧倒しその場で生徒までをも撒きこみ無双したそうだ

「ま、まさかあ」

高町さんは話では砲撃型、砲撃型はチャージに時間が掛かつたりと
強力な前衛が居て初めて役に立つポジション。そんな一人で無双だ
なんて

「ああ、俺も尾ひれが付いたんだとは思うんだが・・・その、あの
人の魔法センスが異常なのは何と無く分かるんだよ」

「ど、ともあれ！早くもどりますよ！お一人ともまつてますし！」

「やだなー、マジなんで俺なんかが・・・ヒューズラー、今こそお
前の出番だらお？」

何故噂だけで此処まで恐がつているのかは不思議でしたけど呼んで
おいて帰る訳にもいかず雨水さんは渋々戻った

しかし高町さんに笑顔を向けられた時は凄い苦笑いになつてたけど

十六話～side キャロ～（後書き）

満を期して管理局の白い悪魔こと高町なのは登場です！

「//シクでのなのはさんの戦いを見てるともひ常識なにそれ美味しいの？状態ですよ

前回のあらすじ

帰宅 キヤロに明日は会つて欲しい人が居るから時間を空けてくれと言われる 何故前日にと思つたが仕方ない 喫茶店で会つりしいフロイトさん発見・・・高町なのは一等空尉殿？ つい咄嗟に觀察眼で見てしまい理不尽なくらいな才能を見る キヤロに問い合わせると兎にも角にも話を デーブルに座つたが何故か好意的な目でにこにこと笑顔を向けられる どうしよ・・・お話と称して砲撃を放つと言われている人間とよつてお話とは・・・

「え、えーとそれで誰が俺に用なのかな？」

「私だよつ」

高町なのは様々！・・・白い悪魔と恐れられた砲撃魔が話し相手かよおおおお！

「なに？文句ある？」

「何も無いです！イエッサー！」

「そう、あのね。一回前にキヤロつけやんから聞いてると思ひけどキヤロつけやんの為に一緒に自然保護隊に行つてくれないかな？」

きや、キヤロの奴。まさか高町一尉に協力を求めるとは卑劣なツ！

あれが、フリードの炎で焼くのに飽きたから砲撃で来たか。ん一詰
んだな

「拒否権はあるんですかね？」

「・・・無い、なの」

無い？！しかもなのとかちょっと子供っぽくて可憐になーとか普段は思えるかもだけと・・・

目が恐い！何より胸元でキランキラン言つてゐるデバイスが恐い！

脅迫だ。説得が駄目なら脅迫なんてまさに悪魔だ。と言つた初対面の人間に脅しを掛けてくるとは

「何だかさつきから雨水さんの視線がとても失礼な気がする」

「べ、別に何も・・・綺麗だなーとか？」

「こちちははーそれは嬉しいなつ」

「「・・・雨水さん」」

俺は褒め言葉を送ったはずなのに何故かフォイドさんとキャロから
非難の目で見られた

結果だけ言つと結局俺も一緒に行く事になった

何故か既に異動願い等も提出された事になつており局としての準備
は終わつたあとだった

「つたく、面倒な

「めいわいくでした？」

ミシドの次元転移ポートの様な所で適当に昼食を取りながら愚痴を
零す

「迷惑かもなーとか思つなり巻き込むなよな

「だつて雨水さんと一緒にかつたですし

「まー俺も機会があれば自然保護隊の皆にはお礼くらいしないことつ
て思つてたからこれで良かつたのかも知れんがな」

とは言え俺達が自然保護隊に面るのは約一年へんなこと無い

理由は俺の講師休暇期間がそれくらいこと言つだけ

「良かったんですよ。これで」

「ふーん」

昼食を終えるとすぐに手続きを済ませて転移する。するとすぐに向かえの人があつてくれた

しかも「前に前に俺達をミッドまで案内してくれた、おひりちゃんだった

「おー！久しぶりだな。お前等、少し背伸びたか？」

「伸びたよ、成長期は過ぎたがまだまだ成長する年頃だからな

「私も少しだけ」

「そうかそうか！キャンプで皆が待ってるし、わざと行くべやー！」

排気ガスを気にしてんのか車では無く徒歩・・・ん？ミッドの車は電気自動車じやなかつたか？

んあ・・・単に道が確りしてないからか

「にしても俺等は前回料理しか、してなかつたから何気に自然保護の仕事とか知らないんだよな」

「そりだなあ、主に保護指定の動物を守つたり金になりそうな動物を捕まえに来た奴を逆に捕まえたりお前等みたいに偶然迷い込む奴をキチンと出口まで案内したり・・・偶に遺跡とかに見付ける奴も居るそりだが」

ホント動物愛護団体みたいな活動だな

俺の特典スキルだと天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造つた。（長いので統率力と呼称）か全ての事象を観測する者。（表現し難いのでそれっぽく仮完全記憶能力と呼称）が役に立ちそうだ

「確かにこんな森ばっかりの未開地なら遺跡くらい発見出来そうだがな」

「ハハツー」の辺は既に調査済みだ！

夢を壊しに掛かるなよ

十七話～side 雨水～（後書き）

レイジングハートさんが無言で圧力を掛ける。でした

十八話～side 雨水～

前回のあらすじ

女性陣三人の策略により森ばかりの場所に 運が良いのか意図的なのか前回と同じ保護隊に 遺跡発掘とかロマンあるなとか思つたらおっちゃんがそのロマンを壊す チクショウ 合流・・・久々会うとやつぱり皆氣さくで良い人達だな

「なあキャロ、前回どぞう違うんだ？」

「料理のとくばんは新人のつとめです」

「部活みたいだな」

「ぶかつ？」

ん、 どうかキャロは特に学校とかは通つた事はなかつたな。 村で最低限の常識を教えてもらつただけらしいし

・・・キャロの学力が不安になつてきた

「集団で集まつて好きな事をするグループみたいなモンかな

「たのしそうですね」

「だな」

今日の献立はキャロが好きなオムレツがメイン。だが十数人分となると結構辛い、多人数向けだとやつぱりカレーとかシチューとかが楽なんだけど

「卵料理が好きって俺の思ひに半供っぽいと」

「そ、そうですか？！・・・」ジビも、ですか

「ま、俺の勝手な先入観って奴だから世間は・・・まあ？って感じだがな」

卵自体は栄養があると思うから別に好きで構わないんだろうけど・・・
・あるよね？栄養

「そう言えば雨水さんの好きな食べものってなんですか？」

「あん？んーハンバーガーかな？」

「十分」どもですね！」

「何故嬉しそうに言ひ？」

そもそも高校生って称号も消えたなー（年齢的に）

大人になつても子供の心は忘れずに！の精神で行けば問題は無いか

「あ、やべつ焦げた」

「なにしてるんですかッ？！？」

「大丈夫だ、これはキャ・・・おっちゃんのにしょつ。あの人ならこの程度は気にせずに食べるはず」

「雨水さんのです」

「いつそ他のも焦がしてやろうか

「止めてくださいね。なんか黒いですよ、雨水さん」

「チツ」

せめておっちゃんのだけでも

この後、おっちゃんの分を焦がす事に成功したのだがキャロに目撃されていてフリードにより完全に真っ黒にされた炭みたいなオムライスを食わされた

そいや焦げつて癌細胞つて聞いたけど大丈夫なのかな？

「はいはーい、此処は保護区域なので生息動物への餌やりは止めて下さいねー」

「え、あ、すみません」

「いえ、では観光を楽しんで下さい」

まずは危険の無い観光許可地区の見回りから任された

午前中はキャロと別れて見回るが午後は合流する予定だ

にしても一つの丸々未開世界つて言葉通り次元が違うよなー、登録名は第何十何世界とかだったけど・・・覚えてないー興味ない事は覚えない！

「お仕事じ」苦勞様です。良い天気ですね

「ええ、家族旅行ですか?」

「わうなんですよ~」

どうやら此処一帯は割と人気のスポットらしい

何が人気なのかサッパリだけど・・・マイナスイオン？

「あ、あのーお兄さん！」

「ん? なんだ? 坊主」

なにやら慌てた子供が話しつけてきた・・・「面倒!」とかツ

「あつちに怪我した動物が!」

「分かつた、知させてくれてありがとな!」

「うん!」

頑張つてと応援の言葉を背に知らされた場所に行くと狼寄りの白い毛色の子犬が怪我して倒れていた

すぐに観察眼のスイッチを入れる

絶滅指定 魔狼 魔力ランクC 重症 治療優先

犬に負けた・・・だと? あ、狼か

正確には魔力ランクと魔導師ランクは別物だけど似たり寄つたりなのには違いない

「」の場合は治療と報告だよな」

ホントに必要な情報を取り出せる観察眼はとても便利だ

一応動物を守る仕事なので動物用の医療キットは持ち歩いている。
それと観察眼を併用して応急処置を済ませ保護隊に一報入れてキャンプに戻った

十八話～side 雨水～（後書き）

些細かもですが惑星一つ丸々を数十人の部隊で可能なのかと言つ謎
調査隊は別部隊として観光地区や一部危険地区に絞れば・・・もしくは一定区域毎に拠点を設け複数の保護隊を配置すればイケる?なんて考えてます

前回のあらすじ

新人は雑用！ 料理作成・・・あ、焦げた 勢いでおっちゃんのも焦がす キヤ口が発見 夕食の席で俺の目の前に二つの炭が キヤ口が何かやり遂げたみたいな爽やか おっちゃんからも笑顔を送られる 決心して試食 まあ予想通りの味 数日、保護隊の雰囲気にも慣れた所で危険の少ない場所に たまに遭遇する家族等と世間話 怪我した子魔狼を拾い放置は不味いので持つて帰った

「危険地区の動物だな」

「へえー」

「群れから逸れたか捨てられたか」

どちらにしても一時的に保護する事に変わりは無いそ�だ

少し様子を見ているとキヤ口は帰ってきた

「雨水さんー保護をしたどうぶつは大丈夫でしたか?ー」

「いまは寝てる。魔法つて便利だな!」

おひちゃんは治癒魔法を使えた

観察眼で見ていたが確かに傷は治つていていたし本当に魔法とは
ビックリだ、俺も早く使ってえなあー

「かわいいい」

「キュウ？！」

フリードがボソッと言つたキャロの言葉に過剰反応した

俺はフリードの口の端から火が漏れていたなんて見てない。うん、
幻覚に違ひ無い

「さて、一時的だが保護する事になった。以上」

「ほんとですか！やつたあ！」

「やつたあーって俺等はコイツの群れ探しで面倒になる予定なんだ
がな」

生息地域が分かつてるだけでも救いか

流石に分かつてなかつたら諦めるぞ、俺は・・・

「わたし頑張ります！」

「そりゃー頑張ってくれるか！」

「・・・雨水さんも頑張りますよね？」

「もちろんー七時から一時、一時半から六時の間なーあと時々五分休憩！」

「きんむじかん？」

当然自然保護隊にそんな目安の勤務時間など通用しないのはおっちやん達を見ていて分かるのだがそれでも暗い森の中で狼の群れ探しなんてやりたくない

「名前は何にしようか」

「え？」

「名前だよ、名前、決めてないと色々不便だろ？」

「わ、わたしが決めてもいいですか！！」

「ポチで良いだろ」

犬っぽいし

キャロの意見は・・・却下、任せるとH女チックになりそつだし

「ちょー幾らなんでもポチはこの子がかわいそつですーもつとあやんと考えてあげないとー」

「名前なんて分かりやすさが一番なの、無駄に変な名前になるよりメジャーなのが一番だ」

「そんな事ありません!」

「はあーなら保護隊の皆に多数決で決めもらつか」

「望むどいれですーーー」

結果・・・俺、惨敗

理由として幾つかあつたがその一つ

「お前、犬じゃないんだからポチは無いだろ!」

と男性陣から言われ女性陣からはキャロを軽くいひつる状態にさせた事を数人に渡り交代で説教された

「シロ！フリードー！おいで！」

「ガウ！」

「キュークー！」

魔狼の名前は正式にシロと決定

「・・・ってキャロオ！昨日も言つたがシロつて発想的に俺のポチと大差ないだろ！」

「大差あります！ポチだとなんか、ああ、犬だなあ、って思いますけどシロだとちゃんとこの子つて区別が付きます！」

「フリードも白いじゃん！」

「フリードはアルザスの龍です！」

訳の分からぬ言い分に混乱しそうになるが結局の所、どうせ群れが発見できればそれでお別れだろうし、ポチって名前に深いこだわりがあつた訳じゃない

割り切るつ。うん、美少女類のキャラが笑顔なんだしそれで良いじ
やん?って感じで

「雨水さん…シロはもう大丈夫なんですか?！」

「んーまあ一外で歩く程度には大丈夫でしょ完全回復には一週間は
欲しいけどね」

「わたしが面倒をみます！」

「ん、頑張れよ」

それから一応治ったシロの躰は俺に任せられた

んーいつものは保護するのを喜んだキャラがするべきじゃ…
キャラが躰をする性格に向いてないのは分かるけどね

甘いし優しいし可愛いし

飴がキャラで鞭が俺か…側からみたら良いコンビか?

「まつたく、一応群れに帰るまでは言えキャンプに居る以上はそ
れなりにキッチンとしろよ」

「ガウツ！」

講師の才。他人への教えがとても上手いスキル・・・てつきり人間限定だと思っていたのだがシロの言葉の理解や特技の取得のスピードが幾ら頭の良い魔狼とは言え異常だったので恐らく動物にも作用しているのは無いかと推測

これは思わず収穫だったな

十九話～side 雨水～（後書き）

今回の魔狼の名前ですが最初はもつと長いのを考えてましたがチエックする内に子供が考えた名前じゃないなと気づき見た目からのシロと言う名前になりました

「雨水さん。何かこのじゅうつけに見覚えがあるのはわたしだけですか？」

雨水さんは苦笑いでシロと田の前の黒い獣を見比べてやれやれと言つた仕草をする

「「」の狼の名前に魔法の魔が付いているのを忘れていた

「で、ですよね」

腕の中にシロ、肩にフワードを乗せて私は今すぐにキャンプに戻る準備をする

あーそれにしても本当に見覚えがあるなー

特に涎を垂らされて見下ろされてる具合が

「えつと、確かに魔狼であつてるな。にしても何でー・・・何で子犬サイズから前回の竜種並になるとは」

「シロちゃんも将来あんなに大きくなるんですね」

「さて、「ホン」

咳払いをした雨水さんは大きく片手を前に突き出して宣言した

「聞け！アホ犬共！」

「ガアアアー！」

「まあそう怒るな、馬鹿犬。こっちが折角テメエらの連れを持つてきてやつたんだ。喜べ」

「ガウツ！」

何だか歓迎の様子が一切見えない

まあそれは幾ら言葉が通じないにしても馬鹿にされているくらいは何と無くで把握できるだろうし多少なりはもしかしたら言葉を理解しているのかも知れない

「あん？自分達から捨てた？・・・ふふつまあ何と無く予想は付いてたさ・・・だから俺はお前等を罵倒した訳だが」

自分達から捨てた？私と似てる

それで雨水さんは怒つてくれている？

「」のまま俺達は「」の・・・俺等はシロと呼んでいるが、このシロを連れ帰つても問題は無い」

「ガウッ」

「ああ、帰る帰る。だからつて折角俺等が苦労して見つけたお前等だ、せめて捨てる事についてお前等がシロに謝つて貰いそれで帰ろう」

「ガアッ！！」

巨体の黒い狼に囲まれていてる状況で更にその狼が怒り出した

私は震えを我慢するので精一杯なのに雨水さんは堂々としている

「おつとー此処で俺等に手を出せば状況不利になるのはお前等だぜ？」

「ガ」

「お前等、俺の職業を忘れた訳じやないよな？俺の職は自然保护、それは危険から動物を保護すると同時に人間に危害を加える危険な動物を駆除指定出来るつて訳だ」

え？そんな権限ありましたつけ？

雨水さんは空間モニターを宙に表示させる、そこにはイエスとノーと書かれた何かの最終決定のよつた画面が表示されていた

「確かにお前等だつたら此処で俺等を殺すのは容易いだ。がしかしその後はどうだらうなー、最初らへんは派遣部隊も少数だから問題なくとも五度目くらいにはお前等でも対処出来ない数だぜ? さあどうする? 此処でプライド圧し折つて謝れば丸く収まるんだぜ!」

か、格好良い

雨水さんが輝いている

「グルルウ」

「ガウツ」

「ガウウ」

それぞれで会議でもしているのか一箇所に纏まり話し合いをしている、雨水さんはと言うと魔狼の群れの更に奥をジーッと見つめている、睨むに近いかな?

「決まつたか! 馬鹿犬共!」

黒い狼は雨水さんの前に集まつて頭を下げる

「「「グルウ」」」

「アハハハツ！俺にじやねえだろおーシロにだろー？ハハハツ！誇り高き魔狼が良い感じだな！」

あれ？雨水さんが壊れ・・・

黒い狼の皆さんも若干怒つて いるような雰囲気が出でている

「「「グルウウ」」」

「ガーウツ！」

シロは小さな手で黒い狼の頭を叩いた

「さて！帰るぞ！」

「も、もう大丈夫なんですか？雨水さん」

「大丈夫だ。アイツらはどうやら長以外は馬鹿だ！」この奥っぽいか
ら逃げよつてマジ早く帰ろつて！」

あ、そつまつ事ですか

キャンプに戻ると函水さんは疲れたように椅子に座る、そしてダル
いと一言呟いて窓を見詰めた

「つたく最悪だな」

「ですね」

「どうせいつこつせアイシーラの頭点の娘らしこべ」

「えー・・・へ?

「うん、正確には今の長の息子の腹違いの妹つて位置だな。毛並み
が白なものそのせいだ。魔狼の長は代々白いらしい。んとキャラコに
はちよつと難しい話だがようは後継者争いだな」

「え?・え?・じゅ、シロつてとっても凄いッ?・・・」

つてそんな事より娘つて事は女の子だったんですか?・・・今まで男
の子と勘違いしてました

「うん、まあ将来は魔導師で言つた所のB + からA - くらいは望めるな」

「ガウー。」

「おー誇らしげだな」

「キュクルー。」

「お前が絡む意味が分からん」

そんな凄い狼と分かつてなお、前と変わらず接する雨水さんはやつぱり凄い人なんだなあーって私は思います

・・・啖呵切つてる雨水さんは格好良かつたな

11話～side キャロ～（後書き）

雨水がキャロには難しいと言つた内容。

魔狼の長は代々オスが担つていた、そしてそれに合わせるように毛並みが白で生まれてくるのは必ずオス、しかし今回何故かメスで白い毛並みが生まれてしまい一族から追い出される事になる。それがシロ。

前回のあらすじ

森を一時間くらい搜索すると意外とすぐに発見 理由、デカかつたから 人語が理解出来るならと嘘八百の大立ち回り 意外と正直モノなんかアッサリ信じる しかし観察眼が奥に居るであろう奴を捉え引き返す事に決定 どうにか謝罪までこじ付けあとはトンズラシロは正式に自然保護隊のベットになった

「と言つ事があつた」

今日は珍しく自然保護隊。と言つた俺とキャロにお客さんが来ていた

「それは・・・」苦労さま?

「ああ、苦労したんだよ。エリオ」

そう客とはエリオ。中継ポートまで着いてきた過保護な保護者のフエイトさんは俺にエリオを預けるなり全速力で仕事に向かつていった

なんでも急な事件が入つてゐるだとか、それにしてもミシドから此処までの道のりは割と子供でも大丈夫なんだが観光地区もあるような世界だし

「エリオ君！ 来てたんだ！」

「あ、ルシエさん。久しぶり」

「キャロで良いよ、 同い年くらいだとおもうし」

聞いた話ではエリオも局入りしたらしい

まあ仕事自体はしていないから見習いみたいなもんだけど、扱いとしては執務官補佐

・・・あれ？ また俺より上の人だ

「「どうしたんですか？」」

「ん？ いやああ、世の中って不思議だなあーって

「「？」」

「ガウツー！」

「わッ」

最近観光区のマスクツトを張つてゐるシロはエリオの勇猛果敢にアピールをしていた

ああ、そう言えば最近フリードがキャロの命令無しに俺に八つ当たりのよつに攻撃を仕掛けてくるよつになつたなー

解決せねば！

知り合いが来たと言つておっちゃんが早めの休みをくれた

ナイス！

「んーだが結局俺はこの観光地区に来るしかないんだよな」

他は危険地区だつたり立ち入り禁止地区だつたり厳重保護地区だつたり

此処くらいしかエリオ達とまわる場所は無い

「空氣がおいしつて言つんですよねー！」

「ガウツー！」

「いや、それは自分で決めろよ。まあ縁も多いし美味しい？んじゃないか？」

別にミッドも都市って割には自然公園も多いし空気が不味いって訳
じゃないだろうけどよ

「自然が多くてけつこう人気なんだよ」

「キュークルー！」

「自然が多いって言つた自然しかねえよ

現在の立ち位置

エリオ シロ（歩き） 僕 キヤロ フリード（キヤロの肩上）

フリード重そうだな、最近大きくなってきたし……成長期？

「シロって魔力持ちですけど、どちらかの使い魔ですか？」

「いいや、シロは元々魔力持ちの生物なんだよ。だから知力も割と
高い」

「く～・・・秋兄さん、最近僕も魔法を習つてるんですけど見ても
らえますか？」

「あー、エリオ君ずるいー！わたしもー！」

するいつてお前何時も一緒に居て言わなかつたよな？

取り合えず見るにしても人が居る所は不味いので関係者以外は立ち入り禁止の保護地区の安全な所に移動し一人の様子を見る事にした

「セットアップ！」

あれ？一人ともデバイス持つてるの？しかも支給品じゃなくて特注品だし

俺も一応デバイスは持つてるけど支給の杖で拳句にデバイスがいる程の魔法はまだ使えない

「ん？バリアジャケットは未設定か？」

「はい、まだ別に戦闘は想定してませんから」

「わたしも」

「わたしもってキャロ。お前は想定しないと駄目だろ」

「大丈夫ですっ！雨水さんが守つてくれますから！」

嫌な高望みだ

「ま、キャロの件はあとでじつへり話しあわせ

「む」

「あ、あはは・・・」

二人とも人に見せるのは慣れてないのか少し緊張気味だが暫らくするとすぐに真剣な目になり大人の俺でも凄いなと思う程の集中力を見せ付けた

シロが正式にフリーランの立場を脅かし始めた回でした

エリオ君の提案でエリオ君と雨水さんと私で魔法の練習をする事になつた

「さて、まずはキャロからにするか」

私の特殊技能は竜使役。そして私はアルザスの竜召喚士としての技能である竜魂召喚を見せる事にした

雨水さんは離れた位置で座り易そうな石にエリオ君と一緒に座る

「蒼穹を走る白き閃光 我が翼となり天を」

・・・んーあれ?一人とも良い雰囲気じゃない?ちょっと羨ましい

「キャローストップ! 召喚するな! 暴走するぞ!」

「え?」

何故か召喚前に暴走を予期され詠唱を中断された

「キャロ、集中だ。成功をイメージすれば良い・・・あと精神にぐらつきがある」

凄い。そこまで分かるなんて、流石講師の仕事で引っ張り合いになるだけある

「あれだな、いつそ人形でも抱きながらしてみたらどうだ？意外と多いみたいだぞ？」

「ほんとですか？」

「ああ、召喚士は別に自分が戦つ訳じゃないからな。手が空いてなくとも問題ないって」

なるほど、一理あります。それに雨水さんの言つ事なら試してみる価値はあると思います

「人形、持つてません？」

「持つてない」

「エリオ君は？」

「僕？！持つてる訳ないよ！」

「だよね」

「ほら、代用」

「ガウツ」

雨水さんは隣のシロを持つて私に渡す

シロの毛はふわふわで確かに人形を抱いているみたい

「蒼穹を走る白き閃光」

「お？ 意外と安定、人形を抱く事による精神安定は効果をきしたか」

「我が翼となり天を駆けよ こよ我が竜」

「最後だな、制御率八割。まあ成功ラインか」

「フリードリヒ！」

いつも小さい子竜のフリードが四角い魔法陣を通りと一匹の凛々しい竜と化した

それはアルザスの白き竜たるフリードの真の姿

「おー！ 一度目で成功！ やっぱ子供は飲み込みがはや・・・」

嬉しそうにフリードに近付いて頭を軽く叩いていた雨水さんの頭が丸々殴られた

「 」・・・。」

なんて反応したら良いんだろ？・・・・取つ合はずフリードには仕
いても仕方ない

「フ、フリード？」

「グルッ」

放したフリードの口から吐てきた雨水さんはフリードの涎塗れで震
えている

「・・・フ、フフ」

「雨水さん？」

「フリードオオオオオオ！」

私達二人は余りの雨水さんの大声にビクリと体が跳ね上がる

「よつしやああ！大きいナリになつたら行き成り飼い主様への反抗か『アラア…』

「え？え？飼い主はわたし」

「キャロは黙つてろ！餌をやる者が飼い主つて偉い奴はほつた！」

・・・餌をあげているのもわたしです

「いいぜ！受けてやんよ！ビビセ魔法で風船みたいにブクブクと肥大化させただけだ！恐るに足りず！」

「あの・・・キャロ、さん」

「キャロでいいよ・・・なに？雨水さん以外についつなら何でもきいて」

「じめん、なんでもない」

「うそ」

どう考へても竜種でしかも力解放状態のフリードが負ける要素は皆無だけど雨水さんも何だかんだでピンチを潜り抜けている

勝負は分からぬ

「フリードめ、じつがお前の弱点を抱えているのを忘れてやがるな」

弱点？

流石雨水さん。幾ら暴走してないとは言え制御外のフリードと杖も無しに相対するなんて、普通なら自殺行為です

「グルウア！」

先制はフリード。巨体に似合わず大きく素早く動いて尻尾を面として使う、雨水さんはフリードに背を向け私達の方に全力で走り尻尾をかわす

更にフリードは翼を羽ばたかせて風をぶつける

「ダイナミック前転！」

雨水さんはその風に乗って前転したかと思つて一度私の隣の位置を取り

フリードとの距離は離れてはいるもののフリードが羽ばたけば多分すべに追い付ける距離

「キャロ」

はうー雨水さんが何時になく真剣な顔で・・・格好良い

と言ひか何で私抱きかかえられてるんだひつー

「くはははー！フリードーもはや俺の勝ちだー！キャロがいればお前は手を出せまいー故に俺の完全勝利だー！降伏なら受け付けるぞー！」

・・・。

私は取り合えずしたり顔の雨水さんの顎を下からアッパー気味に打ち抜いた

フリーードの行動はあくまで甘噉みやジャレ付き行為の延長です。
対意思は無いですよ？・・・たぶん
敵

「Hリオ～side Hリオ～」

「Hリオ・・・なんで俺は寝ていたんだりつか

「えと、自業自得つて奴だとおもいます」

「やうが」

「ひつやら秋兄さんは十数分前の出来事を全て忘れていくようですが
ちなみにキヤロは物凄く不機嫌になりながら雨水さんに悪戯をする
と帰つてこきました

「え～っと、あ～・・・魔法を見る話だつたな。キヤロは？」

「先に帰ると」

「先に?はあー全く不真面目な奴だ」

なんだか秋兄さんの将来が不安になるのは僕だけでしょうか?

「ならHリオだけでも見てやるか

「はーーおねがいしますー」

再度セットアップして槍を構える

「とは言つても俺は武術に精通はしてないからなー、取り合えずはいま持つてゐる一番つて思う魔法を使ってみて」

「はいー」

槍を水平に構え詠唱に入る

そして背後に生成した五基のフォトンスフィアから連続してフォトンランサーを放つ

これはフェイトさんに教えてもらつた一番の魔法でいまの僕では途中でフォトンスフィアの制御不足で魔法が消えてしまつ

「ん〜・・・弱いな、しかも未完だ。まあ近代とは言えベルカだから遠距離は苦手な部分があるのかもだけど一発戦闘中にも使える大技が欲しいね」

「あ、あの」

「はい、どうぞ」

「僕はソニックムーブとか一気に相手に近づける魔法があるので無理に遠距離にこだわる必要はない・・・のかなーって」

フェイトさんから教えてもらつた、このファランクスも試験の為と言つ理由が大半を占める

僕の戦闘スタイルは接近戦でもハイスピードバトルですから詠唱の暇も無い

「一理ある。だけど俺が大技を持つてろつてのには強くなる以外にも理由がある」

理由

それにしてもさつきまで秋兄さんと違つて真剣な秋兄さんは何だか惹きつけられるような魅力がある

素直に付いて行きたいと思うし超えたいと思つ

「それはな? 脅しの役割だ」

「おどし? 」

「うん、脅し。幾ら犯罪者だからってバカスカ攻撃を許されてる訳じゃないし出来れば戦闘は避けたい。そこで大技見せて実力の差を分からせるつて奴だ、これで三流事件は大体解決する」

非殺傷設定だからって人に向かつて刃を向けていい口実にはならな

い、か。確かに言われてみればそうですね

「それに非殺傷設定つてあれで未完成な所があるからなー。非殺傷設定だから大丈夫だよって言う奴がいたら逃げる、いいな?」

「え? はい」

「非殺傷設定が未完成? そんな話、局では聞いてない。と思う

「話逸れたな。そうだな、お前は魔力変換資質があるから将来に向けてその方面的技だな、AMFが通じない天候操作系の魔法で如何だろうか。見た目も派手で魔力消費も思いのほか少ない」

「つまり?」

「サンダーフォール。天候操作系遠距離魔法もしくは天候操作型儀式魔法、魔力変換資質の電気を媒介に雷雲を生み自然の雷を操作する魔法。ようは自然現象の再現だけど自然現象故に魔法無効果フィールドも突き抜ける魔法使い殺し殺しだな! ちょっと格好良いな魔法使い殺し殺し」

「語呂悪いですよ?」

「そつか? ま、いいや。で? どうゆつ?」

「儀式魔法ですか」

さつきも見せたように儀式魔法はちよつと苦手な分野なんですけど

「ま、完成まではある程度時間が掛かっても良いし威力を下げて詠唱や魔力消費を削ればお手軽必殺技くらいに下げれると思うよ」

「そ、そなんですか？」

「うん。それでも一年は掛かるだろうけどね」

一年。大技取得の期間としては短い方なのかな？

あ、そう言えば・・・

「秋兄さんって魔法に詳しいんですけど、秋兄さんの一番の魔法ってなんですか？」

「・・・お前は俺にそれを聞くか」

え？え？

秋兄さんは露骨に落ち込むがすぐに持ち直して深く考え込む

「強いて言ひなら俺の最大の魔法は言葉だな」

「言葉？」

「そ、俺は一般局員にも劣る魔法使いだからな。虚勢を張つて言葉で打ち負かさないとやつていけない訳よ・・・だから機械だつたり野生的だつたり逝つちゃつてる気味の犯罪者は手に負えん」

言葉。ある意味で誰も傷付かずに解決する一番の方法だと思つ、虚勢を張るのだつて自分を守る魔法も使えないのに危険に飛び込んでる訳だし

少なくとも誰もが簡単に出来る事じゃないと僕は思つ

「・・・それにしても魔法使い殺し殺し・・・流行りそくなんだがなあー」

・・・流行らせたいんですか？僕は秋兄さんのネーミングセンスがよく分かりません

一一二話～ side ハリオ～（後書き）

エリオの戦闘スタイルが少しフェイト寄りになり必殺技を覚えそう
な感じです

前回のあらすじ

エリオが遊びに来た フェイトさんの過保護つぶりに少し呆れる
でもあんな綺麗な女性が母親ならエリオも鼻が高いと思う 観光が
てらに観光地区を巡る エリオが訓練の成果を見て欲しいと言い始めた
了承 何故か寝ていた 自業自得? 昼寝でもしていたらしい
キャロは帰つたそうで エリオに魔法のアドバイスを 帰る前に
一応キャロがキャンプにいるか端末を開く するとエリオの悪戯し
て帰つたと言つ言葉が頭を過ぎつた

「キャロ～！～なんだこれは！～」

「ガウ？」

「キュクウウ？」

キャロはHプロン姿で田をパチクリしながら不思議そうに俺と端
末画面を交互に見る、隣でシロやフリードもキャロの仕草を真似する

「すみません、質問のないようが理解しかねます」

「いやいや～お前だら～～俺の端末のトップをお前の画像にしたの
は～」

「ダメですか？」

「駄目に決まつてんだろ？が！恥ずいーーー」

何のつもりだ。しかも自分で撮影したとは思えない程に自然なプロポーションじゃないか・・・可愛いな

「いやですか？」

「嫌では無いな！」

・・・あ

「ふふん。なら良いじゃないですかっ、雨水さんも料理番なんですから手伝つて下さい」

「・・・分かったよ」

「ところでヒリオ君は？」

「・・・あ

【画像を見た瞬間、全速力で此処まで来たから置いてきた可能性が・・・
・うん、置いてきたな

「ひどいですよ、秋兄さん」

「ハハハ！坊主も大変だつただろ？なー始めての場所で一人ぼっち
なんて！」

「うぐつー」

「フュイトさん怒るかもですね」

「キュクルウ」

「・・・旅に出るー」

そもそもキャロのせいだと物申したいが自然保護隊に味方はもう居
ない

・・・もつ・最初から居なかつた氣もするなあ

「俺はフュイトさんに打ち勝つ為に逃げるー」

「それを打ち勝つとは言わねえよ

「だつてあの人、子供関連で怒つたら絶対般若になるタイプだよー」

確信てるね。しかも権力財力実力どれを取つても勝てる要素は無い···つまり逃げるが勝ち！

むしろ逃げないは負け！

「つていま逃げてどうするんですか。フェイトさんが来るのは明日でエリオ君は今日は泊りだよ？」

「やうなの？！」

「なんでエリオが知らんねん」

「連絡があつたのはやつあだよ、エリオ君が知らないのもどうせんです」

「···誰かの所に泊まるの始めてだな」

「あれ？お前つて局の保護施設に居るんじゃなかつたつけ？既に誰かの場所じゃん」

明確に言つなら公共の場だから皆の場所か？

「···」

フリードヒシロに噛みつかれた···ダブルだと？！

シャワーを浴びているとヒリオが飛び込んできた

「キャ口から逃げてきたか」

「分かります?」

「まあな、それ以外は自然保護の女性に誘われるくらいだからな危険は」

男の子を女性はやたら採みくちゃにするがあれば何なんだろうな?」

良かれと思つてているのだろうか

「服すべ濡れだぞ?パジャマはあるからもう脱いで入つていけよ。一人用で狭いが子供のお前なら問題ないわ」

「い、いいんですか?」

「髪でも洗つてやるよ」

「あつがとつ!」ゼコますー!」

第一回エリオ寝かせる場所争奪戦がこの後繰り広げられ死闘の末に
俺が勝ち取った

・・・いらねえ

一十四話～side 雨水～（後書き）

原作設定を見返して気づきましたが原作ではまだ一人は出会ってないんですね～

一十五話～side ハリオ～

同じ布団で誰かと一緒に寝たのは何年ぶりだろう?

古い記憶にそんな感じのが無い訳じゃないけど僕の記憶かは分から
ない

「眠れないか?」

「え? い、いいえ」

「返事が返つてくるって事は起きてて眠れないんだな」

くすくすと小さな声で笑う秋兄さんは楽しそうでこの状況を自然に受け入れていた

秋兄さんが僕を本当の弟みたいに接してくれるから、僕もまるで本当に兄が出来たような気分になる

「そだ、さつき食事の時に言つたがお前はいまは局の保護施設にいるんだよな?」

「はい、フロイトさんも忙しいですし自宅に帰つて来ない事も多い
ですから」

「ふーん」

何となく秋兄さんの方に体を転がすと秋兄さんは僕の方を見ていた

ビックリした

「あれだな、急いで泣きながら仕事をしているフェイトさんが田に浮かぶ・・・エリオが待ってるってな」

「泣きませんよ、フェイトさんは強い人ですから」

「なら泣き田だな。いわゆる萌え死にさせる勢いでの」

否定できない！何か段々否定出来なくなってきている自分がいる

「そだな、うん、じゃあエリオも自然保護隊に来てみるか？」

「はい？」

話の流れが掴めなかつた。突然過ぎるし突拍子過ぎる

自分がどんな顔で聞いているかが想像出来ない・・・夜でよかつた

それにして突然過ぎて頭が付いていかない

「だから何で何してるか知らんが暇だろー」ひなちゅらキャロもフリードもシロも・・・まあ俺も居るし過ごすやうこかなつて別にミシードは普通に行けるからフローティングとも併用もしな

「やの、えと

「すぐ」とは言わんや。井に俺がキャロから被雷をお前に逸りしていだけだからな。アハハ

その理由なぜいつかと思つたと誘こはとも嬉しかった

「じや、寝むか。お前も寝ぬよヒロ。おやすみ

「おやすみです。秋兄さん」

おやすみと聞こひつだけなのに心が温かい気持ひになつた

が流石秋兄さん、ただでは終わらず・・・感動で暫らく起きていた僕を寝相で布団から蹴り出した

「へーん

「H・・・Hリ・・・Hリオ。Hリオ君!-」

「やうツー!Hリオ!-」

「ふふ、キヤロだよ。おはよつ」

「あ、おはよつ」

見渡すと秋兄さんの姿は見えない

キヤロは笑顔で顔を拭く為の蒸れタオルを渡してくれた

「雨水さんならもう仕事に出たよ」

「え?...じゃあ僕つてもしかして寝坊しました?」

「ん~特に早く起きないといけない訳でもないから寝坊じゃないかな」

キヤロと一緒に簡易テントの外に出るとフードとシロが寄つてくる

「キュクツー!」

「ガウツー!」

「二人ともおはよつ」

他の自然保護隊の人達も既に外に行つており残つてゐる人は数人だつた

女性ばかりで少し居心地が悪かつた

「エリオ君はそのままミッドに帰るだらうナゾ函水さんには会つて
いく?」

「あ、その・・・また来るから別にいいかな」

「・・・うん。 そうだね、またきてね」

この後、ミッドに帰つてすぐにキャロから画像付きメールが届いた
ので開いてみると僕と秋兄さんが仲良く一人で寝てゐる姿が映つて
いた

一十五話～ side ハリオ～（後書き）

ハリオのお泊りで親交が深まる回でした

一十六話 side 雨水)

前回のあらすじ

俺の携帯端末のトップ画面がキャラの画像から変更できない 交渉を試みたが取り付く島無し 仕方ないので放置 色々あってエリオと寝ることに 年下だがエリオと話すのは結構良かった 別れは言えなかつたがまた来るらしい

「で、此処は何処だ。マース・ヒューズ三等陸士殿」

「でつてお前さん、もしかして話も聞かずにノコノコ付いてきたのか? 雨水秋春三等陸士殿」

「俺はお前を信じてるからな」

「信じるって不思議な言葉だよな、思つてもないのに言つてみれば大概の人間関係は如何にかなる」

「なに急に悟り開いてんだよ老け顔」

まあ老け顔と言つたが現に俺より年上な訳だが

敬語とは敬意を表する言葉と書く、詰まる所は「イツにはいりん

「よしよし、同じ部署のヤツに雨水秋春は一桁にも達してない美幼

女の写真を個人端末のトップ画像に登録してるので広めてやるよ

「やめやー」

「ふははー!止めたって遅いわ、ネタ帳に保存つと

懲りから手帳を取り出して本当に書き始めやがつた、アナログめー

「お前なんで懲り手書きなんだよ。つて何か落としたぞ?」

「あーおーー馬鹿、拾うなー!」

拾うなとは・・・拾えと言つ意味だと俺は思つてゐる

拾つてみるとカメラ目線でピースポーズを取つた可愛い女の子が写つていた

「おめえ盗撮はアカンやろお」

「アホかッ!誰が盗撮だ!ちゃんと承諾は得てゐるわー!」

「これ背景は公園か?お前まさかその辺の・・・」のロコロコンめー!」

「娘!このちよープリティキューーティーラブリーエンジンジル可愛い子は俺の娘だ!」

エンジエル以外は全部大雑把訳で可愛いって意味だろと突っ込むべきか？！それとも何でそんな食い気味なんだって方を言いつか？！

切り上げよう

とにかくこの話をせつと切り上げないと面倒な事になると違いない

「へ、へーそりゃ良かった」

「今年で十一歳でなく、この写真は八歳の時なんだがいまはもっと可愛いぞ？」

「あ、はい。そうですか」

「お前さんとのキャロちゃんにも負けねえぜい」

ん？十一？確かにヒューズの年齢は二十代後半、そこから大雑把に引いたら十代後半

子供作るの早すぎねえ？！管理局は子供の内から能力さえあれば仕事につけるし、そんな子供は子供らしからぬ大人びた感じになるだらうが幾らなんでもそれは無いだろ

「別に張り合おうとは思ってないんだが」

「お互い娘は可愛いってな」

「は？ キヤロはフェイトさんの娘か妹だ。俺は赤の他人で旅仲間」

「・・・お前さんは」

何だその残念なモノを見る目は、チョキでシバくぞ

話は大きくずれてしまつたが、俺はヒューズに連れられ管理外世界に来ている

理由としては、管理予定の管理外世界の視察。と言つ話で俺は来て
いるはず

暫らく歩くと明らかに研究施設ですと言いたげな建物が見えてきた

これは可笑しい。ここは無人世界との事だつたはずなんだが

「やつぱりか

「何がだ、いい加減教えろ」

「あ、ああ、外れてたらこのまま観光といきたかったが如何やらそ
うも問屋は卸してくれねえって訳か」

「いいから説明しろ」

ヒューズの話を纏めると・・・これは特務で次元犯罪者が行なつた違法実験の跡地であるアジトの調査及び可能であれば犯行の証拠を持ち去る事

・・・おいおい！何で俺やヒューズみたいな下っ端にそんな任務が回つてくる訳ですか？！

「ハハ、お前さんのいまの顔を見れば考へてゐる内容は大よそ検討は付くが勘違いしてもらつちや困るのはこの特務は俺におりた話つてところだな」

「・・・なら何で俺を巻き込む」

「ロストロギア関係の事件なんだし鑑定士を連れて行つて損はねえだろ？」

「・・・嵌められた！！

一十六話～side 雨水～（後書き）

ヒューズのフルネームは変に捻るのも可笑しいのでそのまま持つてきました

前回のあらすじ

ヒューズに騙された 以上！

「廃棄されたのは最近か」

「みたいだな、足場わりい」

砕けたガラスをじやりじやりと踏みながら進むと生体ポットの並ぶ
部屋に辿り着く

「おいおい、マジかよ」

「」いやあ、デカイ当たりだな。予想通りとも言えるがな

「予想してたんかい。何が入つてたんだろうな、コレ」

次元犯罪者が生体ポットを所持している理由なんて数える程にある
訳じゃない

単に魔法生物を使った研究か、単に人間を使った人体実験か
どちらでも面倒で非道なのに代わりは無い

「ん？ 分からないのか？ お前さんのその目でも」

「その、 目・・・だと？」

「レアスキル。目に関係してるんだろ？ 使用時にコンタクト状の魔力膜が張られる。色はお前さんの魔力光の白と茜を混ぜた感じの色つてところ、あたりだろ？」

マジか！

自分で全く気付かなかつた。つてか黒い目からそれを被せてあるんだから外からは殆ど見えねんじゃね？！

この際、何で俺が名目上レアスキル持ちつて知つているかなんて気にならじよじじよう

「知つてるなら使つが

観察眼のスイッチを入れて瞳を切り替える

生体ポット内部 血液反応 魔力資質△ランク相当

中身は人間だつたらしい。辺りを一応見渡しておくか・・・

敵意 有り

敵意かあー敵意敵意・・・てき、い?

「ヒューズー、やべつ、むががふー」

「敵さんだろ? 大声を出して如何するよつて」

オブテツツクハイド 発動確認

いい加減視界がウザイので観察眼を切る

「幻術魔法つて普通三等陸士が覚える魔法か?」

「「」のくら」なら基本技能だ」

あれ? そだつけ?

魔法が出来ないから割とちょっとした技能でも高く見えるんだろうか

暫らくすると円柱型のカプセル風機械がウロウロし始める、恐らく
あの一つ目が赤く光ってるつて事はセンサー式なんだろうな

ん? だけど何のセンサーか知らんが完全遮断できる程の幻術魔法は
流石に基本技能じゃないだろうと思つ

「なんで廃棄した場所に見回りを」

「ワザと廃棄した、とか?誘き出す為に」

「・・・せうか。一可能性としては有りだな、引くぞ」

「え? どうやつて? 滅茶苦茶ウロウロしてるんですけど・・・あの丸箱型一つ田機械」

「お前さんのネーミングセンスが分かつた気がする」

しかしまジで如何するか数はざつと五体、武装は大きさから見て対人武装。一体一体はそこまで強くないはず

調査用っぽいし

都合が良い事にセンサーは完全に遮断できているからヒューズの魔力が尽きるまでは気付かれない

「さて、如何する」

「アイデアはあるかい? お前さんは一応魔法無しで何回かは戦つてきたんだろう?」

「アホか俺の武器は言葉だ。あんな会話無しで無言で発砲しそうな相手は無理。そつちは」

「基本的な魔法は一通りだけど補助型の魔導師だからな~期待は・・

・な

交戦は難しいか

ま、最初から逃げる算段を立てるつもりだったから良いか

「お前武装は？なんか持つてんだろ」

「最近AMFが流行ってるからって無理やり携帯許可を落として手に入れた小型銃とその弾倉一ダース」

「流行つてんのか？」

「ああ一応一部で、お前さんは？」

「使えない支給の杖が一本」

小型銃の装填弾数は一発。弾倉が一つて事は銃の中身を含ませて計十四か

「走った状態で何分くらい幻術は続く？」

「八分が限界」

帰り道まで走つて倍は掛かるな

「アイツら奥に向かってるが入り口付近に伏兵はいると思うか？」

「如何だろうな。俺なら一体は配置する」

「ま、そりや突入部隊よりは少ないだろ？からそんなもんだよな…。
・うし！ならお前と俺の武器交換な！俺、魔法使えないし。そして
突破作戦を考えたぜ！」

「大声つぽく小声とは器用だねえ」

「まあな！危機的状況なら人間大概の事は出来るぜ！」

一一七話～side 雨水～（後書き）

雨水の魔力光をサラッとだしてみました

一十八話 side 雨水

前回のあらすじ

廃棄された研究所を探索中囮まれる 丸箱型一つ目機械、五体に遭遇した！ が即逃げるを選択

「逆方向に向かってくれて良かつたぜ」

「支給品の杖でもないよりはあつた方が使える」

五分か

外に伏兵がいたらヒューズに倒してもういたいし此処は魔力温存の為に

「ヒューズ、もう幻術解いても良いんじゃねえか」

「・・・そうだな」

俺もヒューズも後ろを振り向いて追つてを振り切ったのを完全に確認すると止まる

そして走りから歩きに変える

「さて、外に居た場合は入り口を見張られてるから確実に逃げるつて選択は出来ないだろ？」「

「お前さん、さつきは策があるって」

「あ、やべ。ヒューズを安心させて敵の前まで連れて行こう作戦にさつそく亀裂が…」

「さて準備準備」

廃棄研究所出口付近

俺達は現在予想通り待ち受けていた敵を隠れながら覗いている

「さて一人一体を相手取る。分かつてるな」

「俺は良いが…お前さん。本当にそれで戦うのか？」

「もちろん」

「自然保護が聞いて呆れる」

「俺は命と自然を天秤に掛けるなら即命を取る」

ヒコーズの深い溜息を合図に俺らはそれぞれ飛び出す

すぐに向いには仄づくが俺とヒコーズの魔力弾で分断される

これで予定通り一対一の構図が完成

「さて、お前が俺の相手な訳だけど」

ヒコーンと音がして俺のすぐ横を何かが通り背後で爆発

・・・いつ、がくへいき?

ちよー質量兵器じゃないの?!.なんで光学兵器?!

「武装もちゃんと觀察眼で見ておけば良かつたーッ!」

ヒコーンヒコーンとレーザーが飛び交う

どうにもレーザーの標準がキチンとしてないのかまだ未完成品な
か結構標的からブレている

俺は研究所から拝借した可燃性の謎の液体を取り出し投げ付けて銃

で爆発させる

「お？ 思いのほか・・・そつか普通に考えて機械は火に弱いか」

ダメ押しに残りの可燃性液体をぶちまけて爆破

見事「こんがり丸箱型」一つ田機械を一つ完成させた

「ああ、予想以上に被害が」

当然燃やしたは良いが消す方法など皆無の為、自然消火を待ちたい
が・・・森の中だしなー

「そつちも終わつたみたいつてこりやー派手にやつたなー」

「仕方ないだろ」

「報告書と始末書が・・・」

「俺は手伝わなきからな」

後の報告では急遽消防隊を呼んだのでそれほど大きな被害にはならなかつたが研究所の中にいた五体は発見出来なかつたらしい

「夜間警邏？」

結局本局で軽い報告書と森を燃やした始末書を書いて帰つてくると突然おつちやんに夜間警邏を頼まれた

何時もは夜間の警邏の為、夜間の仕事は初めてだと思つ

「俺一人で？」

「こや、今日はキャロちゃんを見守る役としてお前に一緒に行つておひがひと頼つてゐる」

「なるほど確かに幾ら同員だらうと子供一人に夜間警邏は無いよな

「任せとけってー」それでもキャロの子守にはかなり慣れてるんだぜ

「やうやく事だ、引き受けてくれるな？」
「！」

ん？でも此処の夜つて街灯も無くつてかなり暗くなかったか？

二十八話 side 雨水（後書き）

戦闘シーンが結構難しい

一十九話 side 雨水

前回のあらすじ

本局にて簡易的な報告書と始末書を書き終え自然保護に帰る するとすぐにおっちゃんに会って夜間の警邏を頼まれる 割と軽い気持ちで承諾 で現在に至る

夜間警邏とは。よつは密猟者は昼夜待つてくれないので当然夜間の間も警戒を怠る訳にはいかないと呟く訳での仕事なのだが

「真つ暗だな」

「よし、ですからね」

森の夜は俺の予想を遥かに超えて暗黒だった

「じつ言つと俺つて暗いの苦手なんだよね」

「何となく感じます」

それにしても昔の人は木をお化けと勘違いしたそุดけど仕方ない！本当になんかお化けの類に見えそุดもん

ゆらゆらとマジ恐ええ

「帰りたい」

「あと少しですか」

「大体誰も」「こんな夜中に来ねえって」

「もういいとこやつにあいつだから止めてください」

確かにセリフ的にフラグっぽいか

お化けが密猟者か・・・どちらも会いたくはないな

「わたしょい恐がつてどうするんですか」

「キャロ。あのな?幾つになつても恐いモノは恐いんだ」

「あれなんですか?雨水さん」

「木だ!木に違いない!むしろキャロの目が悪い!」

一瞬キャロの怒りが沸点に達した気がしたが気にせずに手を掴みその場を走り去った

「まつたく！あれが密猟者だつたうどつする奴なんですかー。雨水さんー。」

「キャロ、俺らは何もなく見回りを終わらせた。OK？」

「いっぺん一人で行つてみます？」

キャロが黒い！いまはフリードもシロもいないから物理的攻撃はないだろ？ 何だかそれ以上にくるモノがある

「さー。わたしがついてますから見に行きますよー。」

「いやーもうキャロ一人で行くつて選択はないかな？」

「女の子一人を暗い森にほうり込むつもりですか？」

「・・・だよなー」

俺としては一向に構わないがそれを自然保護隊の皆にバレるとやっぱいい。ガチで一週間ぐらい一人夜間勤務になりそり

「キャロ話がある」

「聞きましょー」

「明日プリンとケーキ買つてくるから今日は止めよう

「…………ダメ、ですよ？」

あ、意外と搖らいだ

流石に確りしていてもまだまだ子供か

「うわあ、うちの町にいた店はないからなー最近食べてないだろ？」

「だ、だからなんですかっ、駄菓子ですよー。じー」とは妥協しませんー。」

「んん？だがお前の見間違いだった可能性もあるよな？その可能性で話を進めるだけで甘い物が手に入るんだぜ？」

「うぐぐ

「さあさあお年頃のキャラちゃん。甘いケーキは食べたくないかい？」「まならアーンってしてやるよ。」

「ううう

何でそこで拳を握るのかが俺にはサッパリ理解出来ないがこれな
イケる！

何だかフルプルと震えて前に大人キャラからくらつた魔力パンチを

思い出しあつになるけどいまは余裕の態度を崩さないようにしないとい

交渉事の基本は余裕のポーカーフェイス

「しょ、しょうがないですね！わたしは何も見なかつた…これで良いんですね…！」

「うしー・ハラペ「キャロの攻略なんてこんなもんよ！

「何かムカつく事をおもわれた気がします」

「氣のせいだ。さ、帰ろう」

「恐がりな雨水さんのために手をつないであげますよ

「そりやありがたいね」

初めての夜間警護は何の事件も無く平和に終わつた

・・・とは問屋が卸さなかつた

「見張つていた、だと？！」

「当たり前だろうが新人の、しかもお前等みたいな若いのを一人だけで行かせる訳ねえって普通に考えたら分かる事だ」

後日、自然保護隊の女性陣には自腹で甘い物を駆走する嵌めになり男性陣には雑用係りとして扱き使われた・・・俺だけ

え？ キヤロは？ 共犯だよね？

一十九話～side 雨水～（後書き）

そろそろ時系列的に原作へのカウントダウンなので入り方を考えないとなーと思いながらの執筆です

前回のあらすじ

最初から作り物と分かつてお化け屋敷と違つてリアルは恐い何故かこう言つるのは平気なキヤロを連れて夜間警備 キヤロが何か発見したモノの俺が逃走 魔法がある世界なのだから幽霊がいても可笑しくない 自然保護の全員にサボリがバレる 約一ヶ月のタダ働き決定

「データですねー」

「なにが、ですね、だ。俺の両手を見て言え」

あるいは大量の甘味系

前回の罰の女性陣へのプレゼントをillardで買出し來ている

「荷物は男が持つぞうですよ?」

「男女平等の世界だ」

「あ、それお店に行きましたよー。」

「聞けよ」

「ふう～ようやくやべり出来るー」

「ふふ～ん、わたしのおかげですよ」

・・・そうだな

「割くらいはお前のせいだこの状況だな

「そう言えば」の間、聞いた些細な話なんだがエリオの方が年上なんだってな

「え? ほんとですか?」

「うん」

「ど、どしょ一年上の人に君とか言つちやつた」

「まあ上つて言つても一ヶ月程度だけな」

だから年齢的には同じ九歳

九歳か、やっぱり周りからは俺とキャロは年の少し離れた兄妹ぐら
いに見えるんだろうな

うるうん

「雨水さん」

「んあ？」

「食べ物をくれるって話じゃなかつたですか？」

「せつしきした」

恥ずかしかつた

本当は周りはそんなに気にしていないのだろうけど精神的にくるモノがあった

「減る物じゃないですし」

「減る。俺の心つて言つた精神つて言つたその辺が減る」

「ならいいですね」

「言い切つた！？」

力チャリと音を立てて俺の田の前に置かれるケーキ

「なあ」

「なんですか?」

「わざも食べたよな

「はい」

「ふとジ

市街での魔法攻撃はミジドの法で厳格に規制されています

「シユーター?...おまつ、申請無しに。バレたら」

「大丈夫です、管理局のひとも女の敵へのしづきと言えば許してくれます」

そんな緩い組織になつた覚えは・・・んーこの辺りを仕切つてゐるは確かあそここの部署だったな

面識もあるし、もしかしたらその理由で通り抜けうかも

厳重注意は免れないにしてだらうけどね

「はあー」

「溜息を吐きたいのせいです、まつたく雨水さんね」

「はー、キャロ。アーンして」

「まだどうも・・・あむ、ふあつたくづひゅいはんわ」

ん、正面から見るとクリームを口に付けて美味しいのにケーキを食べる美少女

俺は結構役得なんじゃないか？

うん、やつ思つと出費も安いと思えるな

「ひいてます?」

「全く全然」れっぽつちも聞いてない

待機スフィア十六

「わーデバイス無しで詠唱無し更にほぼ無動作でこれなんて成長したねー」

「んぐ、はむ、誤魔化されませんよ」

「なら、はーアーン」

「あーん」

「美味しい？」

「ケーキに罪はないです」

美味いらしい

俺だけかも知れないが俺はケーキの細かい味に興味が無いので大概なら甘い、美味しい、美味しいと思うのでキャロの意見は結構参考になる

「結局なんの話だった」

「さあ？」

「ま、いつか。少し食べるペース上げろよ。お土産が駄目になっちまう」

甘い物は別腹と言つけどもこれはもう「飯がサブで甘い物がメインつて感じの勢いだよな

他の女性局員も少食の割に甘味系は確り食べるし、つてかむしろ飯を残してデザートのみ食べるなんて人も居たような・・・ま、別に学者じゃないし深く考えてもしょうがないけどさ

「わかりました」

はあーこの大荷物をまた運ぶのか、キャロは・・・手伝つてくれないよね

ケーキの好みはチーズケーキです・・・書く事が特にない。
感想待つてま～す！

前回のあらすじ

罰ゲームの買出し キヤロも付いてきた は良いが荷物を持ってくれる訳ではなかった 真実は勢いでの約束を果たす為だつた 美少女にアーン HPの限界です キヤロの魔法の成長が少し見れた 帰るとフリードとシロくのお土産を忘れていて歎みつかれた

「今日はおつかやんとか」

「別に始めてつて訳でもねえだろ」

「まあな」

今日はおつかやんと共に警邏

男一人で・・・これならキヤロの方が断然マシだ

「そいやお前等が保護隊に来てもう結構経つな

「半年以上か・・・もうちよいか?」

「最初はこんな餓鬼共に勤まるか不安だつたが」

「そんな事思つてたのか」

「ああ、自然保護隊のシフトは不規則だからな。若い奴はどうも・・・」

「

それで中年か物好きしか居ないのか

此処に来て新たな発見だ。俺もキャロも氣にしてなかつたから考えた事もなかつた。かな？

「実際俺も家族をミッドに残してこいつら來てるからなあ

家族をミッドに残してねえー・・・かぞく？

「家族つて父親母親の事か？」

「は？妻と娘に決まつてんだろ」

「つま？」

「妻」

「むすめ？」

「娘」

「はあああああ？！？」

子持ちだったのかおっちゃん…いや年齢的には有り得る話ではあるがそんな話一度も聞いた事が……

いやまあ家族の話なんかしようとも思つてなかつたけどやー

にしてももつと早く知る機会があつても……

「キヤロちゃんから聞いてないのか?」

「キヤロ?…聞いてない聞いてない…」

「…・・・が、気にすんな

「なんの励ましだ」「ララア…」

絶対ワザとだ

帰つて聞いたらたぶん「え?保護隊のみんな知つてますけど雨水さん、もしかして…・・・」とか言いつらう。しかも笑つて

・・・段々俺の中のキヤロが黒くなつていくな

あくまで俺の中でだけど…・・・本人が聞いたら怒りそつだから語ら
れないよつこしよう

「キャロちゃんと同じくらいの年でな

「んーんー有り得ないな

「喧嘩売つてるのか?売つてるよな?買つぞ~」

「さて、向こうも見て周るぞ」

おっちゃん何気にガタイは良い

流石密猟者を何人も相手取つただけあるな

「お?あれ、シロじゃないか?」

「シロだな、子供に囲まれて何時もの風景だ」

「ほお~」

シロは女の子に人気だ、人形っぽいとかそんな感じだろうな

ちなみにフリードは男の子に人気。まあドロゴンって響きは何かか
つけえよな

「キャロちゃんの使役術は凄いよな

「ん?」

「魔狼つてのは本来プライドの高い生き物でみんなに人懐っこくな
るような動物じゃねえんだよ」

「あーそのことか」

「驚かないんだな」

「それはもう」

なんたつて幼くして真竜クラスの加護を得ている天才召喚士

鳥獣の類程度なら楽に手懐ける。本人の意思があるかは知らないけど

「ホントにお前とキヤロちゃんの関係はよく分からねえんだよな」

「何処が、分かりやすいだろ。かなり」

「じゃあ口に出して言つてみる」

「旅仲間」

「じゃあ旅をしていない時はなんだつてんだよ」

・・・あ、確かに

三十一話～side 雨水～（後書き）

キヤロとの関係性に未だに悩みます、兄妹って感じでも無いですし
ね

三十一話 side キャロ

自然保護、名前だけ聞けばとてもゆったりとしてそうな部隊ですが、その活動はとてもハードな一面を持っています

「セニの密猟者…ここは保護区域ですよ！」

「うむせえガキ！」

「がき？」

どうして犯罪者の方々は口が悪い人が多いのでしょうか

私は保護隊の人達に連絡を取りながらマーカル通りに密猟者を追い込みを掛ける

「フリード…」

「キュクル！」

成功の感覚を思い出すように腕の中のぬいぐるみを抱きしめる

ちなみにぬいぐるみはバリアジャケット展開時に一緒に構成される
ように調整してもらつた

「竜魂召喚…フリードロー…」

本来の姿を取り戻したフリードロー跨つて空から密猟者の姿を確認する

数は三名

それぞれバラバラに逃げている

それで追跡を振り切つているつもりなのだろうけど上から見れば誰が如何動いているかなんて一目瞭然

「わたしは直接は戦えないけど・・・皆をサポートする事くらいはできる…」

私は連絡用の空間モニターを複数展開して保護隊の皆に指示を出した

密猟者は皆の連携によつて被害も特に無く捕獲できた

一応私も頑張つた訳ですから雨水さんから壊めてもうえのかなあー
なんて期待してキャンプに戻る

「大丈夫？」

「いや、つپつ、無理、だい、くつ、ハードって」

「あらあら」

キャンプに到着すると雨水さんが女性局員に膝枕をしてもらいながらダウンしていた

・・・私が頑張ってる時にい

「雨水さん」

「ああ、キヤロカ」

「なんで雨水さんはわたしが頑張っていたのに女性の方と・・・その、良い感じになつてるんですか〜?」

「はあー?なに、あーメンドクサ」

なつー面倒つて。この人は!

「ボコボコにしますよ?ー」

「うげー」

うがってそれが女の子に対する反応ですかって

「駄目ですよ雨水さん。そんな言い方だとキャラ君が誤解します」

「いや、マジ俺そんな体力残つてない」

「もう・・・あのね、何で雨水さんがこんな状態になつてるかって言つとね?」

聞きました

ええ、もしかすると雨水さんの最後の弁護の可能性もあるんですから

「キャラ君の為に頑張ったからよ」

「え?」

「空を飛んでるキャラ君を必死に追い駆けてたらバテたんですね」

「ほんとですか?」

あれ?でも空から見てたけど雨水さんの姿なんて・・・

あ、雨水さんて魔法殆ど使えないから普通の一般男性並みだった

「じゃ、あとの看病はキャロちゃんに任せね」

「あ、ちよー」

「明日になつたら何処まで進展したか聞かせてね」

行つてしまつた

「う、雨水さん」

「あ、なこい、マジきつ」

「ほ、ほんとにわたしの為に?」

「。。。

雨水さんは深呼吸をしてゆつたりとダルさうに立ち上がると私の傍まできて軽く頭に手をおいた

「まーな、子供を守るのが大人の役目だし?ま、実際はこの有様だけな

暫らく私を撫でていた雨水さんが突然私に寄り掛かるよつに抱き着いてきた

当然慌てた私は見上げるよつに雨水さんを見る

「つて氣絶してる?...」の人どんだけ全力出し切つてたんですか!?

慌ててわっさまで横になつていた場所にもつて行く

お、おもいです

「なんで雨水さんは・・・いつも格好いいですけど何でこんなに残念な人なんでしょう?」

それとも私はこんな雨水さんが好きなんでしょうか?

三十一話～side キャロ～（後書き）

ちよつとした原作との変更点、バリアジャケットにぬこぐるみ追加。

ぜんかいのあらすじ

あれがこいつしてこうなつてああなつたらああしてこうなつてるわけで、つまりわたしがなにをいいたいかといふと
どいじよいつへ

「キヤロ～・マジ～」めん・・・ゆるして・・・

このムカつく寝言を吐いているのが私の初恋？の相手の雨水さんで
私は自然保護隊の女性隊員の計らいによつて一人つきりこされてしまつた

感謝はしますけど心の準備をさせて欲しかつたです

「フリードもシロも居ないし」

起こした方が良いのかこのまま寝かせていた方がいいのか

けして世間から言わせれば格好良い顔付きじゃないし髪形も美容室で適当にと言い張る大雑把で、服装は自然保護の局服だが私服は結構無難好き

総合的に言えば悪くは無い。みたいな微妙な点数がつく

「あ、でも肌やわらかい」

頬を突いてみる

人肌の温かさと予想以上の柔らかさ

目線を下げていけば呼吸を楽にする為か局服のボタンを幾つか外して肌を出しているのに甲がいく

「ああええと、掛けふとんでも持つてきた方が・・・でも誰もいないのに離れるわけにもいけませんし」

なんでしょうか、やつぱりこいつ言った場合はもつと甲斐甲斐しく看病つぽい事をした方が良いんでしょうか

でも私、あんまり病気なった事ないですから看病とか知りませんしあり合えず苦しむだから局服のボタンを外して緩めた方が良いのかな?

「雨水はいるか!」

「うひやーっ?!」

お、おじさん？

ビーハンでしゃうか。切羽詰まつたよつて

「あ、あのーこれはー別にいかがわしいとか、そんなんじや

「何言つてんだーヒューズつて野郎が仕事の最中に大怪我負つちまつたつて本局から連絡が！」

・・・うわ・・・ですか？

真っ白く清潔感のある部屋、正しく病院。ヒューズさんの部屋は個室で静かな部屋だった

「おーお前さん達か、何だ？お見舞いか？」

ヒューズさんは上半身だけ起にして何時もの笑顔で手を振っていた

・・・思つたより元氣そつで良かつたです

「お見舞いつつたら果物だよな、ほい」

「メロン」

「フルーツの盛り合せだー」

向かいの店で適当に手に付き買ったお見舞いの品を他のお見舞いの人達が置いていったであろう場所に置く

「全く、元気なら元気と先に言つて欲しいね。キャロを泣き止ませる、いつもの身にもなれよ」

「アハハッ！ わりいわりい、こしても俺の為に泣いてくれるなんて嬉しいねえ」

「ちよつー・鈴木さんー」

私はヒューズさんが怪我をしたと聞いた昨日、容態も分からなく重症とだけ聞いていたのだから取り乱してしまった

「どんな任務でそうなったんだよ」

「んーちよつとな

一瞬だけ一人の間に不穏な空気が漂つた気がしました

「二人は自然保護でも上手くやつてんのか?」

「まあな

「バツチリです!」

「そりゃ結構なこつた

「これだけ元気なら回復は早そうですし本当に安心ですね

それから私達は他愛も無い話で時間を潰した

「そろそろ、時間か。そだキャロ、少しヒューズに仕事の話するから先帰つてくれないか?」

「分かりました、余り遅くならないで下さいね。面会時間終了まであと少しなんですから」

「はいはい

言われた通り部屋から出る。仕事の話と言うのなら仕方ないです。・ん?雨水さんが懶々こんな所で自主的に仕事の話を持ち出すかな?いまは休みなのに

やつ思つと少し好奇心が沸いてしまい扉に耳を当ててみた

「ヒューズ、お前。右足が動かねえだろ」

「は？ いま雨水さんは何て……足が、動かない？」

三十二話～side キャロ～（後書き）

今回の話。予定ではヒューズ死亡の話だったのですが・・・そんなシリアルスはどうギャグまで戻せば良いか分からぬ、と思い急遽ですが復帰できない大怪我に変更しました

前回のあらすじ

疲れで寝ていると本局から連絡 ヒューズが未確認のアンノウンによつて重症と知らされる 時間帯のせいもあり後日 病院に向かうと元気そうなヒューズ ほつとしつつ観察眼で見ると右足が動かならしい キヤロを追い出して話を聞く 後ろから背中を刺されたと証言 その際に脊髄をやられた ま、本人が気にしてないしするなと言うのだからそうしよう

ついでに何でそんな危険度の高い任務についてるのか聞くと（半ば問い合わせた）ヒューズは実は優秀な警察官らしい。もう怪我で辞めるから言つても良いとのこと

一応今までの功績分まとめて昇格するらしいマース・ヒューズ準陸尉になるらしい

・・・あれ？また一人俺の上に立つたよ

「ん~いい天気だ。絶好の警邏日和だな」

「ガウツ！」

「キュクル」

今日は危険地区外周の見回り

キヤロが休みなので代わりの散歩要員として任された

「ガツガウ！」

「ん？ そっちにはいかないぞ？」

担当外だし帰り道まで遠回りだし

「キツユクルー！」

「いかねえって」

お前らどれだけ散歩に飢えてるんだよ、歩き盛りかコラ、 そう言つ
のはキヤロと一緒に時に解消しておけ

「ガウガウ」

「キユクキユク」

「引っ張るな」

あれ？ コイツら小さい割に結構力が・・・

「おっ！待て！」

「ガウウッ！」

「何を言つてゐるか分からん！」

「キュクク」

「お前でも同じだ！それに何か笑つてゐように聞こへやうぜ？」

せめてもつと見渡しの良い場所だつたら適当に放して一匹で遊ばせておけるんだが生憎と道だから放すと逸れる

・・・はあー仕方ないか

暫らく一匹に従つてこると急に一匹の動きが慎重になつたので俺も慎重に進むとキャロの後ろ姿を発見した

「お前らの目的はあれか」

「ガウ」

「キュ」

どひやうじうじい

ふむ、てつきり休みはゆつくりとキャンプに居ると思つたが何でこんな場所に・・・局員外は立ち入り禁止の安全保護区域か

まさか一人で来た訳でもあるまい

「誰か他見えるか?」

「ガウツ」

シロの視線の先にそれっぽい人間を発見

キヤロと同じくらいの背丈か

・・・エリオじゃね?

「うん、エリオだな」

「キユク?」

「んー出て行くのは早計だな、もう少し見守るわ」

主に面白やうと書つ理由で

「匹も俺の意見に賛同したらしく森の方に一緒に隠れる

さて、問題はいかにバレずに様子が伺える距離を維持するか、だな。
俺は幻術系の魔法なんて一つも出来ないからなあ

「ん？でもフュイトさんから来るつて連絡無かつたしエリオも黙つて来たのか？」

キヤロは大人顔負けの仕事量をしているしエリオもフュイトさんの仕事を喜んで手伝つていると聞く

そんなお利口子供達が大人に黙つてなにやら密会

・・・ふははつ

「よくやった。フリー・シロ

「ガウガ！」

「キュル！」

フュイトさんに言つのは後々ゆづくつ考えてこするとして、せめて話の内容だけでも聞きたいな

「フリー・ドもシロもキヤロやエリオにバレてるし田立つから野生の

フリして近付かせる作戦は無理だらうしな～」

キヤロは自然での犯罪者発見で鍛えられてそつだから隠れても目聴く発見されそう

エリオはエリオで優秀なフェイトさんの下で働いてるんだからかなりスキルアップされてるだらうからな～

あれ？二人とも死角が少ねえ！

三十四話～side 滉水～（後書き）

ViViDの5巻を入手！かなりハイテンションで読んでいるとロナ・ティミルの「コレム創成が応用の幅がありそうで思いのほか強そうだなと思いました

最後の番外編の時のヴィータが可愛かったです！

休みの日

今日は相談があつてエリオ君に来てもらつた、お仕事の邪魔にならないか不安だつたけどエリオ君も話があつたらしいから丁度良かつたらしい

迷惑にならなくてよかつた

「えとキヤロから良じよ

「あ、エリオ君からで」

話そうと思っていたのに口に任せてみると葉に詰まつてしまつ

「・・・じゃあ僕から、実は今度新設される部隊に誘われてるんだけど」

ん?新設部隊?

ちょっと待つて、部隊なんてそもそも設立されるはずもないしタイミングから見てもしかして・・・

「あの！・・・もしかして八神一佐から？」

「え？ 知つてた？」

「うん、私も少しまえに本局から電子メールでさそいが

「どうやら私達二人とも同じ内容の相談だつたみたい

古代遺物管理部機動六課

確かそれが新設部隊の名前だつたとはず、試験的に設立、運用される部隊でロストロギアを専門に自由に動ける部隊らしい

「・・・ええとキャロは部隊入りは受けれるの？」

「わたしは受けでみよつと思ひ」

前戦部隊なら雨水さんから教えてもらつた事をフルに活かせるだろうし、何よりエースと呼ばれる方々から指導を受ければと言うのはかなりプラスになる

「そつか

「うん、フロイトさんやなのははさんと一緒に部隊なら自分のスキルアップにもなるだろうから

「せうだね、僕もフュイトさんへ拾つてもうひつた恩を返したいし雨水さんから教えてもらひつた魔法を活かせると思つ」

私もフュイトさんは恩がある

フュイトさんに言つたら気にしなことひつだりうなびで出来る限り手伝える事は手伝いたい

「・・・雨水さんも一緒に来てくれると心強いんですけど」

「あーむつじやないかな?」

雨水さん魔法苦手だから

機動隊はヒーロー魔導師の集団だから雨水さんに誘いが来る可能性は皆無だと思つ

「・・・はあ~」

部隊入りしたら雨水さんは離れ離れかあ・・・嫌だなあ

私達はそれからそれぞれの不安を相談しながらゆっくりと歩く

話してみるだけでも楽になると、いつのまに強烈な間違いじやないじや

「キャロ」

「うん、言いたい事は分かるよ。エリオ君」

ふと立ち止まり一人して違和感を感じ取る

視線

監視と言つ程には厳しくはないですが明らかに固定された視線、私達は再び歩いて自然を装つて後ろを確認すると

雨水さんとフリードとシロが居た

「何をやつてるんでしょう?」

「雨水さん今日は仕事のはずなんだけど」

それは出掛けの前に確認済み。フリードとシロの散歩をお願いしたから一緒に不思議じゃないけど

それには雨水さんの担当地区じゃないから仕事中だとも思えない

「何処で気付かれたんだろうね」

エリオ君は恥ずかしそうに苦笑する

「たぶん結構前に雨水さんの担当地区付近を通りたからその時かも。
でも雨水さん魔法苦手だからあの距離なら会話は聞き取れてないと思つ」

絶対私達を発見した時は何か面白そうな事がとか考えたに決まります

フードヒーロまで巻き込んで……はあー

「秋兄さん、遠慮してるんですか？」

「違ひと思つ」

「そうなんですか？」

「うん」

そもそも私達に遠慮をしているなら尾行なんてしません

「どうする？僕たちの方から行つてみる？」

「んー・・・そうだね、そうしようか」

私はあえて森の中に入り木の陰に隠れる

雨水さん達は突然消えた私達に驚きながら入つて私達の近くまで寄つてくる

「あれ？見失つた？！あー一人共小さくて面倒だ」

酷い言い掛けりです

三十五話～ side キャロ～（後書き）

ようやく原作の兆しが見えてきました

三十六話 side 雨水

前回のあらすじ

仕事中マスコット一匹が暴走 エリキャロ発見 追跡開始 キャロが難しい顔をしたり赤くなったりと面白い エリオは考え事をしていたようだが解決はしたように見える 二人の姿を突然見失う バレたな

観察眼のおかげで居場所はすぐに特定できる

「んー待ち伏せか・・・さてどう脅かすか。どうする?」

「ガウウ」

「キュクウ」

待ち伏せとなれば当然ある程度近付けば出てくるか

声はもしかしたら聞こえる可能性もある

「あれ?見失つた? !あー一人共小さくて面倒だ」

「これで一先ず此方がまだ分からぬ状態だと勘違しさせれるか

あ、良い魔法思い出した

ドッキリにも使えるな、うん良し

取り合えず止まつて草陰に一匹を連れて隠れる

「良いか？シロ、あれを使え。大よそ一分未満と言つたところだらうがこの距離に時間なら問題ない」

ふふ、覚えが早いから暇潰しに教えた魔法を使う時が来たぜ

「ガルウウー」

シロの足元に名前通り白い魔力光を放つ魔法陣が発生する

ああー行け！

シロはゆっくり足音をワザと立てて隠れた木に近づく

たぶん出でくる、三、二、一

「雨水さんーって誰？ー」

「わんっ！」

キャラ達の前に現れたのは綺麗な白髪をしたアンバー色の瞳の美少女、服装は白いワンピースと至つて健全な物

さて驚いた所でそろそろ出るか

「アハハ！驚いたかキャラ！俺を驚かそつなんて百年早いわ！」

「雨水さん？！」

「秋兄さんとフリーデと・・・あれ？シロは？」

「田の前にいるよっ！」

前回はまだ幼女って感じだったんだがやつぱり人間より成長が早いなー。いまは一歳前後だったから人間年齢だと十代後半って事になるのか、それにしても耳と尻尾も隠せてないし魔力消費が明らかに異常値、流石にまだ段階的には四割完成って感じか

「はい、ドッキリ成功～！」

「キュクルー！」

「シロもばんざーい！」

「ばんざー・・・ガルウ？」

「「シロ?...」」

あ、魔法が解けた

ちなみに先程のは変身魔法モード人化。この魔法自体は確立された技術の為、別段難しいとは思つてなかつたので才能あるシロに覚えさせてみた

モード人化と言つだけに他のも教えてある

更には直射型射撃魔法のショットや捕獲系魔法のバインド。将来的には番犬になつて欲しい

つと言うか噛み付き攻撃からい加減に比較的に傷跡が残らない魔力ダメージですむ魔法に変えて欲しい

「驚いたかキヤロ！」

「凄いよシロ!」

「シロって女の子だつたんだね」

・・・あれ?一人がシロ側に

「キャロ～ヒリオ～」

「さっきのもひ一回見せて～」

「ガルルウ」

「キャロ流石にシロも魔力切れだと思つよ?」

俺とフリードは一線引いた所から一人を見る

「キュクキュク！」

「え？あーお前に変身魔法は無理かなー。魔力量や適正を考えて、それにお前はキャロの主力だから覚えるならもっと別の魔法だな」

「キュー」

さて、そろそろ忘れられた組として存在感を出しておかないとな

「ヒリオにキャローいい加減こつちに氣づけ～フリードが寂しがつてるだろ?～！」

「キュウ?～」

「ほりー。フリードだつて一人から無視されて凹んでんぞ!」

・・・たぶん

まあ喜んでるって事は無いだろ? だから問題ないか

にしても驚かせるつもりだったが何か違つ驚きになってしまった

三十六話～side 雨水～（後書き）

はい！色々言いたい事は様々あるでしょうが人化です！ユーノ君しかしアルフしかりザフィーラしかりリーゼ双子しかり！リリカルな動物はとにかく人になります、と言う事でシロモー！ってな訳です

シロの新魔法でのドッキリ成功 したのは良いがシロに注目が行き過ぎて俺とフリードの存在が忘れられる フリードを使い存在を主張

「あ、居たんですか」

「居たよーって言つたが、お前らの当初の目的を聞いて出してみー。」

確か俺達を驚かす事だつたら?!

全く一人は・・・そりや行き成り美少女が知つてゐる魔狼に変わればそつちに意識を向けるのは分かるけどさ

「シロの変身魔法はやっぱり秋兄さんが?」

「よく聞いてくれたー!そうー!シロの物覚えが良過ぎて一通り芸も仕込み、いつそ魔法でも覚えさせて俺が楽しよつと考えて教えた魔法!」

「動機が不純ですね」

純粹だつが不純だつと知つた事では無いー!樂したいと思つのは誰だつて同じだ!

とは言つても現段階ではまだまだ

「本当にいつの間に」

「僕は基本俺一人だつたからな、キャロが知らないのも当然。つて
か手伝えよ」

キャロが寝てる間も練習してる時あつたからなー

段々シロもそれを面白がつて仕事から帰るなりすぐに教えると寄つ
てくる時もあつた

「・・・僕の魔法もまだ完成してないのに」

「わたしの方は新しい魔法は教えてくれさえしないんだよ?」

あれ?何故か一人してシロに嫉妬し始めてるよ

エリオの魔法は難易度がそもそも変身魔法とは違う、キャロは新し
い魔法を覚えるより今ある召喚の安定化や召喚詠唱の略化または破
棄を目指した方が素質的に合つている

まあ一人して理由はあるんだけど・・・

そもそも動物から人になるメリットはあっても人から動物になるメ
リットは少ない

「問題はそこじゃないだろ。いまは如何に俺の教えが良いかってだ
な」

「そんな話はしてません」

まあ特典スキルだからデカイ顔は出来ないけどまあ

と黙つたままに自身の魔法レベルが中々上がりないしバインドがあともうじょっとなんだけど・・・

「そうか、じゃ確かに前らが何について話をしていたか聞きだそ
とだな」

「聞きたずつてそれわたし達に黙つて良いんですねか?」

「問題ない。さて教えてもらおうか?」

「「それは・・・」

ん~悪い事を隠しているって感じの表情はしていないから何かそれなりに重要で個人的内容の可能性が高いな

個人的な内容でなければ選択によつては周囲も被害を受けるんだから隠す時には悪いと思うか言つた方が良いか悩むつて感じの表情になる

「まあ、別に無理やり聞こいつとは思ってないけどねー」

無理やりじゃなくて自發的な誘導尋問くらいには有利かなとか思ったけど

「僕は・・・その、すみません。まだ言えません」

「わたしも内緒です」

エリオに対してもキャラ口は軽いな。同じ内容じゃない?

それともエリオが相談を持ち掛けただけでキャラ口自体に悩みや隠しがちは無いと考えるべきか

「んー一人して秘密か~、怪しいねえ。これは将来キャラ口がエリオを連れて嫁さんですって日も近いか?」

「有り得ません」

いや、即答はエリオに余りにも失礼だぞ?

まあ、一人とも恋とかそんな年でもないだろ?けどな・・・俺の初恋って何時頃だつたっけ?

三十七話～side 滉水～（後書き）

毎日アクセス数にビックリですー皆さん、非才な文ですが読んで頂き有難う御座います！

三十八話 side ハリオ

「！」の間のお話、新設の機動課入り。お受け致します

「ホンマか？！」

この目の前で独特な話し方をするのは偉い人達の中では比較的若く優秀な局員、八神はやて二等陸佐殿。この人が僕やキヤロを古代遺物管理部機動六課に誘つた人

「それにしてもフロイトちゃんと一緒に来ると思つてたんやけど意外やつたなあ」

気軽にとても話しやすいけど少しは緊張する、ちなみにフロイトさんは幼馴染らしい

「フロイトさんは多忙ですから。これは僕の事ですし折角の自分の時間を削つて欲しくありません」

「その言い方はあまり好みへんな

「・・・」

「まーええわ！それよりキヤロちゃんの方も受けってくれそつなんやつて？」

無理やつにな空氣の考え方だけど取つ合はずそつちの方が都合が良い

「はい、また後日キャロの方から連絡があると思います」

「ん? そういうや一人は仲良しなん? 呼び捨てやナビ?」

「はいー。フエイトさんと雨水さんのおかげでー。」

フエイトさんが出会わせてくれて雨水さんが・・・ん? 雨水さんは
えーっと面白く緊張を解してくれた?

「雨水? ん? あーーー! フエイトちゃんがこないだ言つといたー! リ
オのパパ兄ちゃん!」

「ブフフフーーー! ハ神! 佐! 」

フエイトさんは一体どんな紹介を?!

確かにフエイトさんはお兄さんみたいな方と言つましたし家族み
たいですよねとも言つましたけど!

「ち、ちがつ、僕と秋兄さんはー。」

「兄つひりつのはホンマかいな

「んぐ

カマ掛けられた、何処までが本当で何処までが嘘なのか分からない人だ

「あははーー」めん、フェイトちゃんからは最近雨水って私らと同じ年くらいの友達がエリオに出来たって聞いただけや

「・・・そう、ですか

「それで? 雨水って人はどんな感じなん? 優秀な魔導師とか?」

「あーーいえ、優秀な魔導師とは真逆です。雨水さんは魔法が殆ど使えません」

「使えへん?」

確かに今のところで使える魔法はC・相当のショーターにかなり薄いシールドタイプのバリア、あとは最近形だけバインドが見えてきたつて言つてたつけ

・・・ビツやつてこれで密猟者捕まえているんだろう?

特別格闘技法は取得していないらしいけど

前に自分の魔法は言葉だつて言つてたし説得とか交渉かな？

「はい、才能がないらしく」

「ん~」

八神一佐が難しい顔をする

局魔導師は基本的なライン以上は才能頼りな面が大きい、常に人材不足なのもこれが原因の一因でもあるくらい

「そか~、まだ少し保有戦力に空きがあるからその穴埋めを探してたんやけど」

僕みたいな子供の会話からも組織的利益を引き出そつなんて流石抜け目ないです

「ん？あ、ごめんなあ。どうもまだ局の方では新入りの若造扱いやから頼れる筋が少なくてな~」

「あ、いえ」

「やから期待しとるで！時空管理局執務官補佐エリオ・モンティアル一等陸士！」

「はーーー！」

あれ？ いま思えばさつきのつて秋兄さんと一緒に仕事出来るチャンスだったのでは？

キヤロ、じめん！

三十八話～ side エリオ～（後書き）

ハ神はやて登場です！そしてエリオの役職に原作とは違い執務官補佐が追加！六課の話も出始め原作入りの日も近い・・・はず！

三十九話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオを見送ったあとキヤロに新しい魔法をせがまれる 一応必要がない事を説明するが備え有れば憂いなしとの事 何でキヤロが諺なんか知っているだろ？ 仕方ないので無機物操作を教えた

無機物操作にした理由は最近AMFが流行ってるそうなので対抗策になるかなあとそんな感じである

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミックチェーン！」

「く、くそっ！ 教えなければ良かつた！」

早速後悔する俺に何が起こっているかと言つと知らずにキヤロのプリンを食べたのに気付かず接近を許してしまい逃げようとした頃にはアルケミックチェーンで捕縛されてしまったと言つ訳だ

「雨水さんーなんでプリン食べたんですか！」

「い、いや・・・ほりやー、糖分が必要な時つてあるじゃん？」

主にいま怒っているキャラにとか滅茶苦茶必要だよね

「あつたとして！なんでわたしの食べたんですか！ほり…。名前もかいてあるじゃないですかっ！」

アルケミックチョーンは正真正銘ただの鎖なので（しかも結構太い）平均的大人の俺でも単純な力では解けない

鎖で縛ると言つた单纯さだけにバインドほど弱点もない

「こや、ほり俺シード出身じやなこからシード語読めないし

「嘘つかないでトとい！なひ今まで本局に出す報告書は何語でかいたんですか！」

「ベルカ語」

「//シード語めり難易度上がつてゐじやなこですか！」

「嘘じやな」

「じうせ一部書類ですよね！」

クッやはつ氣付くか。と言つか一緒に仕事していた時期もあつたら俺がどうにかシード語を使えるつて知つていて当然か

「やつだ！だがそもそもお前の字は達筆すぎる…。」

「なつ…」の後に及んでわたしのせいでする『反』ですか…。」

「ああ！字も可愛く小さいし読んで欲しいのか欲しいのか欲しくないのかサッパリ分からん…。」

と書つかこのツルツルした表面によくこんな綺麗な字で書けたな
基準の俺がガサツなだけか？

「読まなくとも書いてあるなら少なくとも自分のじゃなってわからぬでしょ[づ]…。」

「…いや…分からん…もしかしたら食べて下さって書いてある可能性も否[否定]できん…。」

「どんな可能性を想定してるんですか…。」

「そんなだ…。」

明らかに俺が悪いが両者一歩も引かずに睨み合い、その距離を縮める

「…や…わかりました」

「よし！分かつたか…。」

「はい、雨水さんには口頭より行動だと思いました」

些細な違いで不穏な空気が一気に増しますね

「雨水さん。このアルケミックチーンが自動から手動に変えられるのはいつぞんじですよね？」

「まあ俺の考えた内容だしね。時には機械的な判断より人間の判断が勝ると思って」

「ならいま雨水さんの命はわたしの手の中とわかつています？」

キヤロが手の平を横にしてゆっくり閉じていく・・・そしてそれに連動して鎖がツ

「あだだだだツ！」

「さあー謝るならこまの内ですよーキヤロ様」めんなさい今度特大パフューメー

「図々しこぞーおまつ、くるじつ」

選択肢は三つか！

一 は素直に謝るか

一 はシロとフリードが子供達との触れ合いで終えて帰つてくれるのを
祈るか

三 は新たに何か作戦を考えるか

「決めた！」

「なにをですか？」

「キャロー。」

キャロは俺が観念したと思ったのか少し鎖の縛りを弱める

「実はキャロが部屋に隠しているアレを見つけてしまったんだが取り返したくば今すぐ俺の部屋に向かうが良い。」

ふつ、勝敗は決した。キャロも女の子だ、何か見られたくない隠し事の一つや二つはあっても可笑しくない

「なつなつーう、つう雨水を。まさか・・・あつあつ、こやわあ
ああああー。」

予想以上の反応で顔を真っ赤にしてキャロは全力疾走で男性居住区域の方へ走つて行つた

「さて、手動に変えたつて事はキャロが居なくなればこんなの簡単に取れるつと・・・ハハッ」

さてさて、それにしてもキャロは一体なにを隠しているんだろうな?

三十九話～ side 雨水～（後書き）

アルケミックチェーン取得。自動と手動に変更可能な少し便利な魔法になりました

雨水さんに見られた！」んな事ならもつと見えない場所に隠しておけば良かつたよお

そもそも何で雨水さんは私の部屋に・・・確かに鍵は基本掛つてないんですけど！

「ちょっと入ります！」

よし！誰も居ません！

補助魔法を掛けながら来たせいで魔力残量も少ない、雨水さんが追つて来た時の対策用にも残しておかないと云うに

「くつ、せめて何処に置いたか聞いてから・・・」

「無い・・・あれ?無いんですか」

正に重力を逆さまにしたみたいに荒らしましたけどそれらしき物は出てこなかった

もしかして・・・別の場所に隠されているへ・つと、雨水さんならやりかねない

雨水さんといえば幾らなんでも追つてくれるのが遅い。まさか放置ですか?

「探し物は」れか? キヤロ・・・って見事に荒らしあがつて

ツーーーー思つたとおり別の場所にあつたんですね!?

「しかし一体あんなに荒てる物とは何だ? ひどい氣になつてキヤロの部屋まで懲々取りに行つたが」

「は?」

懲々取りに行つた?

それはつまり最初から雨水さんは何も見てないし取つてなかつたつ

て事ですか？

「まあ昔の写真とか結構恥ずかしいもんな。アルバムか？これ」

雨水さんが持つているの少し弄れば誰にでも解ける簡易的な電子口ツクの掛かった小さなアルバム

「しかも隠し場所がベットの下の缶ケースの中とかお前は工口本隠す少年かベタ過ぎ」

「工、工口ってベタじゃないです！と言いつかせつるのは全部嘘だつたんですか！」

「うん・・・だがそれもたつた今から本当にった。まぁキャロ、人質ならぬ物質だ」

なんて極悪人

まさかプリン一つで此処まで発展するとは・・・騒いだのは私ですけど

「竜魂召喚」

「お前！これが見えないのか！」

「くく、アハハ、あーっはははー抜かりましたね、雨水さん！」

確かにそのアルバムも見られて困る物だし恥ずかしいですけど最初にそれに手をやつてくれたのは幸いです

大体私が本当に見られて困るのはその奥に隠してある手紙の数々（正確にはラブレターと言つ物ですけど何度も書いては封印の繰り返しで・・・下手に捨てて見つかるの嫌でしたし）

「それがわたしの秘密だと思つたら大間違いですよー・錬鉄召喚！フリード、ブラストフレア待機！」

「グルルウ」

残り魔力でも魔力ダメージへの変換と錬鉄での捕縛くらいは出来る。逆に言えばこれで魔力残量は殆ど無くなる訳ですけど・・・

さて、雨水さんもこれでお終いです！

「・・・ふむ・・・」めん、キャロ

「へ？」

「いや、だから謝つてるんだよ。勝手に食べて悪かつたな、今度から氣を付ける」

「え？ あ？ はえ？ 謝りひやうですか？」

予想の斜め上過れる。諦めの悪い雨水さんだからまだ策を弄すのか
と思ったのにアッサリと

「あん？ 謝つて欲しこんだら？ プロンは今度にさも黙つてへる
「あ」

「は、はあー」

「じゃ取り合えず鎖とフリードを

「は」

鎖を消してフリードを子竜に戻す

「い」めんねフリード、急に呼んじやつて

「キョクルウー」

「鎖も外れた事だし」

「まつたく、雨水さんは・・・今度から『氣』をつけて・・・ってあれ
？ じょ、うすい、れん？」

「形勢逆転つてね」

薄い茜色の光の輪が私を捕らえていた

バインド。しかも魔力光からして雨水さんの・・・

「どうづつもつですか？」

「いや～プリン食べたのは悪かったなーと思つし勝手にキヤロの部屋に入つてアルバム取つてきたのも悪いなーとは思つたんだけど・・・ほら？俺つて負けず嫌いじやん？」

な、なんて人だ――――――！

子供相手に騙しまで入れて全力で相手に来た！確かに雨水さんらしいですけど！最初から素直に謝るなんて変だなーって思いましたけど――！

「で、ですが雨水さんのバインド程度なら十数秒で」

「そんなの俺が一番知ってるに決まってるだろお～？」

意地悪な笑みを浮かべた雨水さんは私がバインドの解除をする間に普通の布で拘束した

「キヤロの残りの魔力も少ない、俺の勝ちだな

「・・・えええー」

そもそも私のプリンを食べた雨水さんが悪いのにいい

四十話～side キヤロ～（後書き）

キヤロの隠し物はラブレターにしました、書いたは良いけど下手に捨てるに何かの弾みで見られる可能性も有り何処かに保存しておこうか。

乙女チックなキヤロの秘密には最適かな？と思います！

四十一話 side 雨水

前回のあらすじ

キヤロのプリンを勝手に食べる 見つかる すぐに捕まるが騙す そして脅すが逆に捕まる 更に騙して逆に捕まえる 最後に勝利を手にする

あれ？俺ってかなり悪人っぽくない？

「あーもー拗ねるなってキヤロ」

「む～大体ですね！雨水さんはもっと大人っぽくするべきなんですよー」

何と無くキヤロに負けるのが嫌だつただけだったのでプリンは後日キチンと買つて返したのだがキヤロの機嫌は予想通り治らなかつた

「そりは言つても俺だつてまだまだ二十の若者だぜ？」

「確かに雨水さんの生まれの風習では二十から成人。大人に分類されるんじやありませんでした？」

「なんで知つている

まあ二十歳から日に見えて大人になる訳ではないが区切りの一つとして成人になる

「フロイトさんが知つてました」

「え？ あの人はミッド生まれじゃないの？」

「そのはずですけど」

もしかしてなのはさんが教えたのか？

二人は仲良しらしから互いの文化を教えあっていても可笑しくはない

「とにかく雨水さんも大人なんですから。 いつまでも子供と張り合わないでください」

「大人になつても子供の心を忘れないって大切だと思うよ？」

「大ですね。だからなんですか？ 誰も子供心を無くせなんて言ってません」

「はあ～ キヤロちゃんは本当に大人だね～」

「何を企んでいるんですか？」

最初から疑いに掛かつてゐるとは……確かに企んでたけどさー

「最初から疑うとは失礼な」

「雨水さんが疑わしい事をするからです」

「もしかしたら井戸口は俺より俺を知ってるのかね？」

「…ツイテ…」

？、妙な反応が返ってきた

今回のは特に何気なく語った言葉だったが何かキヤロ?となったら
しゃれて出した

「なにを・・・まさか妙な隠し事を」

「ち、ちがいます！とにかく！わたしが言いたい事は分かりましたね！」

• • • °

二二一
ハシマリ

何か隠し事している、しかも疚しい事だ

反応した言葉は俺より知っていると云つて、つまりは俺の何かの情報
報を知つているとかそんな所か？

探りを入れないとあとで面倒になるかもな

「わかりましたね！！」

「はいはい

「はい、は一回！」

「あんたは俺の母親か」

「意味の分からないと！わたしがなりたいのは・・・ッ！」

なりたいのは？

うん、キヤロの将来の夢にはとても興味ある。やっぱつフロイトさ
んと同じ執務官とかが妥当なんだろうか

キヤロくらーの年なら何かに憧れる気持ちもあるだろ？

「なりたいのは？」

「あー、その、な、なんでもないです」

「いや、何か言い掛けただろ？」

んー言いたくない系統の仕事なのかな?だとするとそもそも管理局の仕事じゃないとか?それだとすると色々大変だらうしな

安定しない職なら不安にもなるし言いたくもないか

「いいかけてません」

「んーーー。ま、いつか。だけど決まつたらフュイトさんと一緒に伝えておけよ。あの人過度の心配性だから・・・良い人だけどさ」

「ほつ・・・わかりました」

ん?なんだか妙な空気になつてしまつた

四十一話～side 雨水～（後書き）

一応雨水も転生してから年月を重ね成人してました・・・原作に入る前から題名崩壊？

四十一話 side キヤロ～

雨水さんと私の自然保護隊への異動期間は約一年、そしてそろそろ一年になろうとしていた

今のところは次の私の職場は機動六課で決定している。しかし実のところハ神一佐には少し返事を待つてもらっていた

そして今日は返事を伝える為に私は本局に出向いている

「あれ？ キヤロちゃんも一人なんやな？」

この独特な話方はハ神一佐の出身世界の訛りなのかな？

「え？ あ、はい。わたしも一応局員ですから」

「エリオ君にしても最近のちびっ子は偉いな～・・・で？ さつそくで悪いんやけど返事聞いてもええか？」

「はい！ わたし！ 時空管理局自然保護隊所属キヤロ・ル・ルシエ二等陸士はハ神はやて一等陸佐のお誘いを受けさせて頂きます！」

「ん、元気がええなあ。よっしゃ！ ありがとな！」

決めたは良いけどやつぱり機動隊の仕事には少し不安は残る

フォアードとして訓練を積みながらの仕事なのでハードなのは間違いない

「これで取り合えず候補は揃つたな」

「あの、わたし以外のフォアードの方を教えていただけませんか?」

「なんでもや? その時の楽しみもあるやうに」

「エリオ君が一緒のはしつてますけど、その、年の離れた方とか
だったら心構えもしておきたいです」

行き成りだと『ハリケーション』が

働く上で仲良くなる事はお互いにとつて大切だと思いますしある程度の情報は教えてもらっていた方が良い

「なるほどなー・・・んーでも安心してええよ。まだ詳しへは言え
へんけど年はまだ離れどちらんし両方女の子や」

それならすぐ話も出来ると思つ

「なあなあそれよりちょこ聞きたい事があるんやけど」

「なんですか？」

なんだか八神一佐の話し方は独特だけど親しみがある

ついつい長話しなりそつ

「雨水秋春について聞いてもええか？」

「雨水さんですか？」

特別雨水さんは八神一佐みたいな偉い人の目に付くような人じゃないと思つんですけど

「まあフェイトちゃんとも私は知り合いやし話に出とつたら気になつて当然やろ？」

「そう、ですね？」

「やうやく

とは言つても雨水さんの事と言えば割と本氣で子供と喧嘩できる大人としか……

「少し調べさせてもらつたんやけビロストロギアの鑑定士をしこる

「そうやない？」

「はい、一応。自然保護の前はそちらが本職だったのでは？」

「色々な部署部隊で講師もしとるな？」

「まあそこそこ有名でしたね。・・・あ、でも本人は自分のスキルアップに忙しいですから余り教えるのはしてませんよ？」

あれほど人に教えるのに特化した人は中々いないと思う。でも何故か本人の魔法は未だに成長の兆しが微妙だけど

「これはちょっとした噂なんやけどな？」

「うわさですか？」

「偶に現れる凄腕カリスマ教師。彼から少しでも教えてもらえば必ず結果に繋がり、もしも直に教えてもらえば確実に大魔導師に至る。らしいで？」

「えーっと、知りません」

また凄い人が世の中には居るんですね。学べば必ず結果だなんて都合が良いにも程があると思うんですけど・・・だつて結果を出すには幾ら教えが良くても努力が必要だから

「でな？その男性は一年前に「フッシ」と講師をせよへとよつになつたらしいんよ～」

「やうなんですか？残念です」

「私もそつ思うわ、でな？ある生徒から聞いたんやけど、どうもその先生の特徴が私が思うにエリオ君やキャロちゃんが知る雨水さんつて方と似とるんよ」

「・・・まさかあ～。有り得ませんよ、雨水さんは確かに幾つかの部署部隊で講師をしてましたけど仕事の合間ですよ？」

「そか～流石に早々知り合えへんか～」

まつたくです。あんな子供っぽい方に教えられて大魔導師だなんて・・・ん？でも必ず結果と言うのは強ち間違いでもないような・・・いやいや、まさか・・・です

四十一話～side キヤロ～（後書き）

管理局内で雨水の噂が少しだけ広がっています。まあ前に雨水が魔法を教えた生徒たちがある程度時間が経ち成功した結果ですね

前回のあらすじ

キャロが何か用があるとかで本局に向かった からといって仕事に変更はない 何時も通り警邏 終わったのでフリード達と遊ぶ事にした

「はっくしょん」

鼻がむずむずする、誰か噂でもしてゐのか？

「キュクル！」

「ガウガウ！」

「はいはい、さて今田はなにするか」

フリードの範囲制圧魔法のブلاストフレアは便利だけど如何せん威力の調整に欠けるから咆哮を魔法的変換で無傷で制圧できる魔法を作れないか

「フリード。キャロから掛けでもうつてるブーストは炎以外にも使える？」

「キューク」

「そうか」

分からん。俺はキャラロじゃないから鳴き声だけじゃ何を言つているのかサッパリ

まあこの際、炎以外にも使えると過程して考えよつ

「よし、取り合えずフリーードはキャラと一緒にないと訓練のしうが無いので子竜状態で同時に十単位の火球を作れるようになつてもう。コントロール出来れば尚良いがまずは作る所からな。威力は気にせずに」

「キューク！」

この際中身が空っぽの火球だらつと田畠ましには十分すぎる

「さて次はシロだな」

「ガウ！」

シロはとにかく単体で魔法を使える一般局員ぐらうには勝てるようになつて欲しい

その気になれば噛み付くで勝てる気もしなくはないがあくまで俺が目指すのは魔法戦つと

「ならシロ、人化を使ってくれるか?」

頭の中で観察眼のスイッチを入れる

目の前では白い魔法陣に潜り活発そうな少女になるシロ

「つとと・・・わん!成功!」

「ん~変身の瞬間に慣れない人型のせいでバランスを崩したか」

それと前々からの疑問なんだけど何故シロの奴は人の時は犬の鳴真似をするんだろうか?やつぱり鳴かないと落ちつかないのかな?

変身魔法 持続五分一十七秒

・・・五分保てるようになつたのは大きな成長か

「ヤツパリ四本足で走つた方が速いと思うのぉ

「人型で?変わった思考の持ち主だな、人の体はそんな走り方には適してないからな?」

「はうつ確かに」

問題は見た目と中身が比例してないって所か

意識的肉体の成長が早くまだ変身魔法を使いこなせてないのでそのままの年齢で人化するしかなく精神年齢に伴わない見た目で変身してしまっている

「試すな！よし、まずはその状態での射撃魔法と捕縛魔法。あとは前に教えた魔力での足場の構築かな」

「分かった！ガンバル！」

「頑張れ」

あとは俺も自分の訓練をするか

訓練も一通り終わり、一度長めの休憩を入れて最後に現段階の力を図る事にした

「よしーシロー！存分に手加減しろよー。」

「？、なにか違う」

俺VSシロ（人化）

審判フリード

制限時間は五分。まあ単純にシロの人化持続時間が五分だからと言う理由なのだけど

「まずは」

観察眼のスイッチを入れる

シロ 魔力ランクB 変身魔法使用中 敵意無し やる気有り

シロの戦闘スタイルの強みは人間では考えない思考パターン

「うん、準備はオッケー。フリード」

「わん！ガンバルよお～！」

「キュクル・・・キュククーーー！」

フリードが空に向けて火を放ったのを合図に試合を開始した

四十二話～side 雨水～（後書き）

次回はバトル。苦手分野ですが雨水もシロそれぞれの特性を魅せる戦いになればと思っています

四十四話～side 雨水～

前回のあらすじ

フリード達と一緒に訓練 確認がてらにシロと試合開始の合図としてフリードに火を吐いてもらつた

開始したと同時に笑つていたシロの顔付きが変わる

捕食者の田だ

「狩られる兎にはなりませんよつてー。」

まずは即座に作れるだけ魔力弾を作り射出する

総数七発

ダメージになるとは思つてはないうが田晦ましになれば十分

「危険、じゃない！」

ショット 一発 待機 確認

「何処から

姿勢を低く構えたシロが突然目の前に現れた

魔力弾は着弾しているはず、しかし元々ダメージを与える為ではなく目晦ましと足止めだった為シロの障害にはならなかつた

「なんッ！」

先程までシロが立つていた足元の蹴り出した所が変な風になつていた

それに先程まで待機されていたショットが消えている

まさか・・・

足元で進行方向と逆に射出して走り出しの初動を見せないようになつたのか

普通に走り出すだけなら微細な体の動きで観察眼が捕らえるがそれを搔い潜る為に魔法で補つた

観察眼の唯一の弱点は情報量が多過ぎる為に俺が最初にある程度、情報を絞つている事

今回は魔法を初速上げに使うなんて思つてなく情報を切つていたのが悪かつた

それにその方法は柔軟な体と衝撃を上手く緩和するバネが確りと出

来ていて初めて成功する方法

「全部野生の勘でツツ！」

「狩つた！」

更に俺の顎に向かつて足先が飛んできた

補助魔法は覚えさせていないので速さは普通、軌道も観察眼が捉えたので安心

だつたのだがショットを空中で固定、先程のスタートダッシュの応用で蹴りの速さが行き成り上がり威力ともに増した蹴りがかわす前の俺に当たつた

しかも意識を失う最後に確認出来たが咄嗟に顎を守つた俺を見てシロが僅かに蹴りの軌道を上げて米神を打ち抜いていた

「ガウ！」

「痛ツ！？」

「キュク～」

せつかく魔法を教えたのに噛み付きで起された

治癒魔法使えないのに・・・おっちゃんに頼まないとな

「はあ～にしておまかが負けるとは」

しかも魔法戦を予想していたのに魔法の使用回数は一回だけ

あとは純粋に急所を狙われ終了

「キュクキュク！」

「ん? なに? 僕いま落ち込み中だから復活まで一十四時間は欲しいかも」

「ハツチ！」

痛つてええええ！！

突然後ろから何か攻撃を受けた

振り向くと耳の生えた女の子が拳を握り大層ご立腹だつた

「えーっと……迷子？」

「迷子な訳あるか！あたしはアルフ！フュイトの使い魔！」

「あーーなるほどーフュイトさんから逸れたのか

「だから迷子じゃなーーい！」

余程迷子扱いが嫌なのか興奮して尻尾まで出てきた

・・・ふむ、迷子に迷子と言ひませぬ目か

「分かった、分かった、お嬢ちゃんが迷子じゃなくてフュイトさんが迷子なんだね」

観光区でも迷子の子供はたまに居るから扱いも慣れたはずだ！

「・・・フュードヒシロ。コイツは何時もこんなのかい？」

あれ？俺が気絶している間に仲良くなつてゐ

せいや二三十分くらいしか寝てなかつたと・・・十分か

「ま、話はキャンプで聞くよ。フロイトさんと一緒に来た?」

「今日は一人だ、アンタに用があつてね」

「俺?」

「ち、だから迷子じゃない」

いや、だからってこんな普通一般の人が来ない所に来ている時点で迷っているのでは……

四十四話～side 雨水～（後書き）

シロは由緒正しき魔狼の長の子なので天然で強いです。更に雨水の教えも加わって現状の雨水の力を普通に凌駕します

な、訳で即効終わつたバトルでしたが如何でしたでしょうか

前回のあらすじ

シロ VS 僕 結果シロの瞬殺KO勝ち もう少し善戦出来ると思つていたのでショックで落ち込む フリードが何かを伝えようとしたらがそれも遅く待ち草臥れた女の子の鉄拳をくらつた

使い魔を見るのは初めてではないが流石フェイトさん、かなり完成された高い技術で契約や魔力配給が行なわれている

「始めまして雨水秋春です」

「アルフです」

二人して丁寧なお辞儀を繰り返す

「つと社交辞令は此処までにしておいて用とは?」

「社交辞令つて本人の目の前で言つ辺りは失礼なのに言葉使いは確りしてるんだね」

「社会人ですから」

「ふ〜〜ん、キャロの言つた事はそう言つ事かい」

キャラが何を言つたからは知らないがやけに観察されている

「いつもフロイトさんの指示で来たつて感じじゃないよなー

「ま、敬語とか斤札しこのは無しで」

「やつへなじお言葉にせんせんが…で…おつかい?」

「ち・が・う! あたしは単にリオやキャラ、そしてフロイトの言う雨水つてのが気になつただけだ。あたしはフロイトの使い魔だからね、悪い虫は潰しておかないと」

「うわーなんだかこの女子、比喩とかじやなくてマジで物理的に潰しへきそそうだなー

直情タイプか。控え気味なフロイトさんは相性はピッタリなのか?

「恐いな、まあ話から察するに今日は俺の見定めつてところ? でも少し遅くないか?」

「それでもないさ、あと少しでフロイトことつて大切な区切りを付けるかもだからね」

区切りね・・・表情から察するに過去に何か有つてそしてそれに絡む犯罪者が存在し、もう少しで逮捕できるかもってところかな

感情が表に出易いから簡単に推測できる

とにかく荒事か

それはそれはキャロが心配しそうな話で・・・

「それと俺を見定めると如何関係があるのか不思議だけど、アルフさんから見て俺はどう?」

「まだ分からない。キャロやエリオから聞いた通りちょっと変わつてるが無害そうだしフェイトが言うみたいに優しさも持つている・・・っぽい」

「あんな優しさを圧縮して体言したみたいな人に優しい人扱いされるとはとてもビックリだ」

正直どんな環境に居ればあんな風に育つのか一度聞いてみたい

「・・・アンタ、フェイトの事をどう思ってるんだい?」

「はい?」

「だからーアンタにどうしてフェイトって聞いてるんだ!」

俺にどうしてフェイトさんは?

「んーキヤロの母親もしくは姉だから俺ことっては・・・」

「俺ことってはねー

「隣の家の知り合いの子のお姉さん」

「・・・はあ？」

「だから隣のいえの」

「繰り返さなくともいい」

何故か残念そうな目で見られる

身に覚えのある視線だ

例えるとキヤロと聞こ合いになつた時に女性局員から向けられた視線に似ているかも

「はあーーーあーーうかい。はいはい、理解したよ

「うん、理解してくれたか」

「ああ、基本残念なんだな」

「ちよーなにその評価?！」

「いや、まあ フェイトの魅力で靡かないんだからある意味凄え奴な
のかもなー」

凄く如何でもよきやうに褒められも全く嬉しくないー

四十五話～side 滉水～（後書き）

アルフは原作通りエリキヤロの良き理解者です

四十六話 side アルフ

雨水秋春 一二等陸士と低い階級に居ながらも鑑定士と言つたマイナーな職に就いている変わり者

あたしはフェイトの使い魔として確り見定めてやうつと意気込んで会いに行つた

結果、残念な奴だった

エリオやキャロの言う通りフェイトに似ている一面も確かにあつた、二人が好きになるのも無理は無い

「あれ? なんで? まだ居たの?」

「噛むぞ」

キャロは数日前から本局に出向いているそののであたしとは入れ違いになつていた

会えないのは少し残念だな

「はあーなんで俺の周りにはすぐ手を出す人しか集まらないのか

「自業自得だ」

「身に覚えは全くないんだがなー」

仕事振りは至つて普通、休む時は確り休むをキチンと守つてゐる所を見るに体調管理も大丈夫そう

はあーフェイトときたら・・・仕事が好きなのは分かるけど偶には休んで欲しいもんだ

「んー」

雨水があたしの顔をジッと見ていた

「なんだい？」

「いや、素体が狼とシロと被るから変身魔法の参考になると思つて・・・サイズの縮小で魔力消費の軽減か」

「詳しいね」

「まあな」

ん？あたし、狼素体だつて言つたかい？・・・あ、最初に耳と尻尾を見せたからそれでか

でもこれがフルサイズじゃないってのは何で分かつた？

「シロ、 そりかアンタが教えたんだつたね」

「羈絆りだつたからなー」

「・・・そつジロジロ見られると恥ずかしいんだけど」

「え? なんで?」

殴りたい。何故かこの男を無性に殴りたくなる衝動に狩られる

だいたい子供の状態とは言え女性だ、雨水もフルサイズではないと分かつた時点で見た目通りの年齢じゃないって分かつてゐるはず、それをジロジロともっと氣を使えと言いたい

「これはアルフさんの技能? それともフェイトさんが一度変換して
るの?」

「そう言えば・・・呼び捨てで良い、何だかムズ痒くなる。これは
あたしの技能だ、名づけて子犬フォーム人間版」

「子供フォームで良くな?」

「良くない」

それだとまるで若作りしているみたいじゃないか

」の姿はフェイトの魔力消費を少しでも抑える為のモノだ

「そろそろ時間だから俺は仕事に戻るが送つてこいつか？」

「大丈夫だ、一人でも行ける」

「そりや一人でも行けるだろ？が子供を案内するのも仕事の内だからな」

そつ言つのならお葉に甘えない訳にも・・・む？なにか変な予感が

「あ一やつぱり遠慮しどく、アンタの仕事の邪魔をしに来た訳じゃないし」

「そか、案内に託けてサボる？と思つたんだが、それじゃフェイトさんによろしく」

「そんな魂胆が」

全く本当か冗談か分からぬ

「あ、アルフだ！」

帰り際に転送ポートまで来ると一度荷物を抱えたキャロと会えた

「おーキャロー元気だつたか～？」

「うん、元気！」

「本局でフュイトには会えた？」

「会えたよ、フュイトさんの家に泊まらせてもうひとつから

「あーなるほど～」

確かにフュイトならホテルに泊まらせるよりは自分の家に招くだらつ

ただその時のフュイトの様子が少し心配だな

「フュイトはちゃんと慌てず家族出来てたか？」

「？、フュイトさんは至つて普通でしたよ？」

「ならオッケーだな」

表面に出なかつたなら合格かな

フェイトは心配性に気遣い過ぎにだからガチガチに緊張してないか
心配だつたんだよな〜

「アルフは帰り?」

「おう! また来るかもだから雨水にはようじく言っておいてくれ」

「はい」

フェイトの帰つてくる場所を守るのが今の私のやる事だからな、使
い魔として精一杯頑張るさ

四十六話 side アルフ（後書き）

アルフを元にシロの人化の精度が上がっていく予定です

前回のあらすじ

フロイトさんの使い魔がやつてきた 残念判定を押される 数日滞在 しかし汚名は拭えず まあ笑つて帰つて行つたから悪い評価ではないはず そして入れ違いにキヤロが帰つてくる その数日後

「くしゅん！···くしゅん···あうー」

「大丈夫か？キヤロ」

「あうあう」

「それは何語？」

唐突に元気が取り柄のキヤロが風邪を引きました

病気なのでは仕方ないので取り合えず今日は休みをもらつて寝かせている

「雨水さんはじ」とい···

「寝込んだ状態でも俺に仕事を強要する辺りは流石だな」

「ぐすつ、だつて···だつて、わたし、めいわくかけたく

何故泣く

どうやら初めてに近い・・・いや、初めてか?んー初めてだつたかも、まあ初めての病氣のせいで態勢が無く情緒不安定になつているらしい

「はいはい、悪い悪い。今日は俺も休みにしてるから付きっ切りで看病してやる」

「ほんとお?」

うぐつ、普段大人ぶつてるキャロが病氣により本来の子供っぽさを取り戻すと中々心にグサツと来るモノがあるな

「ホントだ、取り合えずお粥くらいは食べた方が言いつて言つし作つてくるッ・・・つておい、放せ」

「やだ」

局服をガツシリと捕まれ行けなくなる

力を入れれば解けない事もないだらうけど、あとが恐いので最終手段にしよう

「いや、それだとお前。食べるもんが」

「……お腹すいてないもん」

もん。って言われてもなー

口調まで怪しくなってないか?

「それは風邪だからやつ患つだけで栄養を付ける為には食べないと
治るもんも治らないぞ」

「だつて、だつて起きたときに雨水さんがいなこと……わたし、
どうしていいか」

勝手にして下をこ、何て言つた曉にはフロイトさん辺りが怒り狂つ
なー

それにそんなに長時間離れる気は無いんだけど、お粥だつて簡単に
出来るだらうし

・・・はー仕方ない

「分かった。風邪の時くらい我が姫聞いてやる

「ありがと。へしゃん

「寝る」

「うん」

おひしゃんに連絡して色々持つてきてもうおひ

つこでにフロイトさんに子供の看病の仕方でも聞くか、あの人だつたら慣れてそうだし頼りになる

よつやく寝た

「まつたぐ、動画でも撮つておへか」

こどもになった時の脅しこは十分使えるカードの一つになる

・・・はーそれにしても・・・なんで手を離さない

「手を握つてなんてベツタベタなお願いしたかと思えば

「キャロちゃん元気か~?」

「静かにじり、こま寝たところだ」

「わいこ」

おひげちゃんが土鍋と水と薬をトレーに乗つけて持つてきた

「ありがとな、だけど無駄だつたようだ」

「・・・・」おひ見るとまるで兄妹だな、お前わ

「一応十歳は離れてるから兄妹なら結構珍しい部類だよな

まあ普通に探せば居なくは無いへりいか

「しかしあ前、看病とか出来るのか? キヤロちゃんはお前が良いみたいだから俺が如何」おひは言えねえけど

「看病へりこ出来るわ」

俺だつて今まで一度も風邪等を引いてない訳では無いんだから多少は経験もあるし少しくらいなら知識もある

キヤロはまだ子供だから色々と大人とは勝手が違うんだが……

あ、やべ……かなりヤバい問題がある事に気付いた

四十七話～side 滉水～（後書き）

ベタかも知れませんが看病イベント発生です

四十八話　side　雨水

前回のあらすじ

キャロが風邪を引いた 看病をする キャロの傍から離れられない
のでおっちゃんに色々頼む おっちゃんに心配される そしてある
問題に気付く

問題

風呂に入れない方が良いのは何と無く分かる。確かにただでさえ体力
の低下している時に実は結構体力を使う入浴をするのは症状の悪化
だと

まあ問題はそこでは無い、その次のだとしたらと云つ話だ
だとしたら当然体を拭くと言つ行為をしなければいけない
しかし如何なんだろうか？

キャロは子供とは言え女性、で俺は男性・・・それは不味いだろう
なあー、色々と

「女性局員に任せよ」

無難な回避を方法だな

俺自体は特に気にしないような気もあるがキャロは流石に嫌だろ？

「やつぱぱじ当面は手を振り解く事に刃力を吹くぞ！」

しかし女性局員でいま手が空いている人いたかな？

一人くらいは居そただけど連絡手段が無い、かと言つて仕事用の連絡先を使うのは忍びない

「キュークー」

「ガウウ」

「ん？お前らは入つてくるなと言つておいたはずなんだが」

フリードは主の事だしシロも想いは変わらない。心配なのは当然か

「仕方ないな、静かにしろよ」

「キュー」

「ガウ」

ん？シロに人化させて看病をさせるなんて良い作戦ではないか？・・

・あ、駄目か、時間制限あるし

「フロイトさんから送られてくる資料の受信が止まらない」

あの人、どれだけ送っているのだろうか

本にしたら楽に十冊とかあっても不思議じゃないぞ？

「ん、あふう」

「起きたか？」

ジーっと上気した顔で此方を見詰め暫りくわると口を開く

「くしゃん、うすいさんか」

「他の誰に見えたのか知りたいね」

「いえ、用がかかると言いますか

キヤロがそのまま起き上がりとするので取り合えず寝かせる

額に手を当てるが熱が下がっている感じはない

「喉は渇いてないか?」

「・・・か?」

「疑問系ね」

『気にしないけど』

程よく温い『気がする』薄めのスポーツドリンクのストローを口元に運ぶ

「一気には飲むなよ

「んん、あむ」

「・・・よし、他は?お腹が空いてるなら食べ物はあるナ?」

ん、ストローが潰れてる・・・噉んだっぽいが本当にお腹空いてないんだら?」

「いらない・・・あの・・・」

「あん?」

手招きするキャロ

いやいや、一人つきり何だから普通に喋つても誰も聞いてないと思
うんだが

「あの、汗で……その」

「服がベタ付くと」

「……はい」

さて、如何したものか。対策らしい対策を考えてなかつた
ま、この際、仕事中の女性局員にでも来てもらうか

「待つてる、いま誰か女性の人呼ぶから……つておい」

「あの」

「放せ」

「めいわくになるんじや」

「大丈夫、今まで一緒に仕事をしてきた仲だし喜んで来るぞ」

「駄目……わたしのせい。それはダメです」

ん一如何も譲る気のなさそうな田をしてるなー

頑固な所は長所になる時もあるけど、言つた時は少し考え方だ

「だが如何する?生憎と手が空いてるのは俺だけだし」

「雨水さんでいいです」

「え~」

良いこと言われても良くないのは何うんだけど・・・

かと言つて此処で言い合つても仕方ないし、世間体的にも、ギリギリセーフかなあーとか思わなくもない

「分かつた」

「あうう

「取り合えず恥ずかしくはあるんだな」

まったく、子供が自分より大人優先に考えるべきじゃないと俺は思うんだけどな

四十八話～side 雨水～（後書き）

セーフ？アウト？・・・一話に収めきれなかつたので次回に逃げました

四十九話　side 雨水

前回のあらすじ

キヤロが風邪を引き看病をする そこそこ順調 だったのだが障害発生 これはセーフかアウトか・・・

まあセーフだと思ったがいざキヤロのパジャマに手に掛け緩やかに脱がすとなんだかアウトな気がしてきた

脱がすつて単語が悪いんだな、きっと

「やつぱ他の

「・・・。」

「駄目か、うん、駄目だよね」

頬を朱色に染め潤んだ瞳で見詰めてくる

・・・リアクションに困る

正直此処はサラッと流したいのに何だかそんな流れじゃないぞ?

「前は自分で拭けよ?」

「あ」

「だから何語なんだ」

キャロを座らせて後ろから蒸れたタオルでゅうくじ拭く

少し強くするだけでも妙な声を上げるのどとこもとこも作業し難い
子供だから気にするな・・・と訓われてもこぞ直面すると予想を超
えた何かがある

「それにしてもキャロが風邪なんて珍しいよな

とにかくこの場は適当な話題を振って気を紛らわそう

「『めんなさい』

「怒つてはな『よ。ただ珍しいって話』

「雨水さんにめいわくかけてしまつて

「まあ俺も仕事休めたからラッキーへりこにしか思つてないわ。あ
ちゅつとバンザイして」

「ふにゃ」

たぶんシャンプーか何かなんだろ?「ナビ甘い香りが鼻腔を擦る、これが所謂女子特有の甘い香りつてやつなんだろ?」

ああ、マジでこんなシーン誰かに見られたら……恐ろしいな

「くしゅん」

「あ、お湯が冷めてきたか。入れ替えてくる。毛布に包まつていろよ」

「はい」

せつせつと取り替えてこないとな、今のキャロは殆ど裸だし風邪悪化しかねん

「キャロ~ダウンしてないよなー」

「遅いですよー!」

・・・えーっと何でこの人が居るんだろうか

いや、居ても可笑しくないと言つた居て当然なんだろ?「ナビ局的に居たら困ると言つた

「フロイトさん？」

「なんですか？」

フロイトさんが凄く怒って立っていらっしゃった

「あの、お仕事は・・・

「それよつー」

「あ、はい。そうでした・・・フロイトさん、キャロの体を拭くのあとは任せて良いですか？元々男の俺がするのも難でしたので」

「・・・つと、分かつた」

たぶんキャロを一人にさせた事を怒つてるんだろうな、この人・・・本当に優しい人だよ

が、このその優しさが怒りに転じた時が恐いのでこの場はキャロを任せて俺への怒りを何処かに放り投げてもらおう

この人が子供を後回にしてまで怒るとは思えないからな

「やー最近ぶりだな

「アルフまで」

外に出ると今度はアルフが立っていた

「なあアルフ、フロイトさんって執務官だつたよね？なんで来れた？」

「あーそうだな、不思議に思つのも無理ないか。フロイト心配性だし、病気つて聞いたらすぐに飛んで行く勢いだつたらしいぞ？ 実際飛びそうになつた所を副官が止めたそつだけど」

副官さんの苦労とフロイトさんの慌てぶりが目に浮かぶ

「だから急いで一通り仕事を終えて駆け付けたんだと思つ」

「そうですか・・・ま、タイミング的には助かりましたけどね」

「なんでだ？」

「実は人が居なくて俺がキャロの体を拭いてあげてたんですけど、やっぱりキャロも女の子でしょ？ 隅々つて訳にも」

「あー・・・ま、そうだな～」

中の方で何度もキャロのくしゃみとその後にフェイトさんが心配すると言つやり取りが聞こえ俺とアルフは思わず苦笑していた

四十九話～side 雨水～（後書き）

短いシーンですが体拭くシーンの描写が・・・意外と難しい、で
すね

健全な・・・健全な看病風景になつたと思ひます

五十話～side 雨水～

前回のあらすじ

風邪を引いたキャロの為にフェイトさんやアルフがやつてくれる 色々と俺が出来ない事を頼む 途中でエリオからお見舞いの映像付き通信があつた 色んな人の看病の甲斐もありキャロ復帰

その後のお礼周りは少し面倒だった

「雨水さん、少し時間もられますか？」

「ん？ 良いけど？ 治つたとは言え一応念を取つて休みにしてるからな」

熱も下がつたしキャロはもう大丈夫だと言つたのだが最後には休めと命令形で言われた

心配性の集まりかと思つたよ・・・いや、まあ実際心配性の集まりだな

「キユク？」

「ガウ」

「フリー～とシロは遊んできてもいいよ」

キヤロは、匂を遊びに行かせ面と向かう

如何でも良いけどキヤロって髪伸びると癖つ毛が目立つよな

ワザとしたみたいで似合つてはいるから気には留めないが

「そろそろ自然保護の異動期間も終わりですね」

「あーそろそろだつたね」

すっかり忘れていた

次は適当に前の所に戻るとするか

特に希望も無いし今までと全く関係無い部署と言うのも有りかも知れない

「わたし、実は八神一佐にさそわれて機動隊に行く事になつたんですよ」

「へー機動隊? 大変だねー、頑張れ」

「毎回思いますけど雨水さんつてもしかして他人に関心ゼロですか?」

「そんな事はない」

他に言い様が無いからこいつ言つていいだけだ

「・・・正直反対されたと思つてました」

「なんで」

「だつてわたしは少なからず雨水さんと深い仲になれたと思いまして、機動隊は危険の多く付き纏つ最前線部隊です」

あーなるほど

確かに俺もキャロの選択の全てを賛成している訳ではない

機動隊といえばとキャロの言つ通り危険が多く毎年怪我を理由に止めている人間も少なからず存在する

そんな中に将来有望のキャロを入れるのは明らかに早い

「それはお前・・・キャロが決めた事なんだろ?」

「はい」

「無理やつでも強要でも脅しでも無べ」

「はい」

「なら俺が反対して如何するよ」

「え？」

ポカソント画面く口を開けたキャロが此方を見る

ちょっと可愛にな

「キャロが選んだ道なら俺は見守るくらいしか出来る事はないよ。
まあ手伝って欲しい事があるなら何時でも言ってくれて構わないけどね」

「うすこさん」

とても感動されているが割と普通の事を言っているだけなんだが・・・
・これは普段アレだからギャップとかつて奴か?

「にしても機動隊ね・・・出世狙い?」

「子供になんて発想してるんですか

「パツと思い付いたのがそれだけだった」

実際機動隊の昇級の速さは凄い

まあ危険物ロストロギアの探索、調査、確保、の全てをしているんだから当然と言えば当然か

「そついや機動隊は分かったけど何処の隊？一課一課辺り？」

「六課です」

「六？」

ん～？機動隊は一課から五課までしか無かつたと思ってたんだがな

「新設部隊ですよ」

「あー新設ね。つて事はテスト部隊か、それでキャロな訳ね」

恐らくその部隊の構成員は優秀な新人だろうな

八神一佐と言えば局で有名なエースの一人、その人から直接誘いが来たつて事は八神一佐が部隊長かな？

「それで？」

「ああ、普通エリート部隊の機動隊から幾ら将来有望とは言えキャ

口のレベルはまだ早いなって思つたんだよ。だから新設ならそれで
と納得した訳よ

「なるほど」

しかしそうなる俺もこの次について考えないといけないな

五十話～side 雨水～（後書き）

もうすぐ一年と言つ期間も終わりキャロの六課入りが出来そうですね

五十一話～side 湖水～

前回のあらすじ

キヤロから今後の進路について説明？される　俺の今後も決めないとこけないと思つ　約一週間後

自然保護隊に異動してからひとつとつ一年へり

「ほんと短かつたな！」

「・・・おひひやん

むれぬこ

今日、キヤロと俺とフリードとシロの見送り会が開かれる事になった

ちなみにシロは最初は自然保護に残る予定だったのだが付いてくると吠えて譲らなかつたので俺の使い魔として登録する事になった

思わぬ所で使い魔ゲット

「姫さん、ありがとうございます」

「ホント短く感じた一年、俺やキヤロの面倒を見てもりつて、迷惑掛けた事も多かつたでしょうけど本当に有難う御座いました！」

「キュクル！」

「ガウ！」

それでも態々警邏の人数を減らしてまで会を開いても「うつと少し悪い気になるな

「雨水、お前は次の異動先とかもう決めてんのか？」

「まあな、知り合いの所に行こうと思つてる」

「そか、残念だな。決まってないなら全然まだ居ても良いんだが」

「あはは、偶には遊びに行くさ」

馴染み深い場所の一つに入つてゐからな

「今日はお前も飲め！」

「酒か？んー法律上では飲めるんだが」

「だが？」

「生憎と飲んだことがない」

ま、祝いの席だし今日くらいは問題ないか

「・・・甘い」

「果実酒だしな」

「うす・・・うすひいさん」

何時の間にかキャロは完全に酔っていた、子供だからアルコールの回りが速かったのが恐らく原因だろう

取り合えず未成年の飲酒禁止がミッドの法に載っているか如何か調べるべきだな

「うわっ、ちょーーお前。誰かキャロに酒飲ませやがったなーー！」

俺はと言つと初めての酒の味は思つていた良く抵抗感が無くすんなり受け入れられた・・・と思つたがキャロ同様に最後のほうの記憶が無かつた

何かキャロが重要な事を言つていたような気がするんだけどなー

俺とキャロは自然保護隊の監視に見送られながら一年と並んで短いよつ
な期間を終えた

そして特別久しぶりでも無いが少し違つ氣分でシルビアに帰つてくる

実際割と頻繁にシルビアに来ていた俺は余り懐かしくも無い

「キャロ～！」

「あー、シリオ君！」

「あー、わつぱんぱぱキャロは」のまま六課だつけ？

「はー。」

そうか、それはとても残念だ

「あ、あの秋兄さん？」

「なんだ？」

「「」れは？」

「キャロの荷物」

送れば良いだろと言つたのだが送る分は送つてこないじへ、この無
駄 そんな量は手荷物だそうだ

女の子はこんなもんです。と妙に言い包められた

「重い」

「ヒリオ、試練だ。それはキャラとパートナーになる最初の試練だ、
つてな訳で俺はとても残念だが此処で別れさせてもらおつ

「残念そうに見えないのは僕だけですか？」

そんな事は無い

美少女キャラと歩けるのだから残念で無い訳がない。うん、そう言
う事で俺はさうひと逃げよう

「じゃ、二人とも六課で頑張れよ」

「はいー秋兄さんも頑張つて下さーーー。」

「たまには遊びに来てくださいよ、雨水さん」

「キュクルー」

「ガウ」

フリードヒシロもそれぞれ別れを告げている

さてこれから俺も次の仕事場に向かうとするか

アイツらと会うのは久しぶりだが・・・お土産くらいは買って行くべきか

五十一話～side 空水～（後書き）

本来始めてキヤロとヒリオが出会いシーンの話でした

前回のあらすじ

見送りの会をした翌日に自然保護隊を発つた ミッドでエリオと待ち合わせ そのままキャロとフリードと別れる 僕は適当にお土産になりそうな物を買つて次の仕事場の関係者の方に向かつた

時空管理局ミッド諜報部

別に此処が仕事場なのでは無い、ただ仕事の紹介人が此処に居るから挨拶くらいはしておこうと思つただけだ

「どもー、ヒューズ准尉はいますか?」

「あー先生!」

相変わらず諜報部の人間は忙しいのか殆どが外に出でているらしい、人の気配が目の前に居る一本のアホ毛とツインテールが特徴の知り合いの娘くらいしか無い

ぶつちやけエリシア・ヒューズ

探し人ヒューズの娘だ・・・今年で十三くらいだったか?

「エリシアだけか?」

「はい、パパはちょっと偉い人との話に行つてますので」

「そうか、なら仕方ないな。ほら、これお土産

「やつたー！ ケーキー！」

居ないなら仕方ない

そのまま帰らうと引き返すとエリシアに呼び止められる

「すぐ帰るんですか？」

「まあ」

「パパもすぐに帰つてきますので一緒に待つてましょうよ」

えー

と言いたい所だけどこれと書いて用も無いので久しぶりにエリシアと話すのも有りかな

「分かった」

「なら」「うちですー」

案内されるがまま奥の談話室みたいな所に連れていかれコーヒーを出される

随分と慣れた手付きだな

「警察官の人達って当たり前みたいに夜通しの人が多くて・・・コーヒーでも良いですよね？」

「問題ないよ」

別に構わないけどさつまつのは淹れる前に言つ物じゃないだろつか

「先生と会つのは久しぶりですね」

エリシアと俺の初邂逅はヒューズが怪我で前線復帰が出来なくなつてからだつたけど、ヒューズが自分の足を引き合つて俺にエリシアの家庭教師になれなんて言つもんだから

はあー怪我を引き合つて出すのはずることと思つ

「さうだね、十日ぐらいい？」

「一週間は経つてますよ」

「四日・・・誤差の範囲だな」

「全然ですよ・・・あはっ全く先生は相変わらずです」

それにして何だか少し会わないだけで結構成長しているような気がする

前に会つた時はもつと身長も小さかつたような・・・

「そう言えば先生?」

「ん?」

「表に居た白い犬つて先生の使い魔ですよね?」

「・・・あ」

「ガウウウ」

「『めん』『めん』忘れてたんじやないんだってー」

今にも噛み付きそうなシロを宥める

「先生いつのまに使い魔契約なんとしてたんですか？」

「ああ、コイツは使い魔として登録しているだけで別に契約はしていない、普通に魔力持ちの動物なんだよ。魔狼って言ってね」

「へえ～、自然保護に行って居た時に会つたんですね」

「そういひ」

初めて会つがシロは意外と早くエリシアと仲良くなっている

まあ観光区で初めての人と触れ合つ機会は多かつたし慣れたもんか

「あはつ、もふもふしてるうー」

「まだ査察官見習いなのか？」

「うん、パパが心配性だから～」

ヒューズの奴。エリシアが折角親のあとを継ぎたいって局入りしたのに過保護な奴だ

・・・ふうフェイトさんと言い、俺の周りの親たちは心配性の過保護ばかりだな

五十一話～side 雨水～（後書き）

エリシア・ヒューズ、本作設定では大体キャラの上でティアナの下くらいの少女ですかね

雨水が直接教えているだけあってそれなりの魔法を用意しています（お披露目の機会に恵まれるかは別ですが）

前回のあらすじ

ヒューズに会いに行くとヒリシアが居た 帰らうかと思ったのだが呼び止められ待つ事に シロに噛まれ掛けた ヒューズが誰かと共に帰ってきた

「ヒリシアちゃん、 ただいまー！」

「パパ！局で公私混同しないで下さいー！」

「変わらない奴だなー

「ヒリシアちゃんもパパって呼んでるけどねー」

「先生、 あの人をブツ飛ばして下せー」

「初めまして、 鑑定士を本職にしている雨水秋春と申します」

「あ、 どうも。 ユーノ・スクライア、 無限書庫の司書長をしていま
す」

へえこの人があの迷宮を整理した人か

整理されたおかげで事件の資料も探しやすくなったり今までチームを組んで探すような事を単独でも出来るよになつた

・・・って創立から今まで整理する人が居なかつたのかと突つ込んだら負けなのだろうか

「無限書庫の司書長ですか？それは凄いですね、あそここの整理はかなり労したでしょ？」

「あはは、元々そう言つのが得意だつただけですよ」

「ガウ！」

「ん、え？ 魔狼ですか？ 珍しいですね」

「物知りですね」

ま、あれだけ知識溢れる所に居れば当然なのか？

「あ、そう言えれば今日は如何してヒューズ准尉と？」

「いえ、実は遺跡調査の人員を借つよつと思いまして」

「諜報部からですか？ 武装隊の調査チームの方が良いのでは・・・」

「遺跡 자체は危険の無い物だと思われるのでトラップに詳しい諜報

部の方が奥まで入り込めるかと思いまして」

「あ～なるほど」

確かに諜報部はそう言つた裏工作に強いからな

騙し合ひ得意のメンバーみたいなものだしな、査察官つて

「・・・あれ？ 雨水さんでしたよね？」

「そうですけど？」

「間違つていたらすみませんが、テスター・ロッサ執務官とはお知り合いでですか？」

「まあ・・・知り合いだな」

キャロ経由だけど、もう十分俺の知り合ひと言つても問題ない。のかな？

「やつぱり一話には聞いていました！ 実は僕、フェイトやなのはと幼馴染なんですよー」

「ほおー、あの人達の交友関係はホント凄いね」

類は友を呼ぶと並つか

凄いな、今度フェイトさんに知り合いで一番偉い人は?とか聞いてみるか

「あ、雨水。お前の次の仕事、その遺跡調査だから」

「・・・さて、ユーノ司書長。また今度、エリシアもまたな」

「はい、先生!」

出口まで全力ダッシュ

しかし目の前からピー・・・カチッと明らかに何かがロックされた音がして

「開かね〜〜〜!」

出口を塞がれた

「帰せ!遺跡調査なんてやつぱ調査隊にやらせりドアホ!」

「急に口が悪くなつたな、お前さん。大体お前さんの目があれば古代遺跡程度の罠なんてないも同然だろ」

確かに観察眼で罠の情報を取りながら進めばトラップの位置が全て見えるんだから無いも同然なのかも知れんが

コイツは重要な事を忘れている

位置が分からうが避けれる能力が無いと意味が無いと言つ」と

つまりは次の場所にトラップがあると分かつていてもそれを解除する技術、回避する技術があつて初めて目が意味を持つ

「知るか！大体俺の身体能力知ってるだろ？！」

「あーその件なら解決だ」

ヒューズから手の平サイズの宝石を手渡される、怪しいので観察眼で見る

ロストロギア 宝石型の蒐集貯蓄タイプ 所持者ブースト系

「管理局員さん！此処にロストロギア違法所持者が居ます！」

「現在所持してるのはお前さんだけどな

「許可は取つているんだろうな」

「・・・先生、どうせパパは違法紛いですよ。聞くだけ無駄です」

だよねー、査察官はその情報で階級を無視した命令と女房の交渉が出来るからなー

恐い怖い

五十二話～side 滅水～（後書き）

蒐集型と言えば闇の書と似た感じのですね、そして一番怖い所は既に蒐集が完了していると云ふところです。ヒューズが無駄に裏で頑張りました

五十四話 side 雨水

前回のあらすじ

ヒューズがヨーノ司書長を連れてくる 気が合いそうな人だ 話していると唐突に遺跡調査が次の仕事と判明 全力で逃げようとするが失敗 仕方なく話を聞いた（多少抵抗はしたが）

古代ベルカが残した遺跡が海底に沈んでおり少し前にそれが発見されたらしい

「古代ベルカつてさー、戦乱期のでしょ？絶対単純な罠だけじゃないよ」

あー帰りてえ

トラップダイジェスト！

落とし穴

その下の針地獄

天井落下

水攻め

岩球

「やつてられるかあああああああ…！」

走つて岩球から逃げるなんてなんてベッタベタな

古代ベルカは戦乱時にかなりの技術進歩をしてるはずだろ？！それとも一周回つて原点回帰か！

「冷静に考えれば未調査つて事はどうせロストロゴニアが眠つてるつてオチだな、だつたら機動課に頼むべきだ」

まああの司書長はそいつの口弱そうだからホントに危険度の少ない遺跡だと思つたんだろうな

何せレジヤー施設建設予定でよつやく発見された今まで無害の遺跡だつたんだし

「こつそ、そのまま氣付かずに上車しちまえば良かつたのに」

何時までも愚痴を言つていってもしょうがないが・・・しかしせめて小隊ぐらいは欲しかつたなー

その時、観察眼が敵性反応を捉える。切らなくて良かつた安心情報だな

「ツー」

それにしても何で生物が存在するんだ

しかも敵性を持てるとなると知性もある。海底に沈んだ遺跡には隔離結界みたいな魔法で水は入らなかつたが外からの生物の進入は出来なかつたはず

唯一入れる魔導師だつて俺が始めての侵入者

「貯蓄開放、オプティックハイド、フェイク・シルエット」

ブースト系のロストロギア、所持者にロストロギアからの魔力配給と大きくは無いが魔法の補助もある

流石はオーバーテクノロジー。たつた一つで情報量が多すぎて全部見ようなんて思えない

だが如何やら魔法補助に重きを向いている節がある

フェイク・シルエットに先行させ目視出来る距離で走る

「何だアレ」

人型・・・女性のようだ

電子ゴーグルのような物を付けて平然と徘徊している
数は三体程度なのだがどれも同じ顔している。体型も背丈も同じ、
まるで人工物を匂わせる

「取り合えず行つてこい」

シルエットが近付いてみる

「貴方はイクスを知る者ですか」

斬られた

まさか質問されて答える前に殺られるとは思わなかつた、周りの女性は口より手の人が多いが此処まで極端な人は始めてあつた

我慢のがの字も知らんな

両腕の武装化、デバイスが無い所を見ると何かのスキルの可能性が高い

「おいおい・・・帰るか」

観察眼で相手を見る

屍兵器 マリアージュ 軍団兵 魔力ランクB

軍団・・・えーと、つまりは結構数が居るのか

「生命反応」

「やつべ！バレた、何でだ！貯蓄開放、クロスファイアショート！」

すぐに幻術魔法を切つて威力の低い魔力弾で弾幕を張る

蒐集貯蓄ロストロギアの在庫数は五つ

威力の高い大技用に一つ残すとして残り四つで対処するか

一つのロストロギアで射撃魔法なら十回、砲撃魔法なら五回、収束または儀式魔法なら一回
と言つた感じだ

「貴方はイクスを知る者ですか」

「戦刀で魔力弾を斬るって・・・全く流石は古代ベルカ、容赦ねえ
え」

遺跡を壊したらいけないので爆発系は無にしてと、懐から拳銃を取り出して引き帰しながら背後に向けて撃つ

後ろからは銃弾を弾く音が聞こえる

「イクス」

「挟まれた！貯蓄開放、バスター！」

目の前からやつてきたマリアージュなる固体五体に問答無用で砲撃魔法を放ち背を向け走る

やつぱり魔法は使えても威力が出ないか

瞬間砲撃一撃では倒してくれそうも無いし、かと言つてチャージする程の余裕は無い

はあーこれは軽く詰んだな

五十四話～side 雨水～（後書き）

早い段階でのマリアージュ事件始動（遺跡内でのみ）

まだまだ雨水の六課入りが出来ずにキャラとは少しの間、お別れになりそうです

五十五話 side ヒューズ

ミッド諜報部室

今日は珍しくも外での仕事が無いので可愛い娘の入れたコーヒーの味を堪能していた

「雨水の奴、大丈夫かね？」

「え？ どうした事？ パパ」

ちなみに雨水を古代ベルカの海底遺跡に調査を行かせて恐らく丁度中間くらいに差し掛かる時間である「タイミング

可愛いエリシアちゃんが小さめに言つた独り言に反応する

「あーほら、一応魔法が使える状態とは言え雨水の奴は魔法使用に当然慣れてないからな」

「先生なら大丈夫です！ 私の先生なんですから！」

・・・エリシアちゃんが雨水に憧れや尊敬の念を抱いているのは知つてはいるけど今回に限つては余りその理由じゃあ、とてもじゃないけど大丈夫とは言えないよな

「まーそれなら良いけどー・・・エリシアちゃんー敬語は止めてーー。」

「公私は分けるべきだと私は先生から教わりました」

教えた本人が公私を分けれでないとと思うが・・・

「といろでパパ」

「ん? なに? エリシアちゃん」

「あの海底遺跡はどれくらいの危険性があるんですか?」

「え?」

エリシアちゃんは真剣な表情で詰めより座っている俺の横に置いてある松葉杖を取る

「そう言えばもう一つ先生に教わりました」

「な、なにかな?」

「自分がこうだと決めたら正々堂々だろ? と不正堂々だろ? と貫け、そこで卑怯と言わても負け犬の遠吠えと思え。らしいですよ?」

負け犬の遠吠え・・・確か雨水の出身地方の諺だつたか

まあ意味としては査察官からしたら理解できるんだけど・・・子供に教える事じやねえよ

「パパの杖は私の手の中にはあります。そして私には家で帰りを待つシロちゃんの為に先生の事を知る権利があります・・・吐いてくれるよね？パパ」

家庭教師を雨水に選んだのは失敗だった？

「・・・一応聞いて置くけれども何でエリシアちゃんはあの遺跡に危険性があると思ったのかな？」

「古代ベルカと言えば戦乱期、そんな時代の遺跡に危険物が無いなんてまず有り得ません。私の推測では大方戦術か戦略兵器つてところですね」

「うんうん、エリシアちゃんの読み通り。あれこに眠つてるのは冥府の炎王と恐れられたイクスヴェリアと増殖兵器マリアージュだよ」

「はあ？！そんなの単独で調査する内容の任務じや」

「そうだね」

だけど今回は単独で行つてもらわないといけない理由がある

もしかしたら次元犯罪者のジョイルスカリエットの糸口かも知れないからね

俺の予想だと局の方は怪しい・・・小隊を組むには報告の義務があるからそこから情報が漏れて証拠隠滅されかねない

「先生を迎えてきまーす」

「もう遅いと思つた。それにエリシアちゃんの魔法は確かに強力だけど、それはあくまで一定条件を揃えた自分のテリトリー内での話だよね」

「・・・」の事はスクライア司書長は知つていたんですか?」

「知らない、査察官は自分が持つ情報をそう簡単に漏らさない。常識だよ?見習いなら覚えておかないと」

はあーエリシアちゃんのこんな悲しそうな顔は見たくないんだけどな

「・・・気分が悪いので早めに帰らせてもらいます。査察長」

「許可する」

俺は家族の笑顔を守る為に査察官になつたのに俺のせいで目の前の

家族が傷付いてるなんて皮肉すぎるだろ

ま、これも雨水を騙した罰かね・・・いや、今回に限っては利用しあつて言い換えた方が正確なのか？

五十五話～side ヒューズ～（後書き）

雨水が仕返しをする前にエリシアから精神的ダメージをくらひヒューズ

自業自得ですけどね

五十六話 side 雨水

前回のあらすじ

海底遺跡侵入 数々の罠を潜り抜ける 敵と遭遇 奥に向かう方に三体、出口に向かう方に五体 奥を選ぶ 残り蒐集貯蓄ロストロギア五つ、一つはそろそろ魔力切れ

「全貯蓄開放！制御無視ショット！」

残りの貯蓄魔力で通路に向けて弾幕を張る。これで相手には魔力弾の壁が向かってきているように見えるはず

マリアージュ燃焼液化

「ちょ！待つて！貯蓄開放！オーバルプロテクション！」

自爆用のスキルまで持つてやがった

前方通路から暴熱と爆風が襲つてくる

三体自爆の防御で一気に貯蓄魔力が減つてしまつた、即席で荒い術式の防御では魔力の消費が激しそぎた

帰りにはまだ五体以上居るのに

「いつなつたら奥地にあるロストロギアに賭けるか

現代的な機械に囲まれる中央に吸血鬼でも連想しそうな棺が一つ
人型か？まあどんな形であれ現状を打破出来るなら何でも良い

「全貯蓄開放、封時結界」

一つ丸々使った結果だ、これでマリアージュも一時は進入出来まい。
これで残り三つ

「未調査つて言つ割には誰かが手を付けている感じがするんだが」

だけど機材がどれも埃を被つていてると言つ事は此処最近は使われて
いない

あのマリアージュが探していたのはこれだらうけど・・・遺跡まで
来て見付けれないとアインツラは方向音痴か虫並みの知能かコノヤ
ロー

「よし機材は生きてる」

パスワードは・・・

その辺に散らかった資料を探せばあるか？

パスワードをメモとかに残すタイプの人でありますよつ・・・

「冥府の炎王？また物騒な名前だな」

何だ、この神風特攻隊みたいなスキルの王様は

自爆持ちの軍団兵を敵地に送り込んで戦わせて死に掛けたら爆破するよつにしておく・・・嫌われていたって言うのも信じられるな

「お、発見発見」

如何やら神経質かつマメな人間なようだ

凄く事細かく書いてある

見ていてイライラしてきた

「文字あつたーコレ本当に手書きだらうな？ーしかも文字が全部同

じ大きさだし！」

うぜえ、まーおかげで大体の事は分かつた

「冥府の炎王イクスヴエリア、兵は集い操主は此処に・・・我は力を望む。三連貯蓄全開放！」

人型兵器・・・まあ十中八九ベルカ技術結晶のユニゾンデバイスとかなんだろうな

ロストロギア三つ分の魔力を吸い棺が開く

「ああ・・・また、田代さんちでしょのですね」

・
・
・
え
?

「ハハハハハ?...!」

エリキヤロと同じくらいか？ってかよ、幼女？！あれ？兵器は？

「兵器…ひやべ…マリアージュ…うつよ…使えねえ」

「あ、あの

「ああ、えーとお前は悪くない」

悪くはないがこれで難易度が上がってしまった

この幼女を連れながら脱出とは

にしても懲々封印掛けて幼女を監禁とは流石つぜえ文字を書く奴だ

「聞こえてやる。」

「あ、はい」

幼女は放つておかれさせいか若干涙田である

昔のキャラ口を思い出すな・・・その経験は活かせそうにないがな

「あなたは何故、私を囚覺めさせたのですか?」

「俺が逃げる為だ」

「は、い?逃げる?あ、あの一つ良いですか?」

「どうぞ

「今は何時で此処は何処ですか？」

随分丁寧な話し方だな、親の教育が良いとこつ育つのか・・・ふむ

「いまは新暦七十五年で此処はミッド湾岸レジヤー施設建設予定地、海底遺跡だ」

「操主はあなたですよね？」

「ああ、その棺を開けて中の兵器を取り出すキーワードだったからな」

「・・・兵器

「あー悪いお前が兵器とは言つてないよ?!俺も中身は知らなかつたんだつて」

「中身を知らない?」

何だか先程から微妙に話しが合わないのは何故だろ?つか?

「我らがイクス」

「つひもつ結界の限界が近い?」

しかも数が増えてるし！あー！帰つたらヒューズをシバく……！

五十六話～side 滉水～（後書き）

イクスヴェリアに關してですがドラマCDの際も殆ど登場しておらず自分としては深く性格を掴めていないので一番の原作性格崩壊キヤラになると想います

前回のあらすじ

マリアージュに終われつつ最奥に それっぽいの発見 一発逆転を
目指し封印解除 何故キャラより少し下くらいの幼女登場 マリア
ージュが追いつきそう

封時結界はかなり頑丈だがマリアージュの奴ら、自爆攻撃で破壊し
に掛かってきている

「ああ――――マジやべえ！」

「大丈夫ですか？」

「お前は意外と落ち着いてるな?！」

「慣れてますので」

それはまた嫌な人生だな

こんな状況に俺は慣れたくは無い

しかし蒐集貯蓄口ストロギアの貯蓄魔力を全て使ってしまった以上
は手元にある質量兵器で如何にかするしか無い

と言つても道中拳銃は殆ど使って弾の数がもう無いに近いし手榴弾

なんか使って天上降つてきたら悲惨な結果しか生まない

「あー、そういうやお前、魔法とか使える?」

「魔法ですか? すみません、私は・・・」

「そかあー、まあまだ魔法を習う年齢でも無いよな」

「いえ、私は見た目通りの年齢では有りません」

見た目通りの年齢じゃない? ま、それはあとで考えるとして結界も
かなり薄くなつてきている

馬鹿みたいに自爆しやがつて何体居るんだ

「あの・・・操主様」

「・・・ん? それは俺の事か?」

「え? 先程あなたが操主と言つましたよね?」

「言つた、ね。うん、言つた」

「何故マリアージュ達に追われているのですか?」

何故か。何故だろう、探し物が一緒だからとかが一番良い所の理由

か・・・今更だけじ中身は幼女でしたつて言つたら帰つてくれるかな?

でもマリアージュつて命令を受けただけの兵器だしなー

「あれだよ、マリアージュも此処にあるはずの兵器を求めてたっぽい。で、途中見つかったら行き成りアレ」

「いえ、そうではなく。何故操主なのに追われているのですか?」

「・・・え?」

「え?」

冥王、操主、軍団兵

あ―――ツ――!

「ちよー・ちう・事か!自己紹介をしよう!俺は雨水秋春!お前は!」

「イクス・・・イクスヴェリア。あなたが探ししている、冥府の炎王です」

「なるつほど!」

「これでマリアージュの全てが解決！」

「イクス！」

「？」

「マリアージュへの命令の出し方を教えてくれー！」

「・・・嫌です」

まさかの伏兵だった

諦めたように悲しそうに裏切られたようにイクスは俺の申し出を断る

「お願い！此処に来る間に魔力も死きてやつてね」

「此処を抜けたあとは如何するのですか？マリアージュは単体で既に強力な兵器です、更に私はそのコアを無限に生産でき軍団を作ることが出来る、そして最後にあなたはその操主です・・・再び問います、此処を抜けたあとは如何するのですか？貴方が操る法を知らないのであれば生み出すだけの私でも守れる平和があるやも知れません」

つまりは危険物なので渡せませんって事か

観察眼・・・と言いたいところだけど、一応これもロストロギア級

なんだれつぱつと見て理解できるとは思えない

「……言ひじゃないか、ガレア王国で戦乱と残虐を好んだ邪知暴虐の冥王様」

「……。」

睨み合ひ

やつば、妙な誤解を受けてるな。そりや行き成り兵器貸してつて言つ奴に碌な奴は居ないだろうけど兎に角いまは状況打破したい

「それは私の望んだ事では有りません」

「望むと望まざると事実だ。それにお前も死にたくないだろ？
さあ、力を貸してもらおうか」

「私はもう十分と生きましたし生きるには人を殺し過ぎました」

平行線を辿る会議ほど無駄なモノは無いってそういうやつが聞いた
なー

それに悪役調で話したせいであとに引けなくなってきたし……唯一
一助かつた所と言えば善王と言つ事か

マジで伝承通り魔王だったら交渉にもなりないからな

五十七話～side 滉水～（後書き）

いまいち悪役が似合わないなーとか思つたりします（チンピラとかなら似合こそうだけじ）

前回のあらすじ

マリアージュが結界を壊さない内に脱出の為の作戦立て 逃げ道無し 幼女が冥王と判明 だけど操主としての力を渡す氣無し 交渉しだいではいけると思うが時間が無い

整理するか

まずは目の前の幼女はこれで千年と存在している王様。屍丘器のマリアージュのコアを生産できて操主の事を知っている人物

誰かが調べた伝承では魔王だが事実は真逆らしい、誰かさんは調べてはいたが表面の事しか知らなかつたよつだ

「交渉をしよう、冥王」

「する気は有りません」

「まあそう言つな。もしこの場を抜けたら操主の権限を渡す・・・。
なんて魅力的だろ?」

「・・・何を考えて」

「最初から俺はマリアージュから逃げて外に出る為にお前を呼び起
こしたんだ、不思議でも無いだろ?」

イクスの視線が鋭く突き刺さる

小さくても王、威厳は有りか。こっちも特典スキルの統率力が無ければ圧倒されてたかも知れない

「その言葉に嘘偽りは有りませんね？」

「無いね、嘘なんて付く必要性が無い。それにお前は平和が好きなようだが俺も平和や平穏ってのは好きでね、いまの世の中の空の色を知っているか？」

「灰色じゃないのですか？」

定期的に目覚めているだろうけどやっぱり何処も戦場だったみたいだな、疑り深いのも納得がいく

「ふふ、正解は外で確認しようぜ」

「・・・分かりました、信じます。操主様」

「そういや今に思つたが何でお前、王様なのに命令権が別にあるんだ？」

「王は開戦の狼煙を上げる者ですが戦場で戦つ者では有りません、故に指揮権や命令権は戦場の兵士や騎士に有ります。王は城で構え下の戦場をただ見守り殺しの罪を一手に担うしか出来ないのです」

・・・ 真面目だなー

今更にやつぱり王様なんだなーと思つ

「さー始めようかー」

「はー、宜しくお願ひします」

「ずぶ濡れだな」

「ですね」

あの後、マリージュを退ける事には成功したのだが初步的な事を忘れていた

あの遺跡が海底だと言つ事に・・・

死ぬかと思つた、主にイクスが

俺はバリアジャケットのおかげで水圧等もある程度平氣だし酸素ボンベも持ち運びタイプのせいぜい三十分も持たないのを所持していたから良かったがイクスはそれらの準備無し

苦労した

「報告は明日にするか」

シロはそう言えればエリシアに預けているんだつけ？キャロも六課の女性寮だろうし今日は一人もしくはイクスとの二人か

「操主様」

「ん？ あー そうだつたね・・・えーっとメンドイな、なるほど操主の力は本人の魔力と別の力で動いてるのか。流石オーバーテクノロジー」

渡すのはそれ程、難しくなかつた。一定のキーワードさえ言えればあとは勝手にトンデモ魔法科学が如何にかしてくれる

管理局に報告したら歩くロストロギア認定だな

「約束は果たされました。では・・・」

「ちよつと待つた、お前は何処にトンズラしようとしてる」

「トンズラ？逃げると言つ意味でしたら、それは間違いです。私は静かに眠るだけです」

「何処で？まさか俺がお前をその辺で野垂れ死ぬのを許容するとは思つてないよな？」

「あなたには関係無いです。一時は協力しましたがこれまでです」

仕方ない、俺が放置したとかイチャモン付けられるのは嫌だし

「誘拐しようつ

「はー？」

「さあ帰ろう！」

「ちょー降ろしてー降ろして下さーー！私は生きていてはいけない存在なんです！」

「暴れるな。ただでさえ、いつも濡れて体力無いんだから

「だからー見捨ててくれて結構とーーー」

だからと言いたいのははーいちだ

濡れた状態で更に海底からの無理な脱出でかなり衰弱した幼女を放り出して帰つたとなつたら管理局員とかの前の人間としてのモラルが問われるだろうが

ま、それでも誘拐は言い過ぎたか。この場合は、無理やり幼女を連れ出しているのだから・・・やっぱり誘拐だな

五十八話～side 雨水～（後書き）

小さくても王様なイクス・ヴェリアーです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284x/>

高校生のリリカル爆走

2011年11月20日00時29分発行